大正六年九月十四日第三種郵便物認可・昭和十六年六月廿五日印刷納本・昭和十六年七月一日發行（毎月一回一日發行）

建築と社會

7

日本建築協會

第24輯第7號
昭和16年7月1日

㊎ ルーフイング・フエルト公定價格　昭和15年10月15日

種別＼要項	重量	面積	製造業者販賣價格	卸賣業者販賣價格	小賣業者販賣價格
アスファルトルーヒング	20瓩	21平方米	圓 4.70	圓 5.20	圓 5.70
	25瓩	〃	5.85	6.45	7.10
	30瓩	〃	7.05	7.75	8.50
アスファルトフエルト	10瓩	〃	3.15	3.47	3.80
タールフエルト	10瓩	42平方米	2.85	3.14	3.45

イ、本表價格ハ、ストレートアスファルト又ハコールタールノ浸透量原紙重量ノ80%以上ノモノノ價格トス

ロ、製造業者及卸賣業者販賣價格ハ買主店先渡價格トス
但シ樺太、朝鮮、臺灣、南洋群島、關東洲、滿洲又ハ支那向ノ場合ニ於テハ賣主最寄港船積渡價格トス

ハ、包裝費及荷造費ハ賣主負擔トス

（砂付便利瓦及特許ギルソイド共從來通り）

三星印

三星印砂付便利瓦・三星印ルーフイング及フエルト
專賣特許ギルソイド防水工事責任施工（陸屋根地下室）
アスファルト應用各種加工品・床舖工事三星サイドリユーム
耐火・耐熱・防音・保溫・ —石綿代用品— 三星岩綿各製品

大阪田島應用化工株式會社

營業所　大阪市北區中之島五丁目三〇　電話土佐堀 1323 5682 6221 7294

田島應用化工株式會社　日本岩綿工業株式會社　日本木材化學工業株式會社
三星產業株式會社　三星セメント工業株式會社　合資會社宮城アスファルト研究所

建築と社會

第24輯　第7號　　昭和16年7月發行

七　月　號

目　　次

日本城郭の種類及び構造……鳥羽正雄…(1)

近世日本城郭に於ける防備的施設……城戸久…(12)

ロンドン塔……藤島亥治郎…(20)

二條城二ノ丸に就いて……澤島英太郎…(23)

城郭と國防……古川重春…(31)

桃山江戸時代に於ける鯱鉾の遺構……佐藤佐…(37)

大和路の茶室・2・……長閑堂と龍松庵……岡田孝男…(29)

☆紫　烟　室☆

洋家具の話(第一)……平尾敏也…(40)

會勢幹事會主催八幡宮圓福寺廻行記……(42)

倶樂部室主催和歌山方面見學記……(43)

☆新　建　築　欄☆

二條城（京都）大和路の茶室（岡田孝男）家具裝飾・ある新聞社の編輯記者席（アメリカ）

會　　報……(44)

防空建築施設に關する講演會概況……(47)

後　　記……(51)

會　　告

今般常務（編輯）政岡基次氏辭任に付昭和十六年六月十九日開會の評議員會に於て補缺選擧を執行致しました結果下記の通り當選相成りました。

常　務（編輯）　增　井　敏　克　氏

昭和十六年七月一日

社團法人　日本建築協會

見學休止の件

七月見學は、大日本養豚場の豫定なりしも、今尙工事の關係上、先方完成の運びに至らず、加ふるに暑氣の候とも相成申候條七、八月は見學休止の事に致し候間不惡御諒承被下度

追而見學會の代りにと目下折角考究中に付成案を得たる場合は次號會告仕候

會員倍加お願ひ

豫而お願ひの一人一名新入會者御紹介の儀は、是非御協力被下度特に願上候

會勢幹事會幹事長　谷　　民　　藏

編輯事務員異動

囑託　小　坂　常　男

五月三十一日附、編輯事務囑託ヲ解ク

山　形　憲　一

六月三日附雇採用、編輯事務擔當

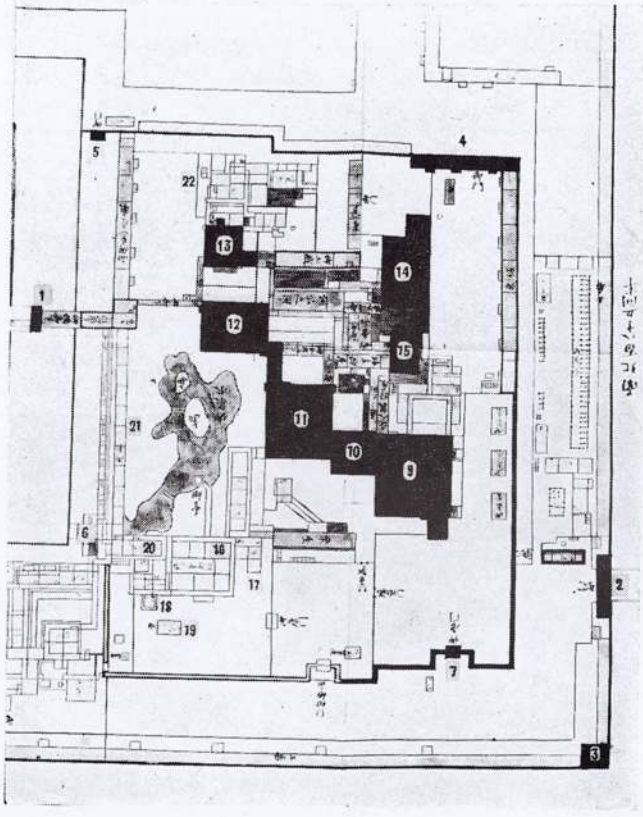
社團法人　日本建築協會



1. 二條城二之丸大觀（東南隅櫓上層屋根より見る）

二條城二の丸

寫眞・澤島英太郎



第2圖解說

本圖は帝室圖書「寛永行幸御城内圖」の二之丸を中心とする復寫印畫紙上に寛永三年後水尾天皇行幸當時の殿舍の樣子と、現存遺構との關係を明確ならしめる爲に手を加へたもの。1から15までの黑く塗つた建物が國寶の現存遺構であり、16から22に至る建物が寛永行幸當時二之丸内に建つてゐた主要殿舍である。圖を通じて寛永行幸當時の二條城二之丸が如何に結構善美を盡したものであつたかを十分に推察することができよう。

1‥本丸櫓門、2‥東大手門、3‥東南隅櫓 4‥土藏、門、番所附、5‥鳴子門、6‥(桃山門)當時未だ無し、7‥唐門、8‥築地、9‥遠侍、10‥式臺、11‥大廣間、12‥黑書院（小廣間）、13‥白書院（御座之間）14‥臺所、 15‥御清所、 16‥行幸御殿（大廣間との間、池の東に御次之間あり）、17‥中門、18‥御休息間、19‥御鳳輦屋 20‥中宮御殿、21‥御長局、22‥御殿、御臺所、御風呂屋

尙圖示の範圍外に、北大手門、西門、西南隅櫓、土藏・二棟、北及南中仕切門の國寶建築物がある。



3. 二條城二之丸唐門（正面）

4. 二條城二之丸御殿（御車寄及遠待）

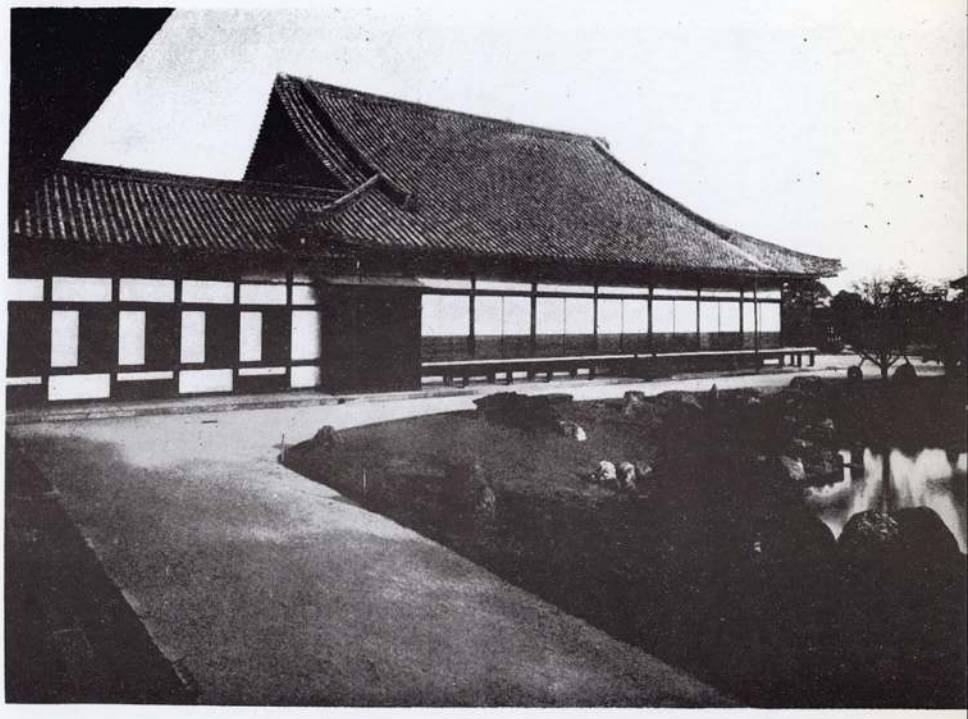


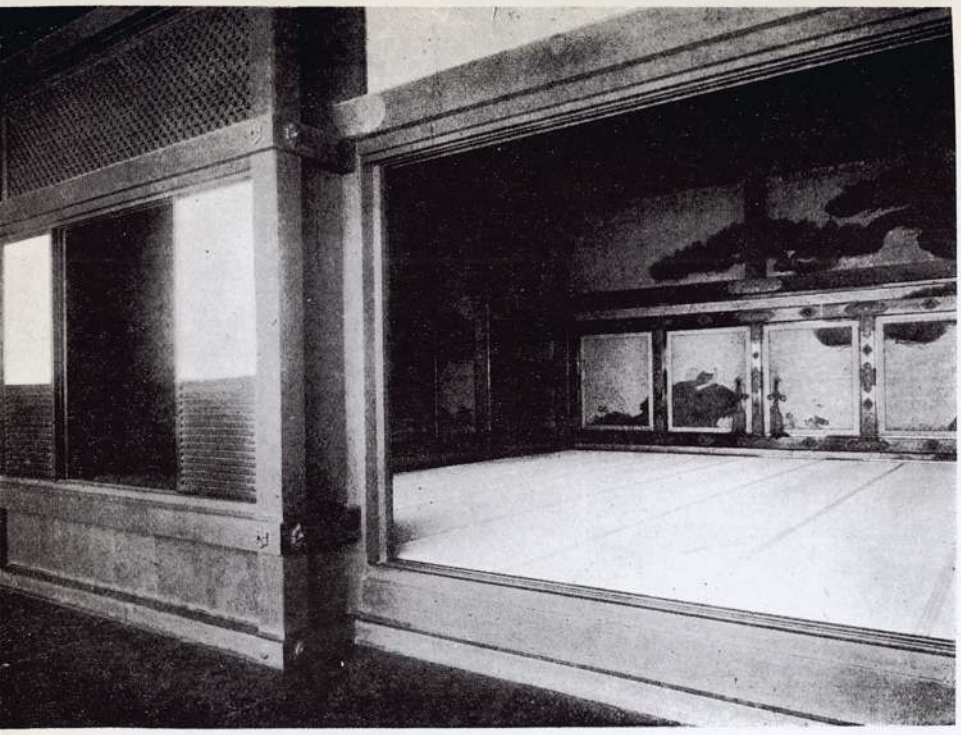
二條城・二の丸・2・澤島英太郎



5. 二條城二之丸御殿（大廣間、南緣、式臺、遠侍、西面を見る）

6. 二條城二之丸御殿大廣間（西面）庭は名勝二之丸庭園





7.

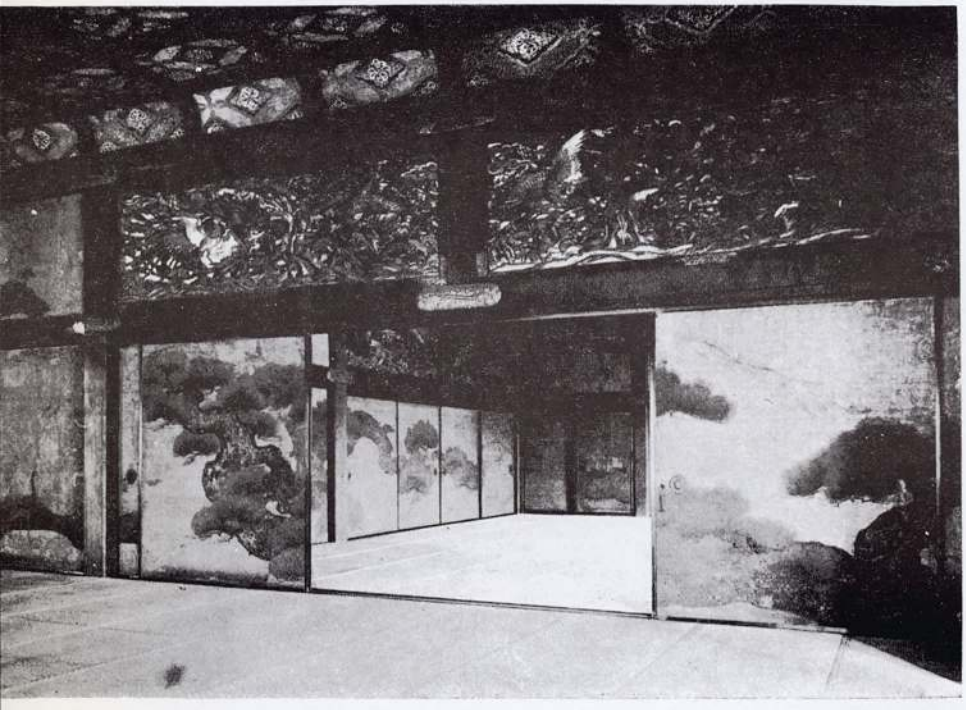
二條城二之丸御殿

大廣間上段

（西入側より内部を見る）

二條城二之丸・3・

寫眞・澤島英太郎



8.

二條城二之丸御殿

大廣間（二之間三之間）

9. 1 二條城二之丸御殿
（中央は大廣間）

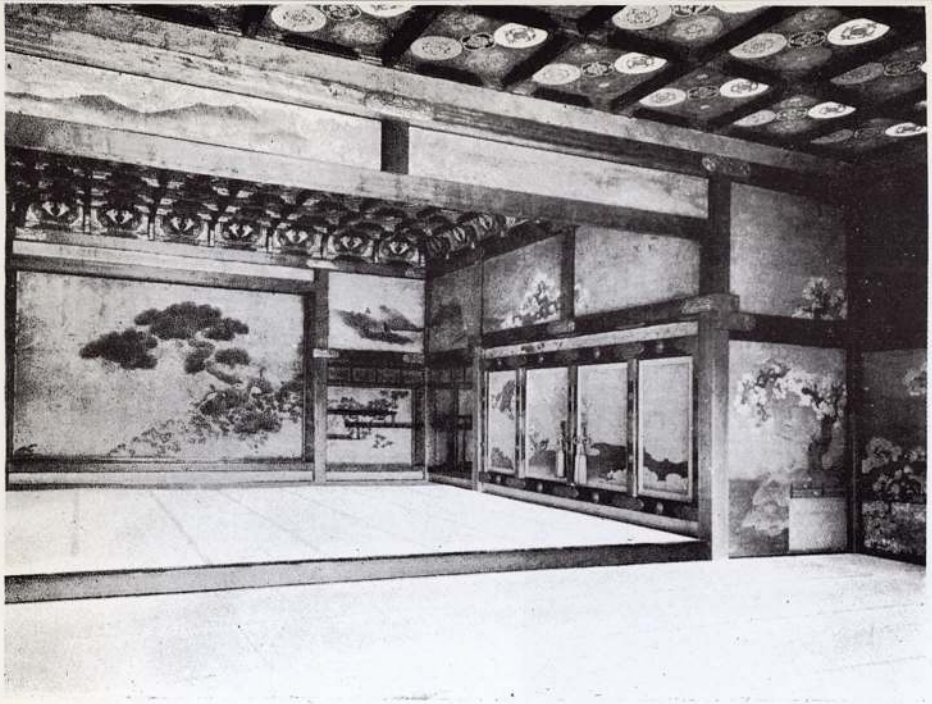




9. 2 二 之 丸 庭 園

10. 二條城二之丸御殿黒書院
及蘇鐵之間（東面）





11.
二條城二之丸御殿
黒書院上段之間

二　條　城　二　の　丸　・　4　・

寫　眞　・　澤　島　英　太　郎



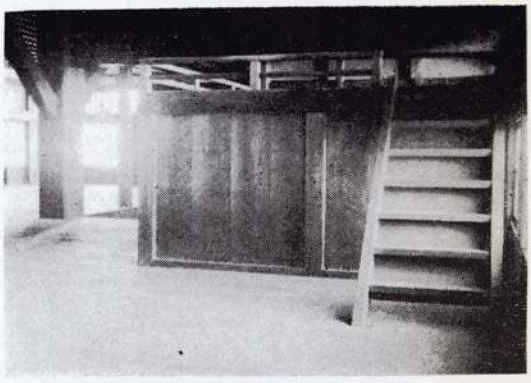
12.
二條城二之丸御殿
白書院（西面）



13. 二之丸大曇所の一部（東面）

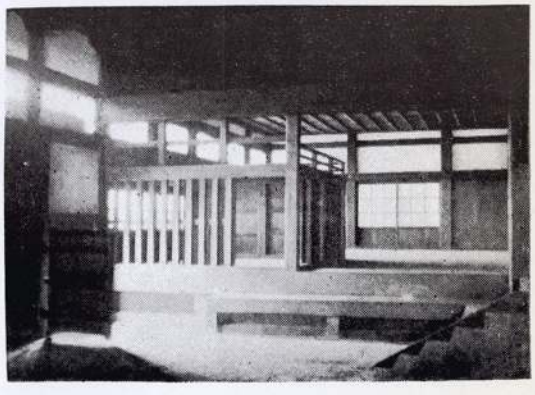


14. 二之丸御清所



15. 二之丸大曇所内部（見張所）

16. 二之丸大曇所内部（土間より見張の方を眺む）



専賣特許　便利な

ラス・モザイク

塗料化されたる
明日のタイル



大阪・大鐵映畵劇場　食堂　ラスモザイク施工

日本陶織株式會社

大阪市東淀川區豊崎西通3丁目
電話豊崎㊲1388番カタログ贈呈



寧樂屋家具裝飾店（ナラヤ）

大阪市西區南堀江通1丁目43番地
（木綿橋電停前）
電話屋川 ㊸ 2663・7932



序　說
　城郭の種類通說
　城郭の構造通說
中世前期（平安時代中末期・鎌倉時代）
中世後期（建武中興・吉野時代・室町時代）
近世前期（安土桃山時代・江戸時代初期）
近世後期（江戸時代中期）
結　語

序　說

「日本城郭」といふ言葉を、日本に於て築造され且つ使用された城郭といふ意味に解すれば、開闢以來數千年の間、各時代各地に種々な場合に築造された城郭全部を包含するのであるから、その種類と構造とは千差萬別といつても過言ではあるまい。今之を城郭史として、年代に關係させて考察する場合には、以下の四大時代八小期に分類することが出來る。

上　世
　前期　大化以前
　後期　大化以後、平安時代初期
中　世
　前期　平安時代中期、鎌倉時代
　後期　吉野時代、室町時代
近　世
　前期　安土桃山時代、江戸時代初期
　後期　江戸時代中期
最近世
　前期　江戸時代末期
　後期　明治維新以後

上世の前期は、日本固有の簡素な築城であつた。その後期は主として對外關係の大規模な城郭で、大陸の樣式を採用する所が少くなかつた。また東北地方では、蝦夷地經營のための城柵が構築された。勿論此等の築城も、日本に於て日本人の築造したものであるから、日本的性格は多分に含まれてゐるが、今日遺構が多數に殘存し、且つ日本的性格を非常に顯著に發揮してゐるものは、武家の築城である。此れは「武士道精神」の顯現とも致すべきものである。本誌上では、特に日本築城の代表的なこの武家の築城に就いてその種類と構造の概要を述べよう。

武家は平安時代に發生し、鎌倉時代に大成し、吉野、室町を經て彌々發達して、安土桃山時代、江戸時代に及び、明治維新によつて解消した社會的存在である。

武家はその間に、地方に於ける農業者より起り次第に政治上・軍事上・社會上の地位を高め、遂に幕府を開くに至り、七百年に亘つて實勢力を掌握してゐた。下級の者と雖も、武士は士農工商の上位に位し、その首腦者は「お大名」「公方樣」といふ特殊な觀念を以て考へられる樣な地位にまで達したのである。從つて、等しく武家の存在した時代といつても、その初期と末期とを比較すれば、著しい差が存するのである。其故、武家築城を觀察する場合には、時代を分けて考へないと混雜の甚しいものとなる。

城郭は、武家そのものゝ向上發達に伴つて、その據點、住所として發達し、當時としては、軍事上、政治上、社會上、經濟上乃至は時代文化一般の中樞點であつた。この點、城郭は單に軍事史や建築土木史上重要性があるのみでなく、一般文化史上、極めて重要視すべき興味深い存在なのである。

明治維新以降の築城は、歐洲の影響多く全く近

※ 筆者は内務省神社局考證官・

代式となつたもので、これは又別の部類に屬する。

城郭の種類通說

軍事的目的を以て構築された防禦設備たる城郭は、時代、場所、築造者、築造目的、攻撃兵器、精神文化（思想、信仰、學藝）等の狀況により、其々特徵を有してゐる。之を種々な着眼點から分類してみると、一般的には下記の様な種類が擧げられる。

使用時間……臨時築城、半永久築城、永久築城
規　模……大城、中城、小城
地　形……山城、平山城、平城
相互關係……單獨孤立築城、集團聯絡築城
軍事用途……根據築城、補助築城、連絡築城、境界防備築城
攻防關係……攻撃（攻勢）築城、防禦（守勢）築城
防禦地域地勢活用……「城堅固の城」「所堅固の城」「國堅固の城」（江戸時代、軍學者說）
政治社會生活用途……居館防備築城、政廳防備築城、都市防備築城、社寺防備築城、陵墓防備築城
攻守兵器關係……礫矢關係築城、銃彈關係築城、砲彈關係築城

以上は、我が明治維新前の築城に就いての考察である。今後は攻撃兵器の變化發達によつて投下爆彈、戰車、火焰放射、毒瓦斯、等に關しての築城もあることになつた。

城郭の構造通說

城の構築は、城そのものゝ防禦上攻撃上の位置地勢、竝にその附近の要害との關係等を考慮し、此等を條件として、其處に人工が加へられたものである。その要素の種類を表示すれば、凡そ下記の如きものがある。表中文字下に——を附したのは、江戸時代軍學者の用語である。

地位の選定
天嶮の應用
（地選　地取）
- **位置**……城堅固、所堅固、國堅固
- **地勢**……平城、平山城、山城
- **附近の要害**……山嶽丘陵、川澤湖沼海洋港灣、島嶼、巖岩、天然の水利通路の類

上記條件を應用し、之に人工を加へるのである。先づ土地を區劃し、その上に各種の障碍物其他を構築するのである。其等の要素の種類には、下の如きものが擧げられる。

經始（繩張）
- **城內、城外曲輪の配置**
  形狀、配置、高低、面積、幅員、方向、其他

土工（普請）
- **壘**（土居、石垣、其他）
  形狀、位置、大小、壘內外の通路、階段、資材（質、形）、築造方法、其他
- **濠**
  形狀、位置、大小、掘方、水の有無濠と通路等との關係、其他（附）水源、給水關係、井戸、泉、池、上水道、下水道、塵捨、着船場、其他
- **其他の土木工事**
  土橋、坂道、階段、隧道、坑道、道路等の曲折、削平、削崖、植樹植竹植草、其他

建築（作事）
- **建築物**
  種類（廓砦、抗、櫓、垣、塀、棧敷倉庫、穴藏、城主、士卒諸民の居宅政廳、門、橋、長屋、多門、櫓、天守）
  各種建築物の位置、構造、大小、建築術、建築材料
  部分的構造（狹間、石落等の類）
  部分品（鯱、瓦、彫刻、金具等）
  防禦力
  外觀

城下町施設
- 位置、地勢（特に城郭との關係）
- 町割、道路（幅員形狀）
- 圍郭、堀割、木戸口
- 神社、佛寺等の配置

中世前期（平安時代中末期、鎌倉時代）

この時期の城郭は、地方の莊園に住んでゐた武士の自家防衛の居館が主で、戰爭の場合には若干臨時築城も行はれた。源平の二氏が京都に於て勢力を得、更に源氏が幕府の首腦者となり、諸國の武士が之を中心として、組織化されるや、經濟生活も社會的地位も、政治上の權威も次第に向上して來た。しかし、之を近世の大名などに比べるとなほ低かつたので、その構築する城郭も小規模且簡素なもので、人工よりも寧ろ天險を多く活用したものであつた。

（一）種　類

常時の居館と戰時の山城と野戰的臨時築城とがあつた。當時此等の築城を稱して、城（じやう）若しくは城郭（じやうかく）といひ、之を構築することを構へるといつた。城郭の郭の字には、土扁をつけたものが主として用ひられた。

（二）構　造

常時の居館も戰時の山城も、又臨時的野戰築城も、出來得る限り天險を利用することにつとめ、人工を最小限にして、しかもその効果を高度に發揮せしめようと努力してゐた樣である。即ち純然たる平野地方では、河川沼澤に倚り、丘陵のある地方では、その崖上或は半島形に突出した先端を利用した。概ね居館と山城とは別で、この兩者を完全に連合せしめた樣な、近世の平山城の如き大規模なものは無かつた。

繩張は、居館の平城の場合には、正方形若くは長方形の單郭で、或場合には之を連絡した樣なものもあつた。壘の線には側防射擊等に利用する樣な屈曲がなかつた。また半島形の丘陵を利用した居館にあつては、その地續の方を二重乃至三重に空堀を掘つたものもある。これも經始は單純である。山城は獨立峰の頂上竝に山腹に數段の削平地を設けたものであるが、その繩張は自然の地形によつたものであるから、不規則な形をなしてゐる。且つ平城に於けるが如く、郭相互が完全に連接せず、個々別々に山中に散在するといつた樣なものもあつた。この點は近世の綜合的、集權的な繩張と違ふ所である。

壘は土壘で、高さ1間乃至2間を普通とし、敷幅もこれに準じて狹く、壘線に屈曲が無い。壘の上若くは外面には、必要に應じては柵、塀、逆茂木等を設けた。支那や西洋の城壁の樣な女牆が無く、戰時には楯を列べた。

堀には水濠と空堀(乾濠)とがあつた。幅2、3間乃至7、8間であつた。これは、城外對岸の敵を弓で射るのに最もよい射程によつたからであらう。丘上のものは空堀を用ひ、その他も諸事皆自然に依頼する所が多く、平城よりは、人工が比較的簡單で濟んだことゝ考へられる。

臨時の山城にあつては、峰續きを掘切り、特に通路を險峻にし或は迂曲せしめ、斷崖を急傾斜にする等の人工を加へた。用水は井戸、泉、川、池等を用ひ山城にあつては大いに注意した。

堀には橋を架し、或は土橋を設けて內外の連絡を圖つた。

平城にあつては、城內に「人呼びの丘」といふ小山を築き、こゝに上つて家の子郎黨を指令したり、展望の用に供したりするものがあつた。

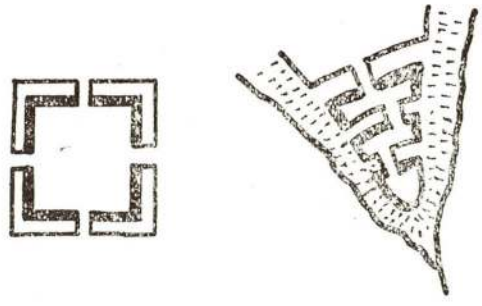
建築物としては、門、塀、櫓等があり、門、塀等は普通の住宅建築や寺院建築などと大差なく、幾分堅固であつたといふのみで、特殊な構造ではなかつた樣である。

櫓は後世の棧敷の如きもので、近世初期の歌舞伎の芝居の入口にある櫓の如きものであつたらう。また高櫓といつて、後世の相撲櫓や火見櫓などに似たものもあつた。これは攻城の場合にも野戰の場合にも用ひられた。

當時の櫓や塀は大抵木造のまゝで、表面に土を塗つた耐火構造のものは少かつたらしい。但し臨時築城でも、表面に泥を塗つた場合もないではなかつた。倉庫には塗込造なども出來て來たが、城郭建築には未だ十分採用されなかつた。

高櫓、人呼びの丘、塗込造は、それぞれ近世初期に大成した天守閣の一源流をなすものであらう。

この時期の末近くに、極めて特例として、弘安役に博多灣沿岸に石壘を築いて、元軍の上陸を防いだことがあつた。いふまでもなく國防的のものである。これは波打際より少し陸の方へ築いた高さ6、7尺乃至1丈位の石垣で、當時それを石築地といつた。表面石で中が土のもの、小石のもの全部相當の大きの石のものと三種あつた樣である。



1. 中世前期館城の二型

中世後期（建武中興・吉野時代・室町時代）

この時期は、建武中興から織田信長の覇權掌握まで約250年間で、我が國に於て、城郭が最も多く使用され、必要に迫られて極めて活潑な且つ何等拘束される所なしに發達した時期であつた。部分的構造上に於ても著しい進歩の跡が認められる。城は專ら國內的な戰に用ひられたが、築造者使用者たる武家の內部に種々な變革があつて、その各個は大規模になり、その內容は複雜になり、相互關係は組織化されたので、城郭の構造上にも之に伴ふ著しい變化があつた。

（1）種　類

前期には、戰爭が單純で、時間的にも比較的にも短期間であつたから、城の種類も單純であつたが、元弘、建武以來、戰場は全國的に擴大し、しかも爾來250年も戰時狀態が繼續したので、種類が多くなり、組織的になつて來た。

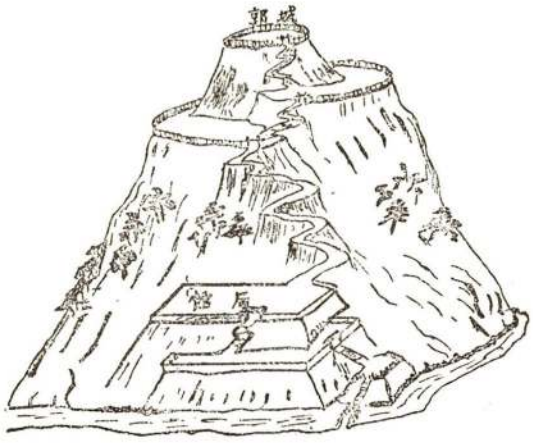
城の用途からみると、本城、支城、陣營の城、境界防衛の城、連絡の城、退守の城、攻擊用の城等があり、その他、都市の防備、寺院の防備、港灣の防備、船舶の根據地等特殊な目的の城もあつた。

本城は根城、大根城などと稱せられ、大領主の居城であり、一軍の根據地である。江戶時代の大名の居城は、この本城が平和時代になつて、他の純軍事的支城が廢された後、唯一つ殘つたものである。

支城は本城に對する補助的な城で、根城に對して枝城・端城とも稱せられた。出城・子城・外城取手・取出・砦・疊・塞・堡なども皆この類である。境を守るものを境目城、兵を駐屯せしめ守備せしめるものを番手城、連絡用の城を繋の城、殿の城、退守の城を詰の城といつた。

攻擊用の城は、敵城を攻圍する際、敵の後詰或は城兵の出擊に備へるため設けたもので、向城・附城・對の城などともいつた。陣營の城は、攻城野戰の際、主將などの居る所を臨時に簡單に築城したもので、陣城といつた。江戶時代に地方民政を掌る代官の役所や、無城の領主の館を陣屋といつたのはその名殘である。

邸宅に防備のあるものを屋敷城とも稱した。また城郭附屬の城下町に防備を施したものを宿城と稱した。



2. 山城の標本圖

水軍根據の城は、水軍を一に「海賊」と稱したので「海賊城」とも呼ばれる。

上代の佛教が極めて盛であつた時代には、信仰上から寺院を城郭的意味に用ひたが、武家時代には寺院の建物・地形等を俗人が城郭として利用し又は寺院自からが、僧兵を擁し或は信者の武力を借りて、自衛上防備を施すことも行はれた。

（2）構　造

この時期の始には、人工の多く加はつた平常の居館と、天險を利用することの多い戰時の山城とが、概してかけ離れてゐたが、戰時狀態の永續とその期間に發達した築城技術の進歩と、城郭を利用する武家そのものゝ集中增大の傾向とが、平城系統の居館と、山城とを次第に接近せしめ、遂に末期に至つて大規模な平山城を成立せしめた。戰國時代の山城の高いものは、麓から150米乃至200米位の高さが、その山頂まであるものが少くない。勿論城郭は、單に頂上のみではなく、この山頂を中心として、山腹や山麓等にかけても、種々な施設が爲されたのである。

經始（繩張）は複雜化し、綜合的になつて行つた。これは住宅建築に於て寢殿造から書院造になつて行つたのと同一傾向をたどつたもので、この時代に於ける政治、社會、財政、經濟狀態の變遷の反映である。即ち初期のものは、各郭が寢殿造に於ける各建物の關係の如く、別々のものを連絡したものであつたのが、末期のものは、同心圓狀に圍郭が三重及五六重にまで重り合ひ、郭は複雜

な組合せの形をとることゝなつたのである。後者の場合、その中樞を本丸とし、その外側を二ノ丸三ノ丸とし、更にこれ等を包含して總曲輪或は總構と稱するものがあつた。その形も、初期には方形等單純であつたが、末期には複雜な形狀となりその組合せ方も巧妙なものとなつた。

城の大さは、始めは概ね方1町位なものであつたが、末には徑20餘町を有するものさへ生じた。郭の數も、單郭から20數郭を有するまでに發達した。

壘は高さと厚さとを增し、殊に表面に石垣を用ふる部分が增加し、側防のための屈曲が著しく多く且巧妙になつた。これは、堀幅の廣くなつたことゝともに、城郭の規模全體が大さくなつたことゝ、鐵砲の流布とに因るものである。

堀も幅が廣く且つ深くなり、空堀でも深さ幅各々數十尺に及ぶものが現はれた。

虎口（こぐち即ち城の出入口）は、山城に於ける自然の屈曲から思ひつき、曲つて城內に入る枡形竝に、虎口外の通路屈曲施設としての馬出（うまだし）等が工夫されるに至つた。

建築物としては、樓門風の門が、古式の櫓から發達し、城門附近の壘壁に石垣が用ひられるに及んで、渡櫓（わたりやぐら）が行はれる樣になつた。

櫓は、築城の永久化と鐵砲の流布とから、棧敷に楯を竝べた樣なものが、多く耐火構造の塗込造となり、壁も厚くなり、美觀を發揮するため表面に白亜を塗るやうになつた。

塀や建物に於ける狹間は、從來短冊形の矢狹間のみであつたが、鐵砲が使用されるにつれて、圓形、三角形、正方形等の鐵砲狹間が出來てきた。

城下町の防禦の設備も、その發達に伴つて、この時期の末に發達し、桃山時代を經て江戶時代に完成されたものである。それとゝもに、世態の不安から、商工業者自身も自衛上、都市に若干の防備を施したものが出來た。それは必しも武士に對抗しようといふのではなく、盜賊等に備へて町の治安を維持しようとするにあつたのである。

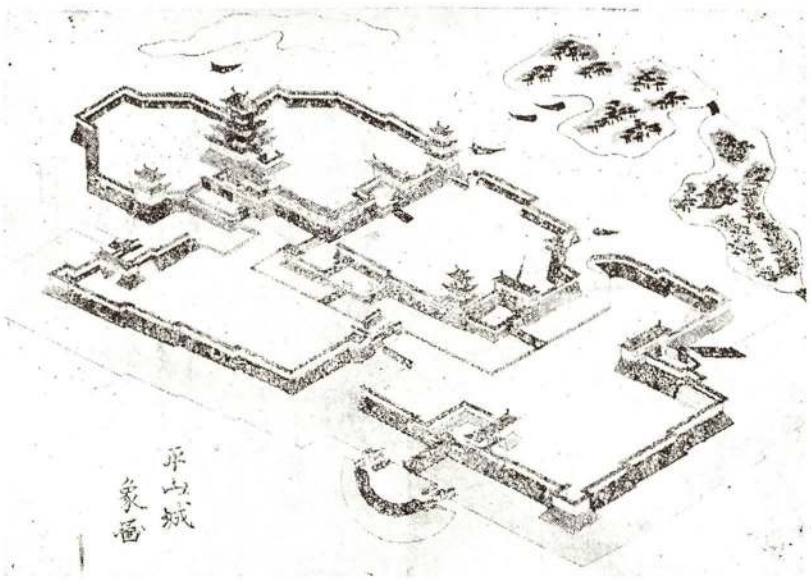
近世前期（安土桃山時代、江戶時代初期）

この時期は、長い期間の激烈な競爭の結果、大規模で內容の複雜な（階層的封建組織の）、また權力の强大な群雄を生じ、その最も優勢なものによつて、天下の統一が完成され、その結果、武家政治が極點に達した。これに伴つて、武家築城は大成したのである。

（一）種　類

慶長の末年に至るまでの城郭の種類は、前の時期と變りがない。

3. 平山城全圖（大類伸博士所藏）



大阪役の後、江戶幕府は平和的統一政策上、諸大名に一國一城の命令を下して、本城（居城）以外の城塞を破却せしめた。その結果、それ以後は二三の例外を除いては本城以外の城はなくなつた。「城」は一種の制度上の名稱となり、城主格以上の大名でなければ、たとへ事實は城でも城とは公稱出來なくなつた。亂世の間に、自由に又無秩序に發達して來た城郭は、制度上整理され、總數3000以上もあつた城は

170種の「城」に整理されてしまつた。

（2）構　造

大名の居城は、その領土の政治上、財政上、經濟上の中心で、その領土並に全國的中樞（京都・江戸・大阪）との關係上、交通の便利にして、物資集中の樞要地に、大規模にして、人工を多く加へられたもの（天嶮利用に比較して）が置かれ、階級的威嚴を示し、平野の中にあつて眺望のよい様平山城の式が多く採用され、純軍事的のみに價値のある高峻な山城は廢された。

斯かる時代の要求に適した形式の城郭は、近世都市發達の核心となつた。故に明治時代以降の「市」の殆ど大部分は、都市の中心部に斯様な城址をもつてゐるのである。

構造は之を概論すれば、大規模、複雜、永久的堅牢、豪華となつたといふべきである。

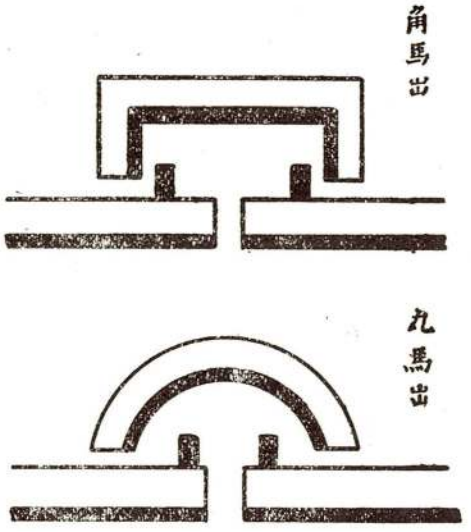
繩張は徑1里數十町、郭數20餘を有する大規模なものとなり、形狀は種々複雜な平面を有するものが出來て來た。殊に虎口・馬出・桝形・横矢掛り・蔀・菷等の位置形狀は著しく發達した。

軍學者の說く標準によれば、大城は五重で、五重の最も外側たる外曲輪は、疊淳を合せて方36町に及ぶ。上世にあつては、國府鎭守府等は「方8町」と稱せられ、中世の末、織田信長と戰つた攝津石山本願寺（後の豐臣秀吉の大阪城主要部の前身）も「方8町の城構であつて、當時としてはそれぞれ代表的に大規模であつたものが、近世軍學者の標準では、小城の最も外側の三丸すら、方8町55間となつてゐる。如何に城が一般に大きくなつたかゞ想像出來るであらう。

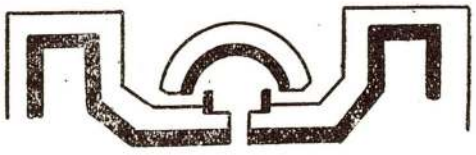
大名の本據の城は、一藩の築源地であり、立籠るのを主とした城ではなく、攻勢に轉ずることを主とした城であつた。即ち攻勢防禦の城であつて地形は平山城を採用し、虎口等にも、その注意が施されてあつた。

各部の構造としては、城の咽喉として最も大切な「虎口」に種々の工夫がめぐらされた。軍學者の名目によれば、竝虎口・向虎口・巴字虎口・陰虎口・陽虎口・陰中陽虎口・陽中陰虎口・馬出無虎口・横虎口・脇虎口・縱虎口等がある。

馬出（うまだし）は、城門の前方にある極めて小さい郭の一種である。城門の前方に半圓形若くは方形に疊淳をめぐらし、左右に虎口を開けてあるものである。元來その目的が、城門を掩護するため、ことさらに出入を複雜化したものであるから交通上妨害ありとして最も早く破壞されたゝめ今日城址でその遺構の存するものは、殆ど無いといつてもよい位である。遺蹟の上では、戰國時代のものに認められる。純軍事的な施設であるので世態が險惡になつた際に、特に之を新設した例もあつた。馬出には角馬出（眞・草）丸馬出（眞・草）、辻馬出、的山（あづち）馬出、曲尺馬出、片馬出、巴字馬出、萬字馬出等の種類があつた。

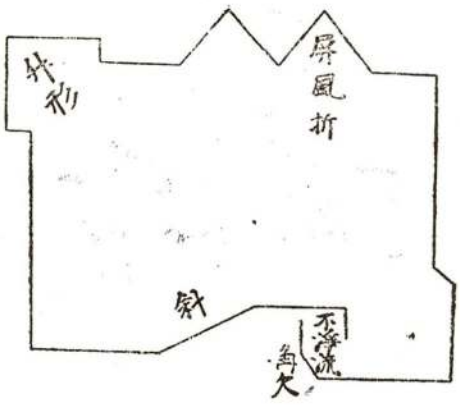


4. 角馬出と丸馬出


5. 眞の丸馬出

この馬出が大規模になれば、一つの郭を構成することになる。之を馬出郭といふ。一種の出丸である。

蔀（しとみ）と菷（かざし）とは、城內を遮蔽する施設で、透視を防ぎ、敵の城門攻擊行爲を妨げるための施設である。蔀は城門（虎口）の城內側に設け、菷はその城外側に設けるもので、その種類としては、土居、塀、植物（うゑもの）、櫓、屋敷、郭等が之に應用された。虎口の內又は外に



6. 横矢の繩張

一直線の短い土居を置くのを堺(あづち)或は一文字土居と稱した。

桝形（ますがた）には、内桝形、外桝形、半桝形、出ン桝形、袖桝形、坪桝形、橋桝形等の種目がある。

主として戰時等に、臨時に城門に、柵、矢來等を以て、桝形の如き一區劃を設けるものを武者屯（武者溜）、馬屯（馬溜）といふ。

城郭には、特に屈曲を作つた。これを軍學者は「ひずみ」と總稱する。その主な目的は「横矢掛り」即ち側防にある。この横矢掛りの基本的な型には、屏風折（敵折、味方折）、横矢の桝形、斜（ひずみ）、不淨流、出角、入角、角缺、隅おとし、合横矢、塵落等がある。

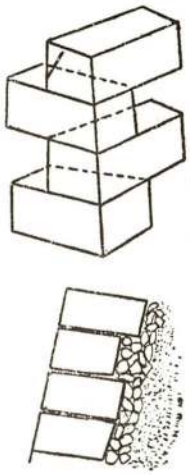
壘は石垣が發達して、高さ十數間に及ぶものが出來たとゝもに、表面に孤狀のたるみをつくる築方が發達し、外觀の美と實用上の堅牢竝に防備的効果とを發揮し得ることゝなつた。もとより土壘のみのものもあり、上半分若くは下半分のみを石垣としたものもあつた。土居には、土の自然に落ちるまゝを、即ち45度の傾斜をそのまゝ固めたタタキ土居と、之に芝を入れて5、60度の急傾斜とする芝土居とがあつた。

石垣は、人工が發達し、城が永久化し堅固莊大になるに從ひ、益々多く用ひられ、種々の積方もあつたが、用石も石質と構造の精粗によつて大小竝に加工の度に種々なものがあつた。我が城郭の石垣は、あまり加工しない石を、上手に組合せて堅固に築く所に非常な特色があつたのである。そしてその外觀に、非常に自然的の美、即ち日本庭園の石組の美と共通したものをもつてゐた。築城家と造庭家とは之を兼ねた人が少くなかつた。石材は安山岩・花崗岩が最も多く用ひられたが、地方的な城郭は、概ねその土地の石材を用ひたので地方的特色を有するものが、普通である。また威嚴を示す上と堅固にするため巨大な石を用ひることが行はれた。近世日本城郭の石垣の特色は、表面が曲線的に凹んでゐることであるが、これは慶長頃から、高い石垣を築く際に多く採用されたものである。中世末から近世極初の石垣は、直線的で、傾斜が緩い。積方は、普通切込ハギ、打込ハギ、野ヅラの三種とされてゐる。

城の石垣の石は、表面の二倍半以上の奥行あるものを用ひ、その背後には1間乃至3間の厚さに栗石を入れるのである。故に水のためふくらんで崩れることも防止出來るのである。石と石との組合せに、重力を應用してあるので、一二の石が拔け出して全體がばらばらに崩壞するといふことは殆どなく、若し崩れるとすれば、最下部の地盤がゆるむか、地震等で同じく下部がすれるかの場合である。此等の場合には、石垣全體がするのである。突角部は長邊を交互に積むので堅固であるとともに、藝術的である。

壘の斷面は梯形で、上の平面を武者走（むしやばしり）といひ、或流派では馬踏（まふみ）といふ。また城内から壘上へ上る通路を武者走ともいふこれに合坂、重ネ坂、雁木などの種類がある。

壘上には、塀を設けるのが普通である。塀の外若くは、土居、石垣等の城外面にある小道を犬走（いぬばしり）といふ。



濠は壘の外側にあるのを普通とし、水堀、空堀泥田堀の三種がある。自然の谷河川湖沼をこれに利用したものも少くない。堀の掘方には藥研堀（諸藥研・片藥研）、箱堀等の種類があり、藥研堀は斷面の三角なもの、箱堀は四角なものである。

7. 石垣の積方

平野の城は概ね水堀、高地の城は空堀が多い。また城外に縦横の捨堀を掘り、山城では山腹に竪堀を掘ることも行はれた。

水ノ手は、城内の井戸・泉を用ひるのがよく、城外のもの若くは引いた水は不適當とされてゐた。また城内に溜池を造るものもあつた。井戸や泉を保護するために、山城などでは、谷間に井戸郭・水ノ手郭を設けて之を保護し、井戸櫓・水ノ手櫓・水櫓等を作つて汲み上げる方法が工夫された。また上水道を暗渠式にする方法も屢々行はれた。下水道・塵捨も城内生活當然の必要設備で種々工夫された。下水道はその構造の如何によつては城内外連絡の一種の抜穴として利用し得る場合もないではないので、俗に城の抜穴であると稱せられてゐる例もある。

堀と堀との間を陸で横斷したもの、即ち土橋と稱せられるものは、掛橋よりもむしろ多く用ひられてゐるが、これは、高い方の堀の水を貯へるために設けられたものが少くない。

坂道その他一般に道路は、故意に曲折させて、敵の侵入を妨げ、味方の據點となる様に工夫されてゐる。また階段、隧道等も必要に應じて隨所に設置された。

城郭の一設備として城の内外の必要な箇所に、それぞれの目的に適する植樹をする。これを「植物（うゑもの）」といふ。またこの「うゑもの」とは別に、城郭關係の植栽木及び森林がある。それには、城郭運用上の必要資材自給のためと、風致防風、防雪等所謂保安林的な意味なのものとがある。また護岸のための竹林もある。尚また軍事上の目的による陰蔽乃至防備用のものもある。

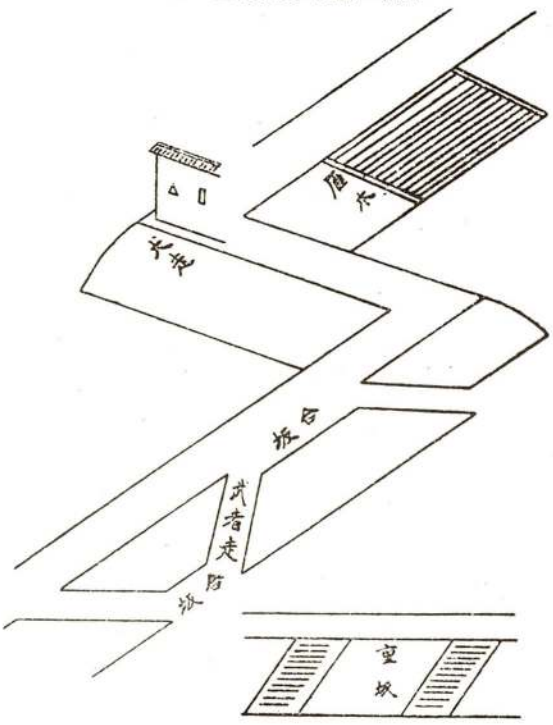
前述の様な土木工事の上に、建築物を造營する。建築物の最も簡單にして原始的なものは、鹿柴（逆茂木）と杭とである。次に矢來、柵、條網の類であり、その更に複雜になつたものが塀である。古くは板塀が用ひられたが、後には、築土、塗塀が多く用ひられる様になつた。更にその塗壁を保存するために、その上に板を張り黒漆などを塗るものも行はれた。

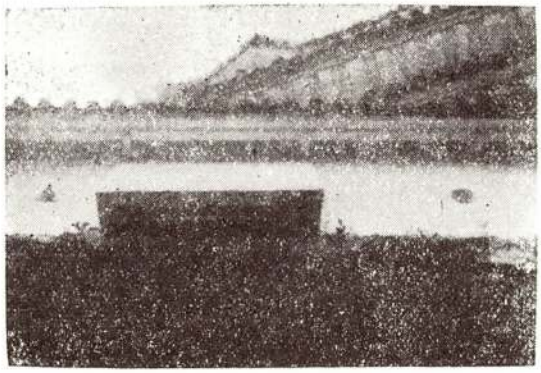
城の各建造物共通な、外壁と屋根について述べれば、我が國の城郭建築は何れも木造で、外面を防火、防彈を主な目的として、厚い壁を塗つたものである。鎌倉時代から戰國時代までは、木造壁も用ひられた様であるが、近世初期には、總べて塗込造になつた。しかし又、桃山時代の華麗な美術工藝が發達した時代には、稍々平和な氣分も見え出した際とて、城主平常の居城の如きは、若干邸宅風のものも出來て、柱の一部を露出したものもあつた。また平瓦を張りつめた海鼠壁も用ひられ、鐵板を張つたものも出來てゐた。

城郭建築の屋根は概ね入母屋造である。これは一般の住宅に見る様な屋根では威嚴を缺くので入母屋造にしたのであらう。但し倉庫などには切妻も用ひられてゐる。城櫓、天守閣等には千鳥破風唐破風をよく用ひる。これによつて、城の美觀を增すとゝもに、展望上、防備上効力を發揮するのである。

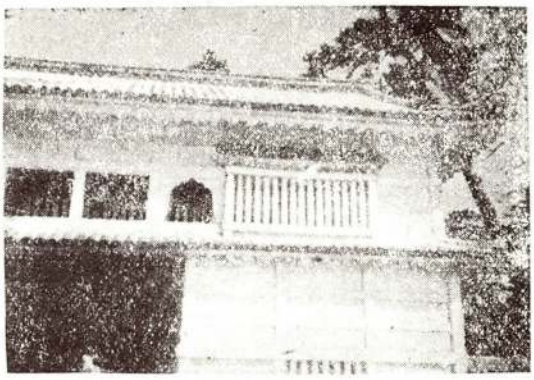
塀・櫓・天守閣等には、外方を望見し、矢・彈丸・礫等を發射する小窓がある。これを狹間（さま）と稱する。小間・矢間とも書く。その用途によつて、矢狹間（箭眼）鐵砲狹間（銃眼）・大砲狹間などといひ、位置・用途・用法などによつて石狹間・土狹間・鑓狹間・足下狹間などと稱せられるものもある。

8. 土居表裏の通路の種類





9. 狹間と石落（高知縣）



10. 城の窓（姫路城）

形は、圓形・三角形・四角形・(正方形・長方形)等を普通とし、特殊なものには、半圓形・五角形(將棊駒形)六角形・菱形等がある。その斷面も平行・內開・外開・兩開等がある。

矢狹間は長方形、鐵砲狹間は圓若くは三角が普通である。大砲狹間は江戸時代末期に大砲の流布に伴ひ軍學者によつて工夫されたもので、この時代には殆ど實行されてない。この外に、門側・隘路等に設け接近した敵を突く設備として、鑓狹間（やりさま）といふものがあつた。特殊なものとしては足下狹間（あしださま）といつて、下方に狹間を設け、足でその蓋を開閉し得る仕掛のものもあつた。隱狹間といふのは、狹間を平常は塗りつぶして置き、戰時に開ける仕掛のものである。

塀や建物の土臺石に漏斗形の狹間を設けたものがある。これを石狹間と稱した。

櫓の入口・隅等に、下方を監視し、石などを投下して敵の接近防ぐ裝置を石落（いしおとし）といふ、概ね普通の壁面よりも外方に張り出した外壁である。出窓の下部をこの種のものに利用したものもあつた。

櫓・天守閣等には大小の窓がある。四角を普通とするが、特殊なものに華燈窓（くわとうまど）がある。これは寺院建築の影響をうけた室町時代の住宅建築から更に轉用されたもので、城郭の建築的美觀を添へる一要素とされてゐた。

城の窓には、連子をつけるものが少くない。それは外部から內部を見透されぬ樣、又、少しでも矢石を防がうとする目的によるものである。しかし、横連子や格子は、弓、鐵砲を使用するのに不便であるから普通は用ひなかつた。

城窓の戸は、引戸・突上戸が普通で、城窓には不適當な開戸は殆ど用ひられない。

城濠を通過する橋は、架け橋を普通とし、特殊の場合土橋を用ひた。また半は土橋を用ひたものもある。橋の一種にはね橋・引橋・車橋等の特殊の裝置のあるもの、廊下橋の如く掩蔽物のあるものなどがある。其他軍學上の名目としては、竝橋・筋違橋・長橋等多くの種類がある。

城門は一重のものと二重のものとあり、二重のものには一ノ門と二ノ門とある。普通一ノ門は、「高麗門」で、二ノ門は櫓門若くは渡り櫓になつてゐた。二重の城門は二門の間に桝形を含むものである。（立姿圖は平山城全圖參照）桝形には內桝形・外桝形・半桝形などの種類がある。內桝形とは、壘線より城內にあるものをいひ、外桝形とは壘線より城外にあるものをいふ。半桝形はその中間にあるものである。

城主の居館・政廳・將卒の住宅・領民の住宅(郭內にあるもの)等は、廣い意味で城郭に屬する建物ではあるが、此等は普通の建築であつて、特殊な城郭建築ではない。

城郭建築の一部として重要なものは倉庫である。弓藏・鐵藏・焰硝藏・米藏・塩藏・味噌藏・薪藏・材木藏・竹藏・金藏等、その主なる收容品によつて呼ばれるが、大抵塗込造の土藏である。火藥庫の如きは石造のものもあつた。薪藏等には八角形の平面等特殊なものがある。

城郭建築の最も簡單なものは多門である。これは城壘の上に建連ねられた長い建物で、走り櫓、

多門長屋とも稱せられる。建築物の充實した城にあつては、本丸などは壘上が全部多門になつてゐるものもあつた。

櫓は壘上の要所、殊に隅に置かれ、二重若くは三重を普通とする。隅にあるものを隅櫓（すみやぐら）といふ。展望に便し、防戰に用ひ、その或るものには、兵器・糧食等を一部に貯へる。特殊なものには、人質櫓・着到櫓・水ノ手櫓等があり神祠となつてゐたものもあつた。

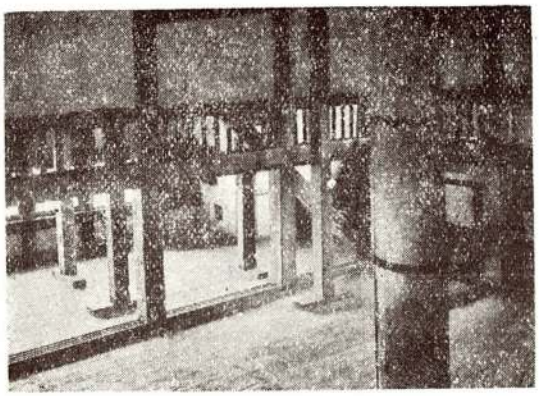
櫓の配置も、中心部ほど濃厚なのを普通とした。

城内の主要部に最大の櫓を置き、之を天守或は天守閣と稱した。三層三重乃至五層八重で、外觀三重及び五重が最も多かつた。下に石垣の臺を築き、その上に建築するのであるが臺中に穴藏のあるものとないものとがあつた。用途は展望・司令・貯藏・據戰等の純軍事的用途の他に、城主の威嚴を示し、その居所ともなつたものである。

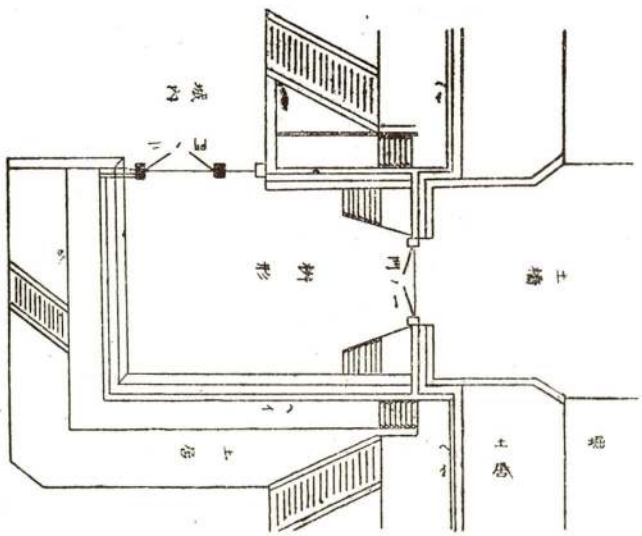
天守の位置は、前述の各用途に適ふ様、一城の中樞部即ち、本丸の中央若くは一隅の最高所に置かれた。建物の形には、一櫓の獨立のもの、二櫓の復合したもの二櫓の連結したもの、數櫓の聯立したもの等があつた。

天守閣は單獨でも、一つの小郭を形成し、城中の一城ともいふべきものであるから、閣内には槍・弓矢・鐵砲等武器、竝に米塩等の食糧を貯へ、井戸・料理場・浴場・便所等を備へたものもあつた。内部は普通の櫓と同じく、實用を旨とし、何等の裝飾もなく薄闇い。最上層に勾欄付の縁側を有するものがあり、天下慶長頃には、まだ天守へ居住することもあつたので、建物の内外に、華麗な裝飾をなしたものもあつた。初期に出來た天守には、上層に華燈窓と勾欄を有するものが多い。天守の基本的な型には、金閣風のものと、櫓塀出風のものとの二系統があつた様に思はれる。前者は塔の如く階層的であるが、後者は、東福寺開山堂に見られる如く、大きな屋根の建物の棟上に、小建築を載せた様な形式のものである。

城郭建築の一特色は、棟の先端鬼瓦の上に、鯱（鯱）を載せることである。大さは建物の大きに準じ、形態も種々あり、質も木骨金板張・瓦・金屬等があつた。



12. 天守閣の内部（姫路城）



11. 桝形城門

近世後期（江戸時代中期）

この時期は、島原の亂以後、黒船渡來までの間である。大阪落城後、幕府は一國一城（一大名に一主城の意）の令を出し、各藩の軍備縮少によつて平和を維持しようとしたので、城の新築は固より模様替さへも容易に許さず、天災等による破壞の部分的修理にも、全城の明細圖を提出せしめて嚴重な監督を行つた。たゞ新たに取立てられた小藩の若干が、古城の復興、或は簡易な小城塞の新築を許された例があつたのみである。從つて、大築城は實施されず、幕府自身すら、江戸、大阪の兩

大天守の復興さへもしなかつた。しかし、一般學問の進歩發達に伴ひ、軍學者間に於ける築城術の理論的研究は相當に進歩した。

明治維新の後、版籍奉還が行はれて、武家の城郭は朝廷に獻納され、兵部省の所管となつた。次で明治5年國家的警備の見地からその存廢が決せられ、58城を殘して、他の約150の城と要害は廢せられた。

（一）種　類

幕府の本城、番城、大名の居城、陣屋、要害等が、幕府統制の下に存した。但し原則としては、一大名一城の制が行はれた。

（二）構　造

この時代の城は、大名の居所、地方政治經濟の中心であつたので、概ね一地方の交通の中心等に置かれ、平城若くは平山城が普通であつた。たゞ若干特殊の任務を有するもの、特殊の地形の地方などには、相當高い山城も存在してゐた例もある。

土木建築方面も、軍事上の工夫等も、特に著しい進歩發達はなく、泰平の飾り物、大名の威嚴を示すべく豪華を誇つた建築に、幕府竝に諸大名の財政逼迫に伴ひ、維持にも可なり苦心を要する有樣で、一度變災に失はれると容易に復興が出來ず一般には寧ろ縮少一方であつた。

結　論

上記の日本築城、就中武家築城の有する普遍的性格は、實に日本的特性顯現であつて、凡そ下記の如きものが擧げられると思ふ。

性質上

1. 人工巧妙にして、しかもよく自然を活用せること。
2. 叡智的科學的にして、しかも、情操的藝術的なること。
3. 規模豪壯雄大にして、しかも、構造細心周密なること。
4. 進取的にして、しかも、用意周到なること。
5. 向上的にして、しかも、基礎强固なること。
6. 質實剛健にして、しかも、優雅崇高なること。
7. 淸廉潔白にして、しかも、複雜なる綜合美術なること。
8. 澗達にして、しかも、幽玄味あること。
9. 軍事的にして、しかも、政治的、經濟的なること。
10. 外來文化を攝取同化して、しかも、創造的なること。
11. 物件なるも、しかも、精神的含蓄深きこと。
12. 複雜多樣にして、しかも、秩序統一あること。
13. 敬神崇祖の精神を實現しあること。

形態上、用材上、

1. 地勢をよく活用し、經始の複雜なること。
2. 土工を主とし、廣き水濠と高き石垣とを用ふること。
3. 建築物を從とし、木造建築なること。
4. 建築物は木造故、その平面が概ね方形なること。
5. 建築物の屋根は傾斜があり、概ね反りあること。

以上の諸點より考察するに、城郭は、最も多く日本的性格の表現されたものゝ一つで、吾人に精神的感化を與へること甚だ强き、貴重なる祖先の遺物である。

近時、城郭建築にヒントを得た建築物が、官廳會館、博物館、研究所、旅館、店舖等に少からず採用されてゐるが、外貌の一見似て、性格の非なるものも少くない樣に思はれる。建築設計家諸氏はよく日本築城の有する特性を把握され、その精粹を採つて以て、近代日本建築に活用されんことを切望する。



1.

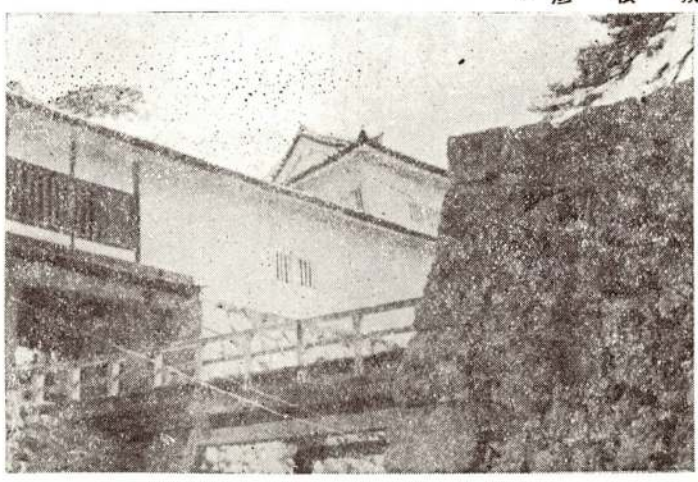
城郭とは軍事的目的を以て構築された防禦設備の總稱である以上、上記の表題は聊か妥當を欠くのであるが、わが國に於て築城術の最盛期にあつた戰國武家時代を中心として考へるときは、城郭はあながち防禦的意味のみより構築されたものでないことが知られる。即ち一國の領主としては、その政治的中心を形造る必要もあらうし、又領民をして威服せしむる爲の何等かの武の表徴物を求めたに相違ない。城郭は直接には軍事的目的に造られるものではあるが、中世以後に於ては、特にそれ以外の目的を包含することが遙かに多い。從つて近世城郭の諸性格を究明しやうとすれば、當然それ等の政治的意義を忘れることは出來ないばかりか、大に重視する必要がある。かゝる意味で茲にはわが國近世城郭の規模構造上、特に防禦的施設のみを摘出して記述する處であれば、敢て求められたまゝの表題とした譯である。

城郭は時代、場所、攻撃兵器、建築土木の技術信仰思想等の狀況によつて、相異を來してゐるが鎌倉幕府滅亡以後より安土桃山時代に到る所謂中世以後に於ては先づ規模の宏大化、計畫の組織化構造の堅牢化等を前代より顯著な變化として擧げ得られやう。

2.

平安時代末より鎌倉時代に於ては城郭は主して地方武士の自家防衛の爲のものであれば、その規模も小さく、構造的には戰時に備へるため天嶮の山岳を利用した程度であつた。即ち武士は平時に於ては山麓の居館に居住し、一朝事ある時には山上に籠ると云ふのを常道とした。しかるに中世以後になつて戰時狀態の永續、戰亂の時代となつては、平時の居館と戰時の城郭とを別箇のものに爲してゐることは到底出來なくなり、生活の爲の居館と軍事的目的を有する城郭とを包含して所謂一大城郭を形成するやうになつた。かゝるものは多く丘陵を利用し、丘陵郭と周圍の平地を總括した大なる面積に築城が行はれ、所謂平山城を形成する。しかるに更に時代が降つて、大名の居城は政治上、財政上、經濟上の中心地と爲す必要を生むと交通の便、物資集中の樞要地を選定することになり、あながち丘陵などの天嶮を利用することが出來なくなり、防備は主として人工的施設に依ることゝし、只好適な地に大規模な築城を施すと云ふ風で、從つて多くは平野の中に營まれ、所謂平城を形成する樣になつた。一言にして云へば、城郭

彦根城



※ 筆者は名古屋高工教授

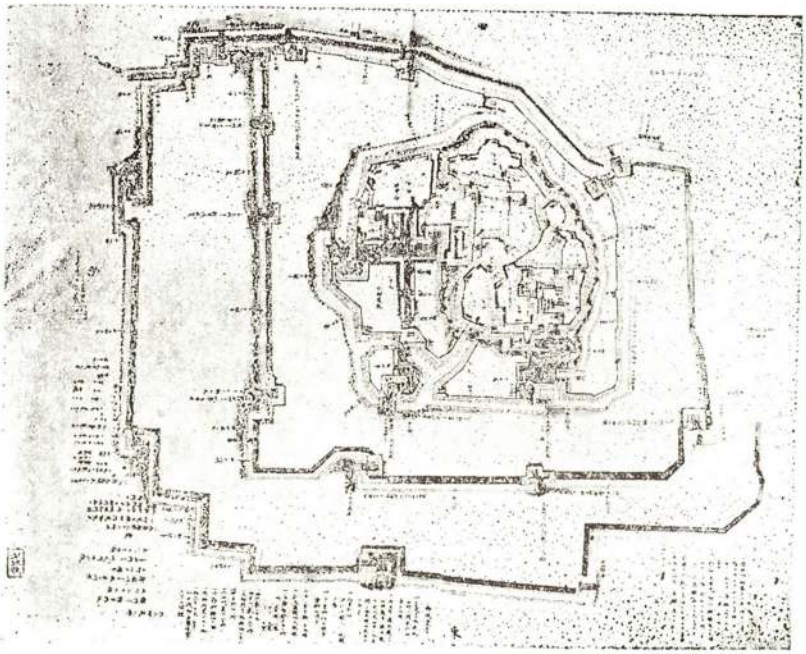
地は時代の降るに從ひ山岳高俊の處より次第に低地に赴き、從つて防備は天然の要害のみをたのんだものより、やうやく人工的施設に依るやうになる。かゝる形勢は築城術を大に進歩させ、特殊の防備的施設が工夫されるまでに到つたのである。

城郭の防備力としては、その全體の配置が特に重きをおかれる。これを繩張と稱して、築城家の工夫に俟つた。江戸時代の軍學者などは各地の城郭を調査し、種々の研究を行ひ、理想的な繩張と考へるものを案出して、爲に兵學として流儀の如きものも出來てゐるが、多くは机上の計畫であつた。それは當時既に德川幕府の手に依つて新城の營は堅く禁止せられておつたからである。これ等江戸時代軍學者の手に依つて調査せられた諸國城郭の圖は「主圖合結」その他の名稱で現在各地に流布せられ、寫圖も甚だ多い。當時として城郭の如き秘密を重んずるものゝ調査は甚だ困難なことであつたに相違なく、それ等の圖は實際に當てはめて見れば、隨分いかゞはしいものである。世にはこれ等の城郭圖を甚だ貴重なものと信じてゐる向が甚だ多いけれど、史料としての價値の乏しいものであることを指摘しておき度い。只これ等の圖が全國各地に散在して、多數の寫圖が出來てゐる處より想像すれば、江戸時代兵學の研究は盛んであつたことが窺はれ、所謂治に居て亂を忘れなかつたものであることが認められるので、この點に於ては興味深いものと言へやう。從つて現在城郭繩張の研究を爲すには、どうしても舊城郭の實地にあたつての調査と確實な古圖を探索することに依つて爲されねばならない。さて初期の山城に於ては山の背を地形に應じて所々平地とし、これに櫓、土塀等を造つたもので、所謂圍郭は簡單にならざるを得ないし、又郭の配置は一直線に配置されるのが常道となる。しかるに平山城になると圍郭は同心圓狀に三重乃至五、六重にまで重り合ひ、郭は複雜巧妙な組合せの形をとる事になり、中樞を本丸とし、外側を二之丸、三之丸と云ひ、更にこれ等を包んで總曲輪或は總構と稱してゐる防備の根本方法としては中樞に達するまでの通路を與ふ限り長くし、且



2 姫路城

1 姫路城古圖



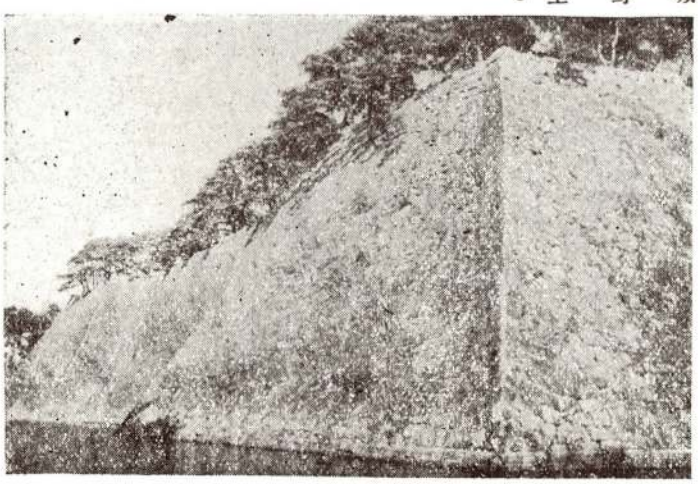


4 丸　岡　城

直線的であることを避けるのにあるから、かゝるものは自ら、丘陵をとりまいて通路は紆餘曲折し、あたかも迷路に入つたが如き感を與へるものさへ生じてゐる。殊にそれが平地でなく、次第に丘陵に相應じて高くなつて行くのであるから、下方の通路を進撃するものに對して上方の通路より攻撃することも可能である。繩張として防備の最も完全に發達したものは、結局平山城の形式のものに見ることが出來る。一例を擧げれば第1圖姫路城古圖に示される如く、同城の繩張は甚だ複雑を極め、要害の嚴重なること現存城跡中雄たるものである。この城は中樞部は姫山なる丘陵部で、これを圍む平地を取り入れて平山城を形成し、圖の中心部がその丘陵部である。現狀の繩張は慶長五年入城した池田輝政に依つて大要が完成されたと見做されるが、中國の探題格として百萬石の大城郭に眞に相應しいものである。その繩張の一部は第2圖に見られる如く、天守を近くに望見し乍ら容易に近づくを得ないので、即ち圖の下方の通路を經て、圖の塀裏に到達し、更に曲折して漸くにして天守に達し得ると云ふ風で、その間多數の門、櫓があつて進撃が阻止せられ、又圖の如く塀には狹間があけられ、通路上の櫓には石落がつけられて、下方の通路を進むことを愈々困難ならしめてゐる。他に繩張の巧妙な一例を示せば第3圖彦根城鐘之丸より本丸に到るある。この城に於ては本丸に達するには鐘之丸を經なければならないのであるが、この兩郭を連絡するものは圖の如く廊下橋（現狀では單なる陸橋となつてゐる）となつてゐて、この橋が落されゝば、最早容易に本丸に達し得ないのが窺はれる。殊に廊下橋下方の通路は圖で右すれば佐和口に達し、左すれば大手口に通ずるのであるから、今假りに兩口より攻撃すれば、兩軍は出合頭にこの廊下橋の下で相合し、味方同志の軍が衝突して混亂を招くやうになつてゐる。この混亂に乘じて上方鐘丸及本丸石壘上より攻撃しやうとする仕組は實に巧妙と云ふ外はない。從つて廊下橋下より、鐘丸に達するには右方壘下で曲がつて更に登らねばならないので、迂濶にはこの登口が見逃される。若し攻撃が佐和口か大手口、何れかの一方のみより行はれるとすれば、徒らに進撃のみに急であれば、この廊下橋の下を不注意に通過して、他の口に出て失まふと云ふ喜劇も演じられることになる譯である。彦根城は井伊直勝の爲に慶長八年家康が七ケ國の大名を助役せしめて築城、中仙道の一要衝たらしめんとしたものであれば、その要害の嚴重巧妙なこと以て首肯せしむるものがある。

城郭防備の根本は實に繩張の如何にあるので、濠、石壘、建築物等の構造は防備を更に强固ならしめる爲の言はゞ末梢的施設に過ぎない。從つて築城の生命は繩張即ち郭の完成にあつた譯で、これさへ出來れば戰鬪は可能である。後人の考へか

5 上　野　城



らは、壯大天を摩する如き天守閣を以つて直ちに城郭の生命と爲し勝ちであるが、築城の目的は戰闘にある以上、單にこの點から考ふれば、郭が完成すれば築城目的の大半は達せられたと見做して少しも差支へがなく、又當時としてはその樣に考へることが普通であつた樣である。されば當時の書狀には天守閣はおろか、石壘なども完成してゐない筈であるのによく「本丸早々出來喜思召候」などの文句が見出されるのである。

かく城郭防備の根本としての繩張に於ては平山城に最も完備した又巧妙なものを見られるが、それが更に降つて後の平城になると郭の配置は地形上整型になり勝ちで、平山城の如き複雜さは認められない。それは前述の如く城郭の目的が純軍事的より寧ろ政治的なものに移行して行つた結果でもある。只かゝる平城に於ては廿余郭を有する徑一里數十町の大城郭もあつて、政治的には階級的威嚴を示すため頗る大規模になつたものが見られる。この種平城の繩張に於ては特に各郭の入口を嚴重な構法とするのが通則である。それには馬出と桝形がある。馬出とは郭入口の前面に施された小郭で、隣接郭との連絡を狹小な通路となし、これに依つて大軍の一時に進入するを防止し、直接城門に迫られぬ如き副防禦としたものであり、或は部將がその所まで乘出して寄せ手の軍狀を見張る爲で、この名がある。桝形は城門の個所に小なる一郭を構へて、內外二重の城門を互に



7 名 古 屋 城

直角に設けたもの、即ちこれに依つて直接城門は透視し得られず、まして直線的に城內に入る等のことは出來ない。又この桝形の小郭に寄せ手を籠めて上部の石壘より俯射、側擊を爲し、全滅させる工夫も構ぜられてゐる。桝形とは戰時に在つて城內の兵を量つて繰出すに用ひた處よりの名稱である。かく馬出と云ひ、桝形と云ふは結局は防備の施設であるは勿論であるが、特にその名稱は攻擊の意味に於て附せられてゐるのは甚だ興趣に深いもので、當時の武士の氣魄を感じ得るのである。城郭は防備の施設であるが、精神的には必ず攻擊の施設と見做してゐる。從つて桝形の門なども、外側の方を二之門、內側の方を一之門と名附け、內より外に出擊する順序に名附けられてゐるなどもその一例である。

6 松 本 城



3.

城郭防禦の根本たる繩張の各部を更に强固ならしめるため、種々の工夫が行はれてゐるが、その顯著なものは石壘と濠とである。山城內至は平山城のあるものは未だ各郭の境界に石壘が用ひられてゐないものもあり、或は平城と雖も中には芝土居を利用したものもあるが、近世城郭に於て石壘は最も特質的な存在と言へやう。石壘を城郭に用ひたのは永祿十二年の信長の二條城に始まるとの傳へもあるが、信じ難く、遙かに古くから利

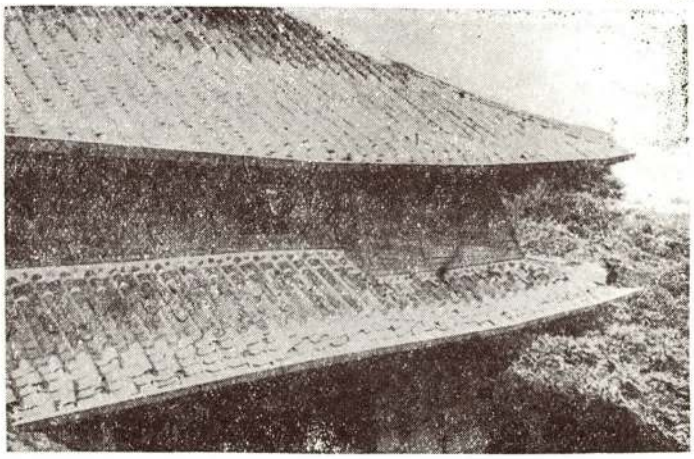
用されるに到つたと思はれる。石壘はこれに依つて郭を構造的に堅固にする意味と防備的効果を發揮する意味とに於て著しく發達し、中には十數間の高い石壘も出來た。第4圖伊賀上野城石壘の如きは恐らく各城石壘中最も高い一例である。この城は慶長十四年藤堂高虎の修築する處であるが、家康の高虎をしてこの地に築城せしめた眞意は、恐らく大阪方に對して彦根城を中仙道の押へとすると同樣、伊賀路の一據點とするにあつたと考へられるので、この高石壘が特に城の西面にのみ設けられてゐることは眞に意味が深く、この點を良く推察し得るものがある。さて圖に見られる石壘は特に高いと云ふ外、壘に曲折が設けられてゐるのも知られる。これは側防を目的とする防禦の一工夫で、横矢掛とも稱してゐる。即ち石壘を攀登る如きものがあれば、石壘の屈曲を利用して側射をすることが出來る譯である。石壘の築方は圖の如く傾斜はしてゐるが、直線的に近いものと、甚だしい灣曲をなす曲線式のものとがある。前者は桃山初期以前のものに多く、後者は桃山後期に多い。曲線式のものは防禦上攀登り難い効果があるが、この工法は寧ろ構造的に丈夫のやうに考案された結果であると言へやう。江戸時代の軍學者は扇の勾配と稱して、築方の仕樣を擧げてゐる。それに依ると高一間を下る如に水平に一尺づゝ前面に增して積出すことゝなつてゐるが、この方法に從ふと、その勾配は下方に於て甚だ緩かになつて實際かゝる仕樣で築かれたものは存在しない。只石壘の表面に孤狀のたるみをつけることは實用上防備的効果を擧げることはもとよりであるが、一面それに依つて外觀の美を發揮し得ることになつた。

濠は大抵壘の外側に設けられたもので、著しく巾廣く數十間に及ぶものも造られた。又地形に依つては彦根城の如く琵琶湖の一部を取り入れたものもある。水を湛へたものと、水の無い空堀とに分れ、堀方には藥研堀　箱堀の種類がある。藥研堀と云ふのは濠內側石壘の下方と外側石壘の下方とが相接してゐるもの、即ち濠の斷面が三角形狀を爲すもので、それだけ濠は深く且つ頑丈となり、徒渉は不可能で防備力が强固となる。濠には戰時堀中の徒渉を困難ならしむる目的で菱と稱する一種の尖鐵を散布し、又遊泳をさまたげる爲には網などを張つて警戒することも普通に行はれた。かの鳥居勝商が長篠城を脫出援を請ひ、歸城せんとして捕はれたのは濠中の網に觸れ、その先に取付けてある鳴子が鳴つた爲と言ふ樣な傳へもあるが、眞疑は兎も角濠の防備の一端は窺い知られる。

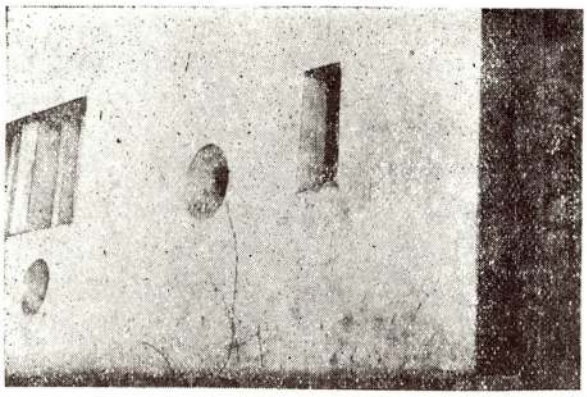
4.

城郭防備施設として建築物に關するものを擧げれば、石落、狹間等がある。石落は塵落、武者返、袋狹間とも呼ばれ、建築物或は塀の壁面に外部に下廣がりに突出させた出張であつて、下方の口より俯射攻撃するものである。普通は石壘直上に設けられ、これより石を落して攀登つて來るを防ぐからこの名がある。石落の初期的なものは第5圖丸岡城天守初重に見られる出格子の類であつたらう。これに依ると石壘上に突出して下方の揚板を上げ、石を落すことも得られ、格子窓は物見の用にも供せられ、又これより弓を射ることも出來る。この城は天正四年柴田勝豐の築く處と傳はり甚だ古調を遺存してゐる點が多い。この出格子もその一つで、寧ろ天正以前の傳統を傳へたものと思はれる。しかるに鐵砲が兵器として盛んに用ひられる如くなれば、かゝる開放的なものは不都合であるは論を俟たない。そこで普通石落とは第6

8 松　江　城



圖松本城天守下層に見られる様な只下方を揚板とし、周圍は堅固に覆はれたものになる。しかるにかゝるものは石壘上に直ちに突出してゐるから一見して石落なることが看破せられ、これに敵彈が集中破壞される懼がある。近代戰に於ても有力な武器であればある程、それを敵の監視より隱くして、攻擊の目標となることを避けねばならない。それと同樣に當時として有力な裝置であつた石落を目に觸れない樣に設けることが工夫されてゐる。第7圖松江城天守の初重二重屋根の間に隅の部分に設けられた出張がこの種の試みである。この方法に於てはよしんば近づいても石落なることが容易に感取されない。出張の下方は揚板となつて、つまり初重の屋根裏から俯瞰されることになる。第8圖名古屋城天守の二重目唐破風の下にある出張部分は外觀意匠上の結果かと一見觀られやうが、實はこの出張も松江城のと同樣下方が揚板になつて、立派な防備施設なのである。これに於ては松江城に比して更に一段進歩したものと考へられ、上に唐破風などを設けて如何にも應揚に假面をかぶつてゐるだけに一層恐しき存在である。この城の築城がやはり大阪方に對する東海の重鎭として行はれたとすれば、この石落一個に家康の全性格が具現されてゐるやうに思はれて、甚だ興趣に深い處がある。これに對して第9圖姫路城天守に見られる出格子や石落は頗る明朗で、正々堂々たるものがある。姫路城は縄張に於ては嚴重



10 大　垣　城

過ぐるものがあるが、中央の出格子は防備としては丸岡城に見られる如く初期的のものである。只隅の石落は松本城の如く石壘上に直ちに出張らすに、少しく平の壁體を見せ、その出も到つて少くしてゐるのはその存在を隱蔽する一工夫である樣に考へられる。をほ石落は天守や櫓に限らず、櫓門、塀などにも設けられ、下方を通過するとき直上より攻擊し得る如くなつてゐる。

次で直接防備のために、城郭建築物には皆狹間を明けてゐる。弓を射る爲のものは矢狹間と云ひ短冊形であるが、鐵砲が使用されるとゝもに、圓形、三角形、正方形等の鐵砲狹間が出來て、これを特に銃眼と云つてゐる。後には土臺石にまで穴を明けた石狹間と云ふものまで工夫された。第10圖は松江城天守の一例であるが、この天守は天守前面に附櫓を連接するもので、圖は附櫓より天守に入る口に設けられたものである狹間は單に外部に面して設けられる外に、この樣に內部に入つても攻擊される方向に向けて明けてゐる。戰利あらずして天守附櫓內にまで進擊せられるに到つても天守內にあつて附櫓の敵を攻擊しやうとする意圖が感取せられる。即ち最後の最後までをは踏み止つて防戰しやうとする精神力の旺盛なる事を如實に物語るものである。日本武士道の眞意をこの松江城附櫓の狹間が最も具象的に現はしたものと言はねばならない。日本城郭

9 姫　路　城



に於て現代的意義を求めやうとすれば、多々あるであらうか、これなどは後人に對する最大な贈物の一つとして精神的に特に價値高いものであらうと思ふ。第11圖は大垣城長櫓に見られる狹間の種々相で、矢狹間と銃眼である。左方の下方にある銃眼は伏射用のもの、この様に狹間は普通伏射、膝射と射撃姿勢に相應じて適當の位置に明けられるが、又立射用のものもあり、特に床土高く明けて、臺上に立つて應戰するものなどもある。即ち壁面があつて、狹間を明け得る處は高處、低處を問はず設けて戰闘力を強固にしてゐる。しかし圖に見られる如く、平常より狹間を明放ちではその城の戰闘力が敵に豫見される懼がある。即ち簡單にスパイされる譯であるから、狹間を外部に現はさない隱狹間と云ふのが屢々用ひられてゐる。これは構造的に壁體に狹間を豫め明けておいて、只外部より見えない如く、外側は薄く壁と同様に塗つて、一朝事あれば直ちに狹間となる仕組である。名古屋城天守の如きは外觀上狹間は一個も無い様に見られるが、これは總て隱狹間の爲である。前述の石落とゝもにこの城の性格が良く窺はれる一端である。

以上の外城郭防備施設として細部に於て種々の工夫が行はれてゐる。塀の如きは鐵砲の流行とゝもに厚くなつたが、特に乘越を防ぐため軒端に鐵の忍返をつけたものも生じ、これを劍塀と稱してゐる。第12圖名古屋城不明門上土塀などに見られるが、圖では明瞭に現はれてゐないのを遺憾とする。

又圖では城門に達するに橋臺と稱する土壘になつてゐるが、防備を嚴重にすれば、この部分は第3圖彦根城の如く廊下橋となつて、事ある時には橋を落すことを考へ、更に平時より豫め舁橋、引橋、車橋などと云はれる特殊の裝置を持つた橋としてゐるものもある。建築的には壁體の構造法なども防備と云ふ點から注意されねばなるまい。即ち初期の頃は弓矢が武器であるから、それに耐え得るだけの板壁で充分であつたらうしかるに鐵砲の流布につれて、所謂耐火構造と爲す必要が生じて、壁も厚くなり塗籠構造にまで進展したことになる。從つて丸岡城や松本城、松江城の如くに比較的初期の俤を傳へてゐるものは、外壁を板張として古風を殘してゐるが、姫路城名古屋城の如きは全く堅固な塗籠のみよりなる。更に堅牢にする爲には鐵の延板まで張られるやうになつて、福山城天守の一部などに見られるこの鐵板を張る方法は壁にまでは用ひなくとも、城門、扉の如く特に重要な個所には普通に行はれる方法である。第12圖名古屋城不明門に示される如く、門柱、冠木、扉すべて鐵板で保護せられてゐるが、第13圖彦根城天守入口扉の如きは厚い鐵板で頑丈に覆はれ、現在遺構としてこの種扉の最も古いものである。

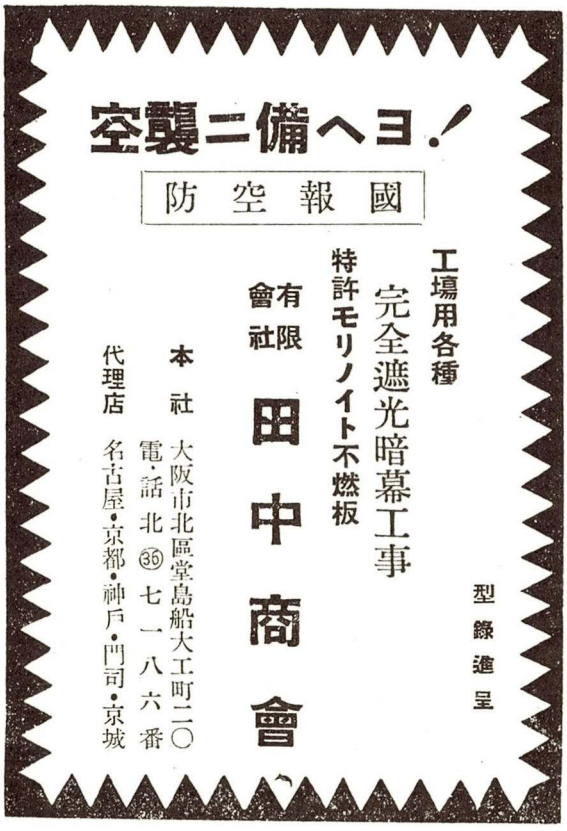
5

近世日本城郭に於ける防備的施設をなほ細かに摘出すれば、多々あるであらうが、大要は上述の如くである。さて我々として屢々質問を受けることは、支那事變初まつて以來大陸の都市城壘が注意を索き、日本城郭に於ては何故彼の地に於ける如く都市全體を圍繞して城壘を設けなかつたかと云ふことである。防備としてかゝる圍繞的城壘は完璧に近いことは當然であつて、わが國近世城郭に於ても所謂總構、總堀の類がこれに近いものとして設けられたものもある。しかるに彼の地に於ける城壘の如く顯著な存在にまで發達してゐない。當時の人としてこの種の築城法を知らなかつた譯は決してない故に、何等かの理由がなけれ

12 名古屋城



ばならない。この點に關しては色々の說明も試みられやうが、一私見として最も大なる理由とも考へられるものを述べて見よう。支那の城郭は傳統的に異民族の侵入に備へるを目的とした爲に、市街そのものを守備する必要があつた事、又戰は消極的で防備のみを主とし、從つて籠城の爲には物資の必要上都市全體を包括圍繞し防備せなければならなかつたこと等が擧げられる。これに對してわが國近世城郭は武家の爭闘の爲で、市民は直接戰闘に關してゐないし、又戰は積極的で防備と云ふよりは寧ろ攻擊を主とした爲に、市街全體を包含して籠城するなどは、戰術として決して採る方法でなかつたこと等に起因する樣に思はれる。既に述べた如く、馬出、枡形と言ふ名に於て或ひは一之門、二之門の如く城門の名稱に於て感取せられるやうに、わが國の城郭に於ては精神的に決して防備と云ふ觀念は見られず、又松江城附櫓の狹間に推察せられる如く最惡の場合に於てさへも、なほ攻擊的精神に溢れてゐるのである。冒頭で述べたやうに城郭とは軍事的目的を以て構築された防禦設備の總稱であるが、この定義は日本城郭に於ては當てはまらないで、寧ろ攻擊の爲の一據點としての施設であると認識しなければならぬやうに考へる。この意味に於てわが國は圍繞的城壘は發達しなかつたと見られやう。さればこの日本武士道の精華である近世城郭の持つ精神的意義は今日特に深く注意されるべきであらう。近時大陸の都市城壘が世人の注意を集くこと多く、それに附隨して前記の如き疑問を持たれる方も多々あるだらうと考へ、敢へて私見の一端を附加して、雜然たる本稿を終はることゝする。（昭和16年天長の佳節に記す）





ロンドン最古の遺構がある事よりも、邦人には寧ろ漱石の文書で知られてゐるロンドン塔に就て記す様にとの本誌の希望の目的の奈邊にあるか或は獨機の空襲の爲に一部破壊されたかの噂を傳へる折柄の思ひ付きででもあらうかとも覺えるが、兎に角此の英首都に完全に殘されて來た古めかしい城に就いてそこはかとなく記すことゝした。

保守的なイギリスの常として、新時代の活氣ある都市の裡に墓場の様に靜かに灰色に死んでゐる多くの建築が大切に殘されてゐる。ロンドンで最古の建築と云へばノルマン様式の時代のもので煤けた裏通りの町角に圓錐形の屋根を上げたテムプル・チヤーチ（Temple church）の黒くすゝけた圓堂の部分と、ウエストミンスター・アベー（Westminster Abbey）の祭壇下部と、ロンドン塔（Tower of London）内の主館（Keep）とを數へるが、テムプル・チヤーチは餘りにも小さいし、ウエストミンスター・アベーは外目に觸れぬ部分的なものであつて、ロンドン塔の主館の様にそれ自體が殆どノルマン様式で殘された大建築であるのに比ぶべくもないし、又、城そのものがノルマン式からゴシツク式に亘る中世紀の城堡としてイギリスでも稀に完備して殘つたものであり、且つは此の城内で行はれた數々の悲話がイギリスの歴史をそのまゝに語つてゐる。そんな興感から私も一般のお上りさんの例に洩れずロンドン滯在の一日を此の城の訪問に費したのであつた。

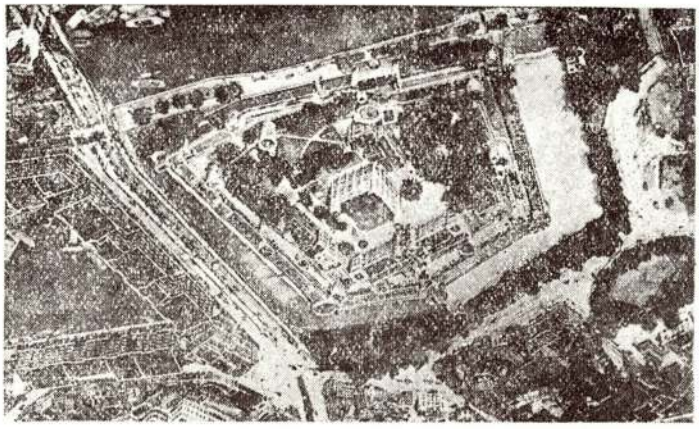
市の中心地を東に次第に閑靜となつて行く公館街を、時には新しく建つた明るい新様式の建築などを見つけなどしてタワー街を端まで行くと、急に開けて廣場の先に濠がありその先に石垣を積みその上に幾多の圓塔や建物が連り、それを越して城内の主館が小さな塔を四方に立てゝ聳える。その邊の感じは正に教育記念塔附近から見た大阪城に髣髴たるものがある。しかも大阪城で少し右手の大手門から城内に入る様に、こゝでも少し右手のバイワード塔（Byward Tower）より入るのである。とにかくこれがロンドン塔であつた。

古代ローマ時代、ケーザルの遠征によりその勢力下に歸した此の地方にローマ人は都市を建てゝロンドヌム（Londomum）と云つた。このロンドンの前身たる町は併し廣くはなかつた。駐屯兵の居城をテームズの北岸に築いた他には家らしいものも無かつたのである。此のローマ式城堡がロンドン塔の濫觴であつた。

此の城基の上にロンドン塔を築いたのが北佛ノルマンヂー王ギヨーム（Guillome）即ち、イギリスを征服してノルマン文化を移植した征服者ウイリアム（William the Conqueror）で、時に西紀1078年であつた。現在の外濠の外廓は此の時のまゝであるし、主館はその營造の儘今に傳へる最古の遺構である。こゝに此の城の出來事が次々に英國史の縮圖として行はれ、城は城堡としての意味の他に國王の居城として、又、政治犯の牢獄として用ゐられて行つた。居城としては1660年以后は一時的にも使はれなくなつたが、牢獄としては1820年まで相變らず使用せられた。1810年以后は造幣局として用ひられ、他に新たに造幣局が設けられて

※筆者は工學博士・東京帝大教授

後は一部を兵營として用ひ、一部は一般觀覽を許し、昔年らの城内を逍遙ひ、昔風の服裝の衛士たちを見、古い悲話慘話を偲ぶが儘にさせて今日に到つたのである。



空中寫眞

城はテームズ河の北岸に沿ひ、南側は河、他の三方は廣い濠を繞らせた右不正五角形をなし、此の内に一段高い不正六角形の内城がある。内外城共垂直の石壁を繞らし要所には圓い物見の塔を立て城門を穿ち、壁の上部は多く部屋になつてゐる。

城の大手は西南角で、濠の手前に先づミツドル・タワー（MiddleTower）とて二個の太い圓塔の中間に城門を穿つたものがあり、これを潜ると堤防狀の道路で濠を渡つて向側の同じく双塔の中間に門を開いたバイワード・タワー（Byward Tower）を潜り始めて城内に入る。この道路の中間にアーチの橋となつた所があるが、こゝにその昔「はね橋」があつたと云はれる。1597年の古圖で見るとこの道路全體が橋であつたし、又、ミツドル・タワーの更に外方に二個の城門があつたから此の大手口は容易に破り得なかたと思はれる。

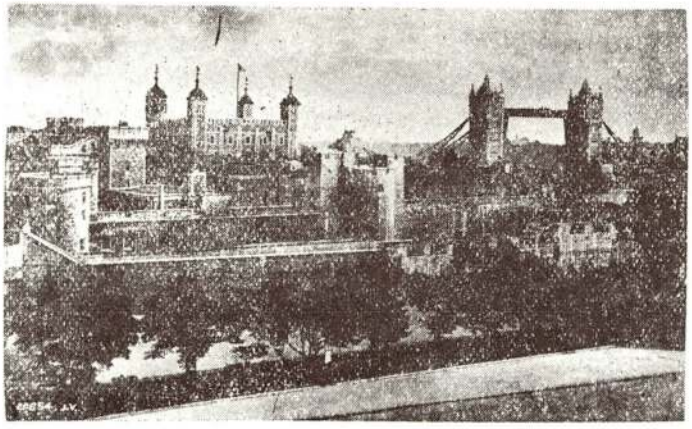
外城の河沿ひの壁には6の望塔がある。最西のが今の大手門であるバイワード塔であり、次のがセント・トーマス塔(St. Thomas Tower)で、塔下には低い塔門が河に直面して開いて居り、河水は此の門下を潜つて直接門内に通じてゐる。ロンドン塔に送られた囚人たちは皆船で河から此の門を潜り門内の船着場から上陸して牢に入れられたのであつた。一度門を潜つたら再度娑婆に戻れぬと聞く此の門を手枷錠厳しい姿で潜つて行つた囚人たちの心中は如何ばかりであつたらうか。此の塔からは内城のウエークフイールド塔（Wakefield Tower)へ橋が架つてゐる。外城の他の三方には西北角と東北角とに各望樓がある、北壁は三角狀に張り出して防禦に便利な様になつてゐる。他に塔の類を持たない。軍事施設の主力は主として河沿ひに注いだと見える。

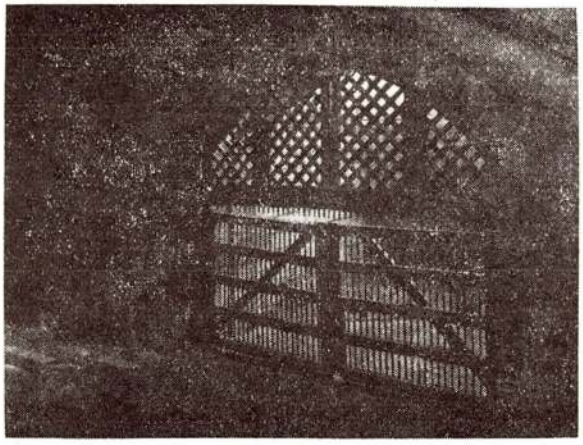
外城に比して内城の堅めは更に嚴重で周圍に十三の塔を持ち、その南壁のセント・トマス塔に向つた所のブラツデイ・タワー（Bloody Tower）の下に僅か城門を開くのみである。

この門から内城の郭内に入ると廣い敷地が開け、中央東寄りに主館ホワイト・タワー（White Tower）が城内一に高く大きく、城内最古最要の構へをどつしりと備へてゐる。

主館の廣さ南北91呎東西73呎の石造壁の厚さ12呎乃至15呎。總四階建軒高90呎。四隅に小塔を立ててゐる。各階共建物の中央を貫いた厚い壁が先づ各階を二室に分ち各室はまた適當に數室に分けられる。この壁は建物の構造を強める

西方よりの全景右方にタワー・ブリツヂを見る





セント・トーマス塔下囚人護送の水門

爲に必要であつたのである。こんな部屋割で、廊下の類も持たず、幼稚な平面計畫と云ふ他はない。

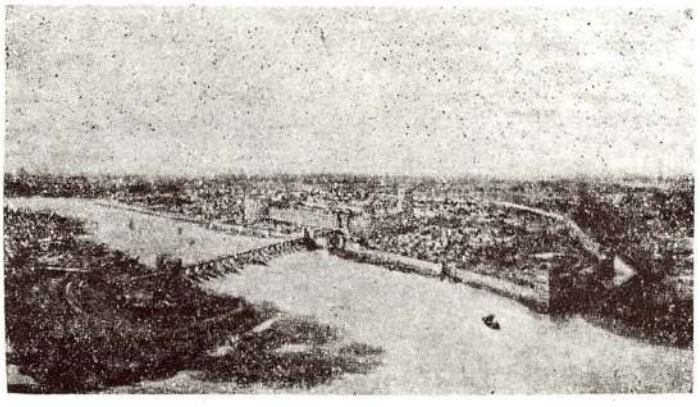
その第一階は中央壁で二室に分けたその西側の廣い、室を晩餐室に用ひた。廣い無裝飾の石壁の室である。晝は射し込む光線も少く陰鬱であるがその昔は夜ともなれば大きな炉に焚火が赤々と焚かれ、時には燈火の下に華な晩餐會が開かれたのであつた。此の地下室や近くの塔内に幾多の幽閉せられた人達が呻吟してゐるのをよそに、華やかに着飾つた城主たちが甘美な音樂で踊つたり談笑裡に盛宴についたりしたとは鬼か魔物か、その壁に沿うて並べられた不氣味に光る甲冑や槍劍の類を見るまでもなく中世紀の弱肉强食の露骨さに慄然たるを覺える。

その室の奥の左側の出入口を潜れば、しかし聖なる光に身は引き緊る。セント・ジョン・チヤペル (St. John Chapel) である。厚い壁。太い柱。厚く重苦しいアーケード。そのアーケードは細長い拜堂を二列にとほつて正面の聖壇の後で半圓形に連接する。圓筒狀の屋根は上を掩うてうす暗い光の下で私達の頭を押へつける。すべてが灰色の石である。柱も壁も天井も。たゞ一つの裝飾もない。灰色の他には色もない。二方に穿たれた幾つかの半圓窓にはステインド・グラスも無い。半透明のガラスを透して狹い窓からの鈍い光で漸くに堂内が見える。何も彼も重々しい。鈍い。陰鬱な巨人の手で頭の上から押へつけられた様な重苦しさに堪へ切れぬとまで思ふ。これがノルマン時代の代表的な室内である。構造の未發達が勢ひ厚い壁や太い柱とにしたと云ひ乍ら、その頃の人の生活の何と暗かつた事だらう。オレンヂ實る南歐の人の明るさに比べて陰鬱な天地に沈む北歐人の暗い氣持はこの室内の様な暗さに却つて調和をも感じたらう。北佛ノルマンヂーの人達がドーヴーを越えて征服し得たイギリスは本國にも增して暗かつた。そんな譯か本國の首都コーン(Caen)の建築にも增して鈍重な暗い建築を幾つも造つて了つたのである。

重い打ちのめされた様な氣持は血痕の消えやらぬ斷頭臺や斷頭斧、數々の手枷足枷や請め道具、扨ては牢獄の壁に殘す囚人の手跡などを見せつけられ、主館の横の鋪石した廣場に出ればその中央に處刑場址が柵で圍まれて居り、アン・ボレイン女王、キヤスリン・ハワード女王、ジエーン・グレイ夫人たちが囚人として花の顏ばせを血に染めた事を物語られては此の重い頭は何を以て贖されやう。側にある教會堂 St. Peter Vincula Royal Chapel が十五世紀末の様式で嚴そかに建つのも却つて皮肉に感ぜられるばかりである。

(以下27頁につゞく)

古代ローマ時代のロンドン塔



二條城二之丸について

澤島英太郎*

緒

昭和14年10月25日特別の思召を以て京都市に御下賜の旨仰せ出だされた舊離宮二條城は、翌15年紀元の佳節を期して、ひろく公開されることゝなつて茲に1年數ケ月、既に拜觀された方も多いと信じるが、この機會に同城二之丸に關して、其の由緒と價値を省察し、一層認識を深めていたゞく一助とし、併せて向後の研究に俟つ3、4の點を指摘して置きたいと思ふ。本丸の現狀については「史迹と美術」(昭和15年1月・2月號)拙稿に述べて置いたし、茲には割愛する。

二條城の概觀と沿革の大要

二條城は御承知のやうに京都市中京區二條通堀川西入二條城町541番地に在る。この二條城町なる名稱は御下賜後、新に名付けられた町名であつた守屋孝氏所藏にかゝる寛永版京都古圖に依ると、東堀川二條上る町に、「八丁めるびす川町」、同下る町に「二條土橋下町」の記入があるが、二條城町と命名せられた一帶には別に町名が無かつたやうであるから、之も已むを得ぬ次第であつた。

二條城の城構はいはゆる平城に屬し、內部中央以西に本丸、以東に二之丸が在り、この二郭を外曲輪が圍み、土居・石垣共の四周を繞り、內外二重に濠を繞らし、外濠外周の延長は略16町に及ぶ。形は長方形で、東(堀川通)を正面とし、南北の中央から稍西寄りのところで屈曲し少しく狹まり全體の形は凸字形をしてゐる。

正面の東大手門及び竹屋町筋の北大手門の兩櫓門は、筋鐵の屏儼然として、城の出入口を固め、東南・西南の兩隅には、櫓が現存して、在りし日の構へを偲ぶことが出來る。

城內東半を占める二之丸の、莊重な築地に圍まれた一郭內には二之丸御殿がある。西半を占める本丸は、方70餘間、四圍に內濠を繞らしてゐる。周圍の石壘上には多門阯があり、西南隅の天守閣阯、他の各隅の隅櫓阯は、壘の內側四周の石階段と共に現存し、嘗ての本丸の偉觀の跡をとゞめてゐる。本丸東濠中央の橋臺上には、本丸唯一の舊構たる櫓門が現存し、二之丸とつなぐ橋があつて清らかな水を湛へた堀に其の影を寫す姿は麗しい。なほ本丸の郭內には嘗て京都皇宮今出川御門內にあつた舊柱宮御殿が移し建てられ、屢々の行幸啓の砌には、其の奥御座所を、御用に充てさせられたと拜承する。二丸之については、後に詳しく述べるが以上が二條城の概觀である。

此の地に德川家康が地を相して、造營に着手したのは、慶長6年の末のことであつたらしい(東照宮御實記附錄、武德編年集成等)。然し慶長7年5月のことゝする文獻も多い。關ケ原役後、實權を收めた家康にとつては、從前の上京正親町(今中立賣)に在つた長者町御屋敷、即ち彼の「聚樂の御館」は必然手狹であつたらうし、京都の地に對する深遠な政治的意味もあつて、上洛中の居館に充つべき二條城の造營に急ぎ着手したのであらう。普請に際し長者町屋敷の屋形を引移したことが、慶長見聞書、柳營日次記慶長錄に參看される。創建の規模及び竣成の年次はまだ判明して居ない。慶長8年2月家康將軍下の後、翌3月この城に公式に入つてゐる事實に徵し、或る程度の竣成を見てゐたらうと推察し得るにとゞまる。京兆典要に依ると、普請・作事は慶長11年まで續いたといふ、即ち造營着手後數年を費して、逐次其の規模を整へたものらしいのである。慶長16年3月28日家康・秀賴が此處に會見したこと、同19年及元和元年夏・冬兩陣に家康が、この城にあつて謀築したことなどの史實は特に顯著である。

元和5年9月18日秀忠は二條城に入り、自ら城郭經營のことを沙汰してゐる(考亮記)。翌6年和子入內の準備として、一部の增・修築を命じたのであらう。同9年秀忠と家光が當城に對面した際

※文部省技師

の徳川實記の記事に、御座所・大廣間上段・大廣間・二ノ間等の名が見えてゐる。現存二之丸御殿の大部は、當時すでに今日見る如き配置で、二之丸の中樞部を占めて建つてゐたと認められる。然し、本丸及外曲輪等の様子はどうであつたか、史料不充分の現在としては猶後考を俟つ次第である。

元和5年月7幕府は伏見城番を罷め、大阪城代を置き、尋いで伏見城を毀たしめてゐる。同年9月の秀忠二條城修築の沙汰と併せ考へ、其の間兩者の間に何らか關聯するところがあつたのかも知れぬ。

寛永元年以降は、同3年を期して後水尾天皇の行幸を仰がんが爲めに、幕府は新に行幸御殿・中宮御殿等を二之丸苑池の南に營み、以て儀御所となし、更に從前の殿閣を修め、裝飾を新たにし、又伏見城再興天守並に殿宇・長屋等を當城に移築して、其の結構を整備したのである。

帝室博物館秋山鑑査官が發表せられた「二條離宮の沿革」に於て、尾張徳川侯爵家藏の「寛永元年、甲子5月吉日、二條城繪圖」及び其の書類一括の史料に基き、本丸石壘が、寛永元年夏以來築造されたことを指摘して居られるのは、注目すべきことである。即ち本丸石壘は、尾州、紀伊の兩藩、松平隱岐守、井伊掃部守、松平下總守、本多美濃守の六組の親藩の分擔に依り、總石高計225萬石餘の工費を以て、この時築造され、この石壘上及郭内に伏見城の天守及び殿宇・長屋が營まれたといふ。

本丸のかゝる大規模な造營が、寛永初年に行はれてゐる事を考へると、それまでの二條城は、いまの二之丸が城の主體を成してゐたのでは無からうかと考へられるのである。又本丸があつても、もつと其の規模が小さいものであつたらうし、或は今の二之丸が本丸に相當し、其の城制は頗る簡單なもので無かつたかと推察されるのである。

本丸及び其の外曲輪の石壘築造形式の相似せること、二之丸外曲輪石壘と、前二者の築造形式、いひかへれば石垣の積み方の相違せること等に徴しても、上述の推察は的を外れたものでないやうに思ふのである。

かゝる大規模の整備が行はれた直後の様子は、「寛永行幸御城内圖」(圖書寮藏)等の古圖に徴し詳しく知ることが出來る。これに據ると、當時本丸は、西南隅に五層の天守聳立し、隅櫓、多門その四圍を固め、郭内には、東から南及び西にかけて、玄關・遠待・廣間・書院・御殿(御座之間)が配置せられ、中央北東寄りに、附屬諸舍即ち御風呂屋・湯殿・臺所・御料理之間・御藏・右筆部屋・御年寄衆部屋・坊主部屋等が櫛比してゐた。さうして出丸を有する西枡形及び本丸遠待から御橋廊下を經て、二之丸御殿黒書院に連る廊下の二ケ所のみを以て外曲輪及び二之丸に通じてゐたのである。

而して所收の古圖に示す如く、二之丸には、現存御殿の背後、臺所及び御清所の西方に伺候之間・年寄衆部屋・役人衆部屋・長局・藏・繋廊等の殿宇廊庶棟を並べ、更に白書院北方に御殿・御風呂屋・御臺所等があつたのである。

而してまた大廣間南方に舞臺・樂屋等が建ち竝び、現存南側築地の西端は四ツ脚御門に續き、更に西に延び、北に折れて、行幸御殿の南庭を劃してゐた。前記四ツ脚御門の西北に御唐門があること、中門を附せる行幸御殿につゞく御次之間・中宮御殿・御休息間等の配置、又行幸御殿から北方に廊が延びて池畔の御亭に導いてゐること、本丸の東濠に沿ひ、通路を隔てゝ御長局や、西御長屋藏が南北に長く延び、御橋廊下前に溜り櫓があることなど、又この圖に於て看過してはならぬ點である。

尚城の外郭をなす石壘の四隅には櫓が建ち、東及北の櫓門・西枡形の埋門・各番所・牆壁等備はり、外濠四周を繞り、當城史の前後を通じて、内外の規構最も完備せる時期を現出してゐた。なほこゝで注意して置きたいことは、行幸御殿が、圖示の如き位置に建てられた事情や、又二之丸庭園が、明らかに、それ以前からあつた庭園の一部を行幸御殿に對するやうに改作されてゐると認むべき形迹を歴然と存してゐる事實に徴しても、現存の二之丸御殿が前に述べたやうに、元和5年を降るもので無いことは確實だと認められることである。

崇傳の寛永行幸記に、

行幸於二條堀河第、雖高構大築全存、更沿革之

新營華殿、爲儲御所、其修飾金銀珠玉王周琢畵雲廊月殿、白天五移來者乎、別築中宮之玉殿女院之瓊宮、盡美盡善也、云々

とあつて、從前から立派な御殿が完備してゐたことを明示しゐるのである。

然し今の二之丸御殿が慶長度の造營に悉く竣成してゐたかどうかは、遽に斷定しかねる。各御殿の障壁畵の筆者が傳ふるごとく狩野興意、尙信、探幽等の筆になるものかどうかといふ問題と共に興味ある向後の研究課題なのである。

次に本丸と二之丸の孰れもに、遠待・廣間・小廣間・御座間等が重複して建てられてゐることにも注意しなければならぬ。これは恐らく前將軍と時の將軍二人を、同時に當城に迎へねばならなかつたことに基いてゐると思はれる。然もそれ等殿舍の配置に於て、其の形式を異にしてゐるのは、其の造營年次に相當の隔たりがあることの一つの證左と見ることが出來よう。

寛永3年9月將軍德川家光は前將軍德川秀忠と共に上洛して、後水尾天皇の臨幸を仰ぎ奉り、駐蹕5日に亘り、その盛儀は、聚樂第行幸に勝るものがあつたといふ。蓋し德川氏の權勢のいよいよ熾なることを示さんとしたものであつて、聚樂第行幸に於て秀吉が太閤として皇室に赤誠を吐露したのとは、形を同じくして其の實を異にするものであつた點を看逃してはならぬ。

この盛儀の後、幕府は行幸御殿等を仙洞御所に移し奉つたといふ。寛永11年將軍家光上洛して此の城に駐旆したが、其の後は久しく將軍上洛のことも無かつたゝめ、幕府は主要建物を遺して、城內の建物を逐次他に分移又は撤廢したやうである。

寛延3年8月雷火に依り天守を燒失し、天明8年の大火に本丸の建物は櫓門のみを殘して悉く類燒して了つた。

文久3年3月將軍家茂が上洛してこの城に入つた。家光上洛以來實に200餘年のことであつた。慶應3年將軍慶喜が、城中から上奏して、大政を奉還し、大義の前に恭順を致したことはあまりにも有名である。以上が明治以前に於ける沿革の大要である。詳しくは史蹟名勝天然記念物、第14卷12號の芝岡書齋編修官「皇室と二條城」、大熊博士「二條城時代の規模と本丸二之丸の殿屋」、上田三平氏「史蹟としての二條城」、吉永博士「二條城二之丸庭園」、拙稿「國寶二條城」等を參看せられたい。

二之丸の現狀と二之丸御殿

二條城二之丸は、前述のやうに城內東半內郭を占め、東西凡96間、南北凡120間の廣さを有する。

東側南半及び南側には築地及土塀を繞らし、南側築地東寄りに唐門を配する。唐門を潛ると、廣場をへだてゝ正面に玄關及び遠待がある。二之丸御殿はこの遠待に始まり、式臺・大廣間・黑書院と順次東南より西北に雁行し、黑書院後方に白書院が配置せられ、其の建坪數合せて略1000坪に達する。革殿檜を連れ、巨屋甍を並べて其の宏壯を誇る樣はまことに雄大且壯麗である。

遠待北方に位置せる臺所、御淸所の規模亦頗る壯大で、その東北の土藏（門・番所附）と共によく當城盛時の舊規を存してゐる。

大廣間の西方には二之丸庭園がある。庭園は、所謂築山泉水庭であつて、池中に三つの中島を配し、蓬萊・方丈・瀛洲を象り、豪宕の趣ある石組を池汀、池邊に配してゐる。

行幸御殿・中宮御殿・舞臺等の跡は今一面の芝生となつて居り、池に望んで建てられてゐた池亭への廊下の礎石と覺しきものが、3個のこつて居るばかりである。

西側はすべて竹垣となり、通路と垣をへだてゝ本丸の東濠に接してゐる。以上が二之丸の現狀である。上記遺構中、特に名高い二之丸御殿及び臺所・御淸所等に就いて、以下に少しく說明を加へて置きたいと思ふ。

唐門及築地　築地は東築地折廻桁行延長54間（但し柱間の數・間數は凡70間）、西築地折廻桁行延長19間あり、屋根本瓦葺で、極めて莊重典雅である。東築地の北端は、もと土藏に接してゐた。この土藏は明治45年頃撤去されて已に無い。從つて築地の北の妻は其の頃の補加にかゝる。

東大手門は扉の筋鐵もいかめしい城門であるが門をくゞるとすぐ正面に、堂々たるこの築地が長く延びてゐて、其の點他の城郭とは頗る趣を異に

するものがある。

唐門は四脚唐門、屋根切妻造檜皮葺前後に唐破風を附した豊麗な桃山風の建築である。

御車寄及遠侍　御車寄は遠侍に附設され南面してゐる。正面に軒唐破風を設けた入母屋造檜皮葺の建物で、欄間に彫刻を嵌めてゐる。唐戸は吊戸で左右に引くやうになつて居り、床は石敷である。内部正面に木階を附し、遠侍三之間前の入側に上るやうになつてゐる。天井は格天井で鏡板は欄であるといふ。

遠侍は坪數凡370.、入母屋造・本瓦葺で、内部は、勅使之間上段・帳臺之間・同下段・殿上・遠侍一之間・二之間、三之間、若松之間、芙蓉之間及び四周入側より成つてゐて其の規模は御殿中最も大きい。唐門を入り、廣場をへだてゝ遠侍の壯大な搏風が、御車寄を前にして聳えてゐるのは、まことに偉觀である。

上段は廣さ21疊、床・違棚・御帳臺があり、共に金地に楓樹を畫く。下段は廣さ35疊、南側貼付に檜を畫いてゐる。天井は孰れも格天井である。下段と殿上との境の欄間には松に牡丹、錦鷄の彫刻を貼めてゐる。尙遠侍の上段には附書院が無く、又入側境の障子が遠侍式臺の諸室と共に腰高竪繁棧であること、長押金具が大廣間以西と異り結袋形葵唐草であることを注意したい。殿上、遠侍一之間・二之間・三之間の障壁畫は大竹に郡虎である。他は省略する。

式　臺　遠侍殿上の西方に連り、遠侍、大廣間をつなぐ。南に式臺之間45疊、北に老中之間が三室ある。これら各御殿の入側の天井格間小壁等の繪は、宮内省京都地方事務所武村工務課長の御示教に依ると、明治30年ごろから數年を費して、土佐武光、久保田桃水、武内雅隆氏等に依り揮毫されたものであつて、明治34年11月の繪畫叢誌にそのことが見えてゐる由である。一見して新しいことが判る、參考までに記して置く。式臺老中之間三室は餘程簡素で、障壁畫も鴨居下のみで、小壁は白壁であり、天井は北入側と共に棹緣天井である。探幽筆と傳へる三之間の雪柳に白鷺の圖は、なかなか傑れてゐる。

大廣間　二之丸御殿中遠侍に次ぐ大度である。坪數凡そ 190 坪、大棟は遠侍と平行して南北に走り、巨大な搏風が、屹立する樣は、まことに壯大である。妻は木連格子、懸魚、鰭付で破風には飾金具を打つてゐる。

大廣間の南の濡緣（落緣）に立つて、式臺・遠侍をふりかへると、殿屋參差の美しい樣子が、瞳を惹きつける。大廣間西方の庭園を隔てゝ、奥の黒書院を眺めても、亦頗る立派である。

さうした外觀よりも、大廣間内部の華麗さは又壯觀である。内部は上段・下段（併せて92疊）、三之間・槍之間・四周入側等に分れてゐる。上段には、正面に床、棚を配し、右に附書院を設け左に御帳臺を構へ、天井を折上格天井としてゐる。

二之間、三之間及び三之間、槍之間、境欄間にはそれぞれ豊麗の欄間彫刻を飾り、棚、帳臺、構長押、格天井等の要所には錺金具を打つ。壁貼付襖、天井等の金碧の壯麗さ亦一入である。

大廣間西側の入側は北に延びて蘇鐵之間と稱する廣廊を形成し、此より西北の黒書院に導く。

黒書院　黒書院は特に桃山時代の豪華な書院造の遺風を傳へて他の諸殿に比し最も絢麗である。平面は上段・二之間・三之間・菊之間・牡丹之間等に分れてゐる。慶喜が大政奉還を内議したのもこの黒書院であつた。以上遠侍より黒書院に至る數棟の大度は、其の規模の宏壯雄大、裝飾の豪華絢麗なると相俟ち、此種書院造遺構中、完存且傑出せる點に於て其の右に出するものなしと稱するも、過稱ではない。

白書院　黒書院の背後にある。將軍の燕居に充て、又寢室として用ひた建物で、規模は比較的小さい。内部は上段・二之間・三之間・四之間等より成り、上段と二之間の界には、此處に限つて襖がたてゝある。其の裝飾は表向御殿と趣を異にし、清楚瀟灑を旨としてある。大正御大禮の大饗宴の砌、上段を便殿に充てさせ給ふたことは、畏れ多いことであつた。

大臺所・御清所　大臺所は、東面して建ち、桁行正面17間、深間右側面8間、單層、入母屋造、本瓦葺の豪壯な建物である。東の正面に内開きの扉及脇戸を附した堂々たる出入口を開き、其處を入つた所は廣さ40坪あまりのたゝき土間となつて、土間の北半は母屋から北に突出てゐて、其の部分の上方屋根に、煙抜きを設けてゐる。今かま

どは無いが、古圖に釜屋なる記入があるから、舊態を窺ふことができる。土間の上の重量に小屋、組を組上げた構架も却つて興味を惹く。

母屋は前記土間の部分を除いてはすべて床板張りで、母屋の西及南側は夫々間仕切柱をたて、計六室に區劃してゐる。

其の區劃を「寛行々幸御殿」に照しあはせるのに變つて居らぬから、舊規を存して居ると認められる。建具のうち硝子等はいふまでもなく近年の補加にかゝる。

土間をめぐるL字形の板間は、廣々として居り、天井は一面の竿緣天井である。臺所東側には上下二段の格子窓があいてゐる。それから前記出入口脇戸に近く方14尺ばかりの一區劃があつて、（圖版參照）土間に面する側に太い格子をたて並べ、他の二方を嵌板で仕切つて居り、其上に手すりを附した見張番所があるのも大變面白い。大臺所は目下の所公開されるに至つてゐないが、この種の遺構は極めて稀であるし、さうした意味で注意すべきものであるから、京都市に於て、速かに設備を整へられ、公開されんことを希望する次第である。御清所（おきよどころ）は、大臺所と廊下で連る御料理所であるが、建物の規模もすつと小さく、それだけに大臺所に比し內部はすつと整つて居る。天井及び屋根に煙抜きの設備があり、又南側に井戸がある。

結

以上が二之丸に於ける主要遺構の概要である。近世史に於ける重要なる事蹟が、この二條城を舞臺として展開し、然も主要建物が現存せることに於て、特に意義深いものがあるのを感ずる。德川氏が其の權勢を誇て造營したこの二條城が、幕政の最後を飾る舞台となつたことも、思へば、奇しきさだめであつた。

二條城は明治17年7月以來、二條離宮として宮內省の管轄する所となつて居た。寛永3年後水尾天皇の聖駕を迎へ奉つたこと、明治以後長く皇室の離宮たりしことは、二條城の歷史を通じて最も光榮ある事實である。現存二之丸遺構に就いて述べることを主旨とした本稿では、此の點に就いて詳しく解れる餘裕を持たなかつたが二條城を考へるとき、常に深く銘記しなくてならぬ事である。

尙二條城にあつた建物を移したといはれる知恩院の國寶小方丈や、今橫濱三溪園原邸にある國寶聽秋閣に關しても幾多問題が殘されて居る現狀である。

上記の小稿中に觸れて置いた問題と共に、この點に關し新しい研究が續々行はれんことを希つて已まない。尙本稿に圖版として揭げた寫眞は熟れも筆者自らの撮影にかゝるものたることを記して責任の所在を明らかにして置く

（昭和16年4月稿）

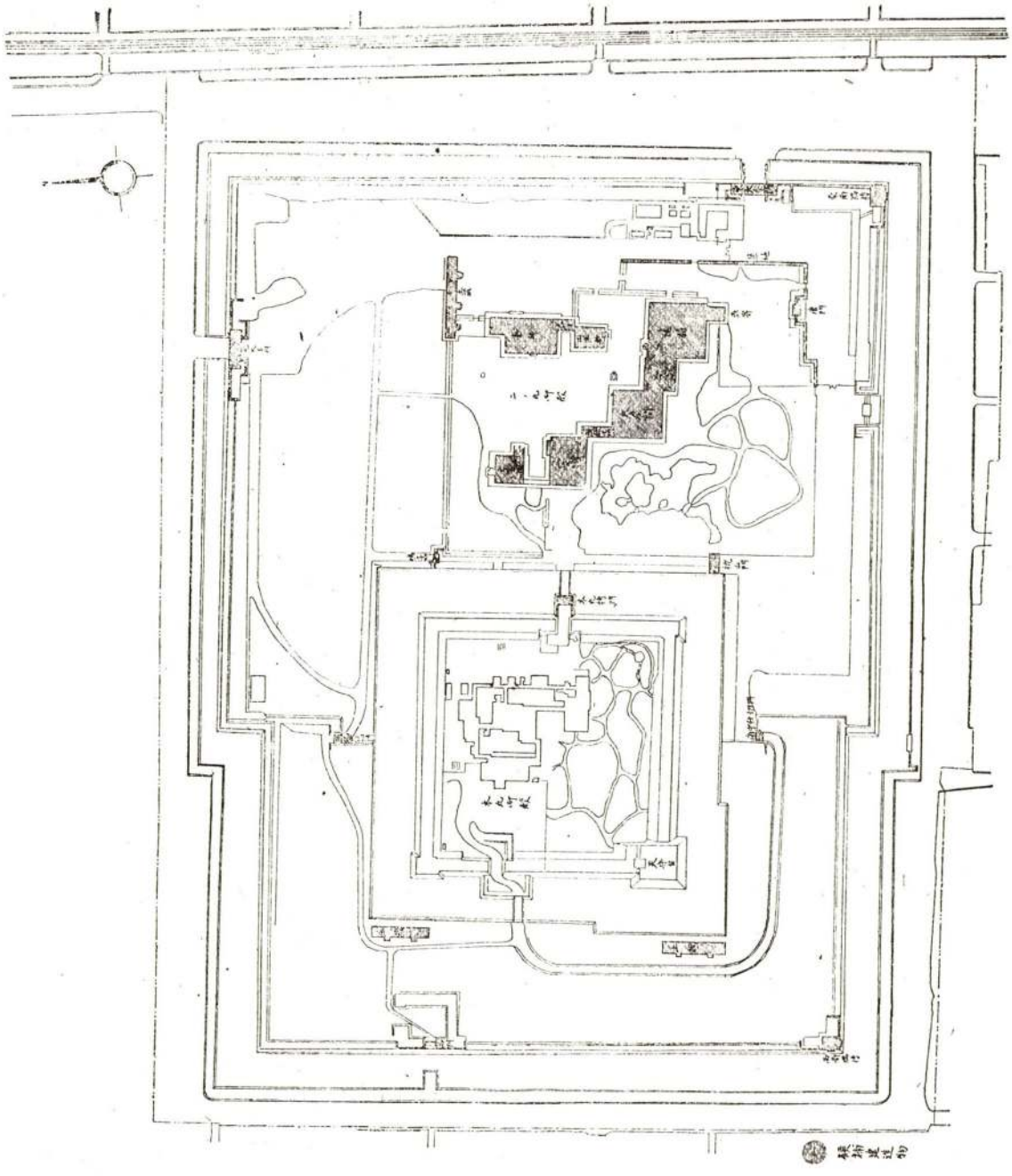
（倫敦塔22頁より續く）

ロンドン塔見物は愉快なものではない。急ぎ城を辭し、今一度顧る。塔にも建物にも十五世紀頃の樣式のものが多い。それらが集まつてロンドン塔と云ふ一個の統一ある群像をなす。イギリス古城の中でも特に中世紀的である。ウインゾル城は中世紀的だが建物が多く殘らずウオーリツク城は優れてゐるが近世紀的要素も大いにある。他に比ぶべきもない中世紀の儘の一劃がロンドン市中にある事だけでも珍しい。

近くのタワー・ブリツヂへと歩みつゝ、だからこの古城と調和する樣このテームズに架つた雄大な開閉橋が中世紀式を採つたのだなと思ふ。丁度橋は閉ぢられてゐて、逞しい足のロンドン馬が大きな車を引いて橋を渡つて來たところであつた。

正　誤

第24輯第六號「神社建築樣式の變遷」8頁左上より2行目「一間社春日造が四殿、各一間の間隔をもつて連結し、七間社の樣に見える」は「一間社春日造が二殿、一間の間隔をもつて連結して三間社の樣になり、この社殿が二社近接して左右に並んでゐる。」と訂正



二條城配置圖

家　具　裝　飾

Architectural　Review
Dec. 1940 より木村抄記

實用性にのみ驅られて兎角忘れ勝ちだつた家庭調度品の裝飾的部門を强調する意味からこゝに化粧品について少し述べてみよう。

室内意匠の殆んど全部は物品の貯藏の問題に關聯して居ると云つても過言ではない、設計の行屆いて居ない家では其處に住む人の凡ゆる家財道具が床の上にウズ高く積重ねられて居るし、設計のいゝ家では夫等家財道具が奇麗に片付いて居る。

寢室はベツトで引立つと同じ樣に衣裳棚やタンスで引立つものである。そして又近代的な臺所は唯床から天井まで或は壁一ぱい戸棚の連續より出來て居るとしか思はれない。

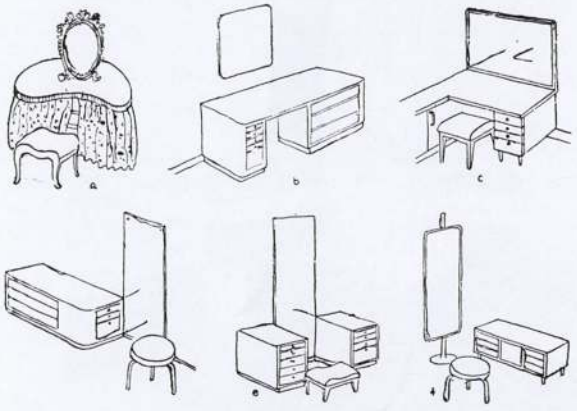
是等の家具調度美について個々の目的に依り建築家の頭の良さがどの程度迄にその適用性に裝飾効果を示すかを期し度いと思ふ。

化　粧　品

婦人用化粧臺に必要な調度美は次の樣なものである、（婦人用は男子用と大體同じ樣ではあるが、もつと色々の問題が考慮される）

卽人工照明を持つ鏡の平らな卓或は棚の寶石用抽出しパウダーボツクス、櫛類、マニキユアーセツト及ピン等の小さなものを入れる淺い抽出、そして色々の瓶用の深い抽出し等である。

此處に引例した殊に考案のされて居る化粧品には自然所有者の特長と云ふものが良く現はれて居る。例へば或婦人はブラツシ、罐或は瓶等を卓の上に整頓して並べるのを好む。又或る婦人は寫眞1の樣に凡てのものを仕舞ひ込むのを好む。何れにせよ化粧品は形や大さに依つて次の二つの中の一つに屬する。



3



1

卽机に向ふと同樣に化粧臺に向ふには膝を入れる部分の周りに色々の棚や抽出しが配置される。他の一つは化粧品の高さ或は道具棚の位置に制限なしに横へ配置されるものとである。勿論此の場合凡て手の屆く範圍内に置かれてはあるが。

化粧臺の設計に於て鏡はうるさい存在である。卽壁に固定された平らな垂直面と壁に直角な平面とを組合はせることは容易なことではないからである。電燈が完備される前迄は自然光線を鏡に向つて顏に當てる樣にする爲に一層うるさいものであつた。定石としては鏡を化粧臺の上に置くか或は光を背にして「シルエツト」として浮び出させる樣にして窓の正面に化粧臺を置くのが普通である。

鏡は取付け困難の爲めに大さの制限を受け、又光線を遮ぎるが爲めに著しい制限を受ける

（**第2圖・a圖參照**）此の型の化粧臺は未だ依然として一般的のものである。殊に木綿更紗で飾られた生地のまゝのものが一般に普及して居る。

是が大きな商店の飾窓に手際よく陳列されると、非常に優雅に見える。然しその木部に指跡を附けられたり、又その更紗が摺の間を掻き捜されてくしやくしやになつて仕舞へば問題は別だ。化粧する爲には鏡が大きい程いいし電燈で日光の影をなくする樣に出來ると同樣、化粧臺も造り付けの鏡のある壁へ据える事も出來る。化粧臺



2

が移動式の場合ですら此方法で固定されてある鏡は壁に對する化粧臺の位置を定め、室に於けるその位置迄も定めるのである。（b圖參圖）

鏡が化粧臺と同じ巾で、その上にきちんと取付けられて居るならば、この二つは一つの造り付け調度品の様に見える。（c圖參照）

然し鏡が非常に大きな場合は寫眞4の様にガラスの壁に向つて化粧臺が置かれて居る様に見える。この方法は壁の見掛けの長さを二倍にする隅の扱ひ方如何に依り一層効果のあるものである。

化粧臺に竪長の鏡を取付ける必要のある場合がある、家具屋は普通此の場合二個の化粧箱の間へ取付けて居る。（e圖參照）又別の方法として化粧臺の横に壁へ取付ける場合もある。こうすれば若し抽出しが横に取付けてある様な場合非常に便利である（d圖參照）

又應々獨立のものとして設計され、化粧箱や腰掛がその脇に置かれる。（f圖參照）化粧箱は鏡に比べて一般に低く鏡に向つて脇に置かれる。

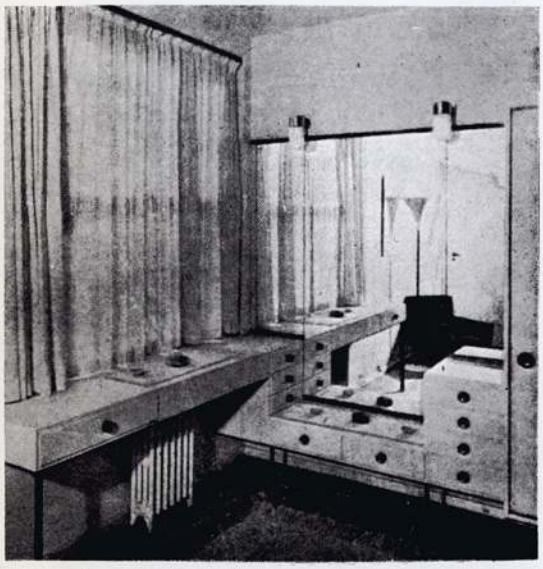
現在では殆んど一般的になつて來た事だが寢室の凡ゆる貯藏設備を建物の一部として造るより寧ろ獨立したものとしての形式で、所有者の自由設計に任すと云ふ様な習慣は多くのデザイナーをして化粧道具以外の物を入れる戸棚或は抽出しで化粧臺を構成する様な結果にして仕舞つた。

寫眞1はフレデリツク・ギツバード氏設計になる婦の人化粧臺の主なる道具入に就いて説明して見やう。

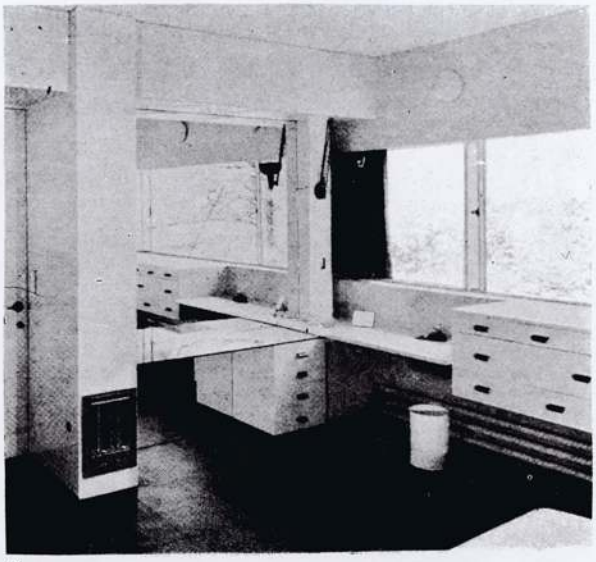
[1]即ち中央の淺い凹部は簾・ブラツシ及び化粧品を仕舞ひ込む個所であり、左の抽出しは寶石入となつてゐる。

臺の脚部の淺い抽出しはマニキユアセツト、白粉函、ピン等の小物入、の深い抽出しは各種の瓶等を整理する様になつて居る。凹部の内部四方の側にホワイトエナメル仕上、底部は乳白ガラス貼り、蓋は軟かいヒンヂで取付けられて居て兎角雜然となりがちな化粧道具を蔽ひ隱す様になつて居る。

鏡の上に取付けてある電燈は蓋をあけると、自働的に點く様になつて居る。骨組にアメリカンマホガニーの厚いベニヤ板で組立てられ抽出しは光澤のある硬質のマホガニー製、又寶石用の抽出はビロードで内面を覆つてある。金屬製の脚や握り玉は銅鍍金をしてある。



4



5

寫眞4では抽出しはパイプの脚で床から適度に上げられ、一段の抽出しのある棚がそれに直角に延びて居る。左側の小さな抽出しは化粧臺の上に辷り出る様に仕込まれて居り、それで行き止りの隅角部を逃げて居る。尙一つの自由な取扱ひ方が寫眞5に示されて居る。

卽衣裳や他の一般的な物を仕舞ふ抽出しが同じペンキで仕上げられ、同一の取手で統一されて居り、木とガラスの棚で繋がつて居る。

化粧臺の一般的の仕上は大體に於て室内の装飾的價値に支配されるものである。然しその使用に際して兎角白粉の薄い膜が纖目や小孔に入り易いと云ふこと、或は脂質のものが入つて居る化粧瓶又はこぼれた液體を注意す可き目的があると云ふこと、且又その表面がきれいに仕上げられて居ると云ふこと等は一考を要する價値がある。雜巾で容易に拭き取ることの出來る様な堅い平らな表面例へばセルロイド製のもの（寫眞8參照）或はガラス製のもの（寫眞5、7參照）、が望ましい。

然し若し装飾的價値よりも軟かい感じの仕上が望ましい場合は、その上をプレートガラスで覆つた方がよい、例へば寫眞4及7の様に。

抽出の内部はスムースで容易に掃除の出來る様にすべきである、普通ビロードで貼り上げてある寶石用の特別なものは例外である。凡ゆる貯藏設備に於ては思慮深い選擇と附屬物に對しての意匠等から齎らす装飾的價値に於ける貢献は非常なものである。そしてそれは一般に釣合と云ふものに對しての密接な關係に依つて始めて爲し得るものである。

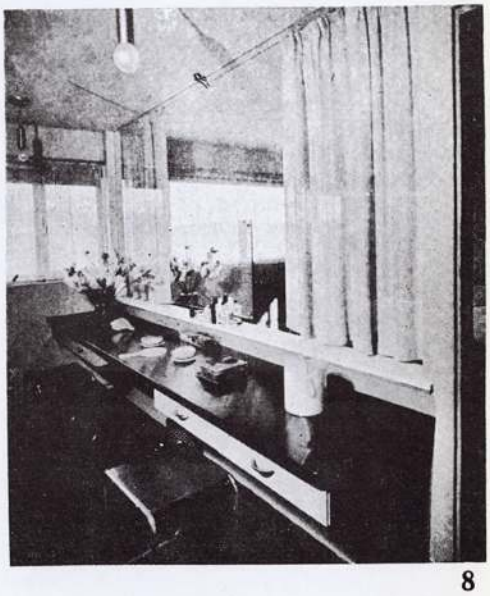


6

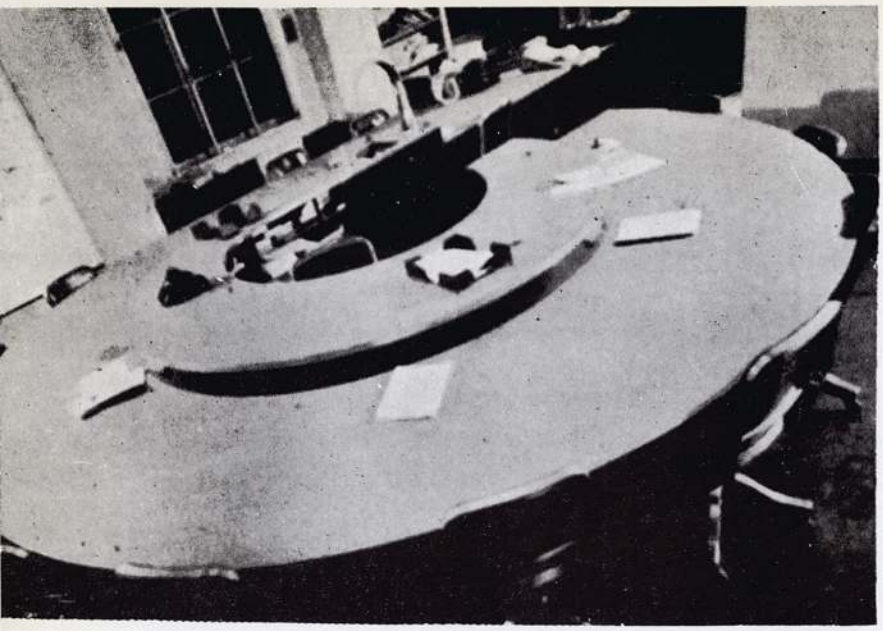
寫眞6、の様に鏡の上部に横長の電燈を取り付けたり或は寫眞2、の様に圓い鏡には球狀の電燈を取り付けたり或は又寫眞4、の様に二個のブラツケットを持つて來たりして弱い垂直線を強調する様にして居る。その他寫眞5及8に示す様に明かに前以てそう云ふ風に設計してあるとは云へ化粧臺には全然關係なしに電燈を天井や壁に取付ける場合もある。抽出しの引手はそれ自身の美しい形よりもその取り付けられて居る面との釣合に注意す可きである。蝶番や支柱或は飾釘の様な比較的些細な部分は凡て室内装飾の根本である緻密な設計に與るところが多い。



7



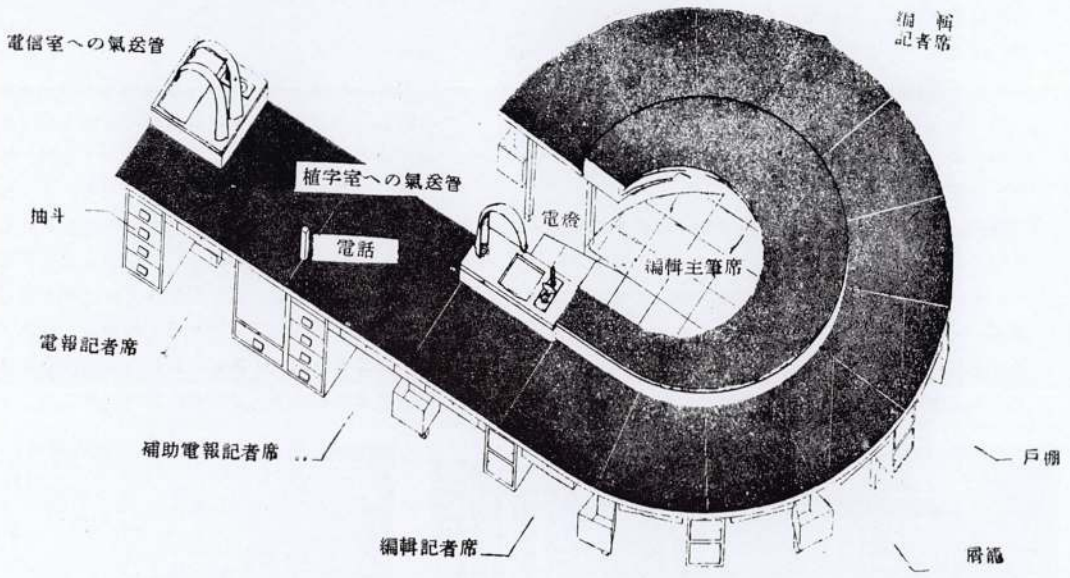
8



1. 編輯記者席

圓形のテーブルで10人のシートがあり、その他に電報記者のシートまである。

2



ある新聞社の編輯記者席

George Howe ならびに Louis E. Mcallister は Philadelphia Evening Bulletin の社屋改裝に當つて、平面計畫に光庭を採用して12,000平方呎からの space を活用し、air-conditioning に、照明に新しさを見せてゐる。

圖に示すものは設備の一例で、第1圖及第2圖は編輯主筆席を中央に圍んだ記事編輯記者の机である。第3圖及第4圖は、三行廣告編輯記者のため、特に音響効果を考へた仕切りを有つ机である。

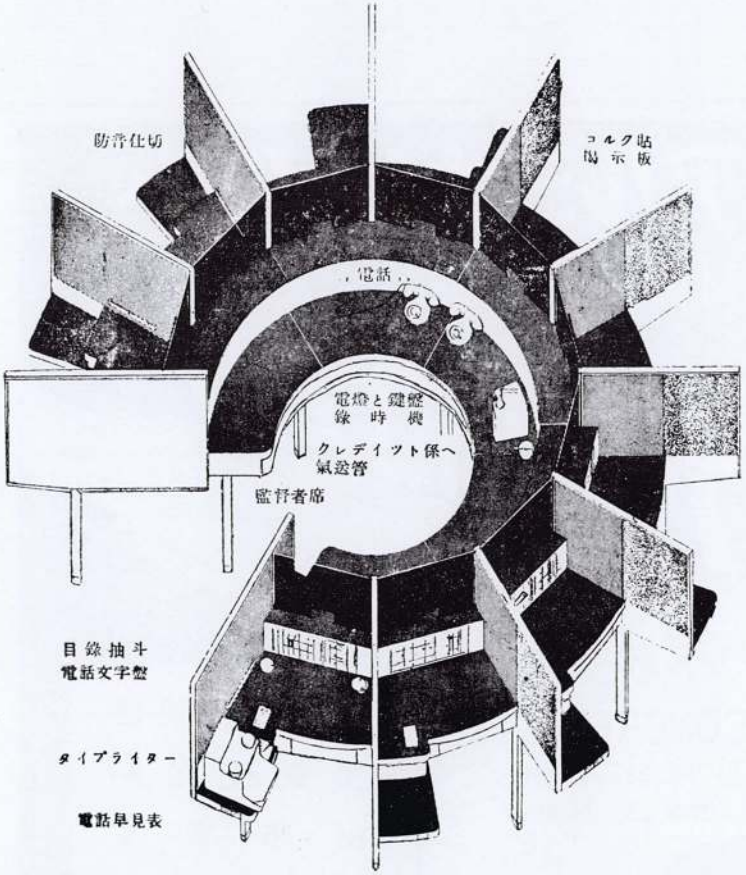
(From Architectual Record Fed. 1940. 塚本. 抄譯)

3

3行廣告編輯記者席



4

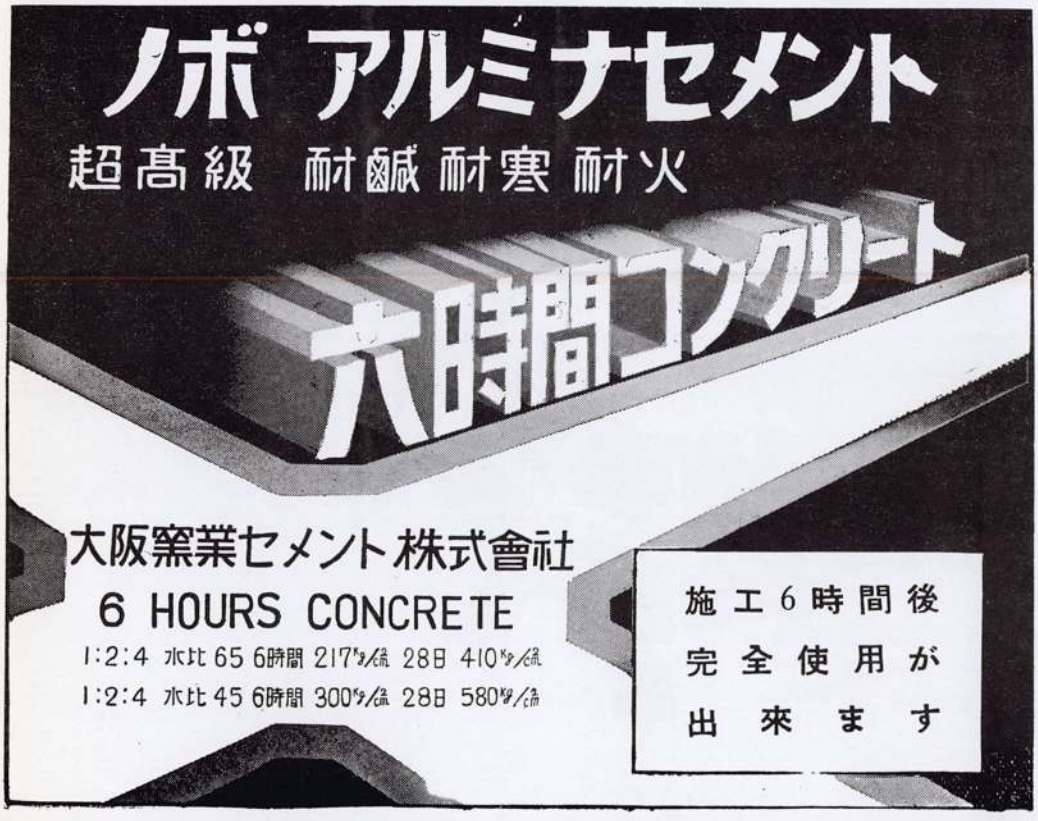


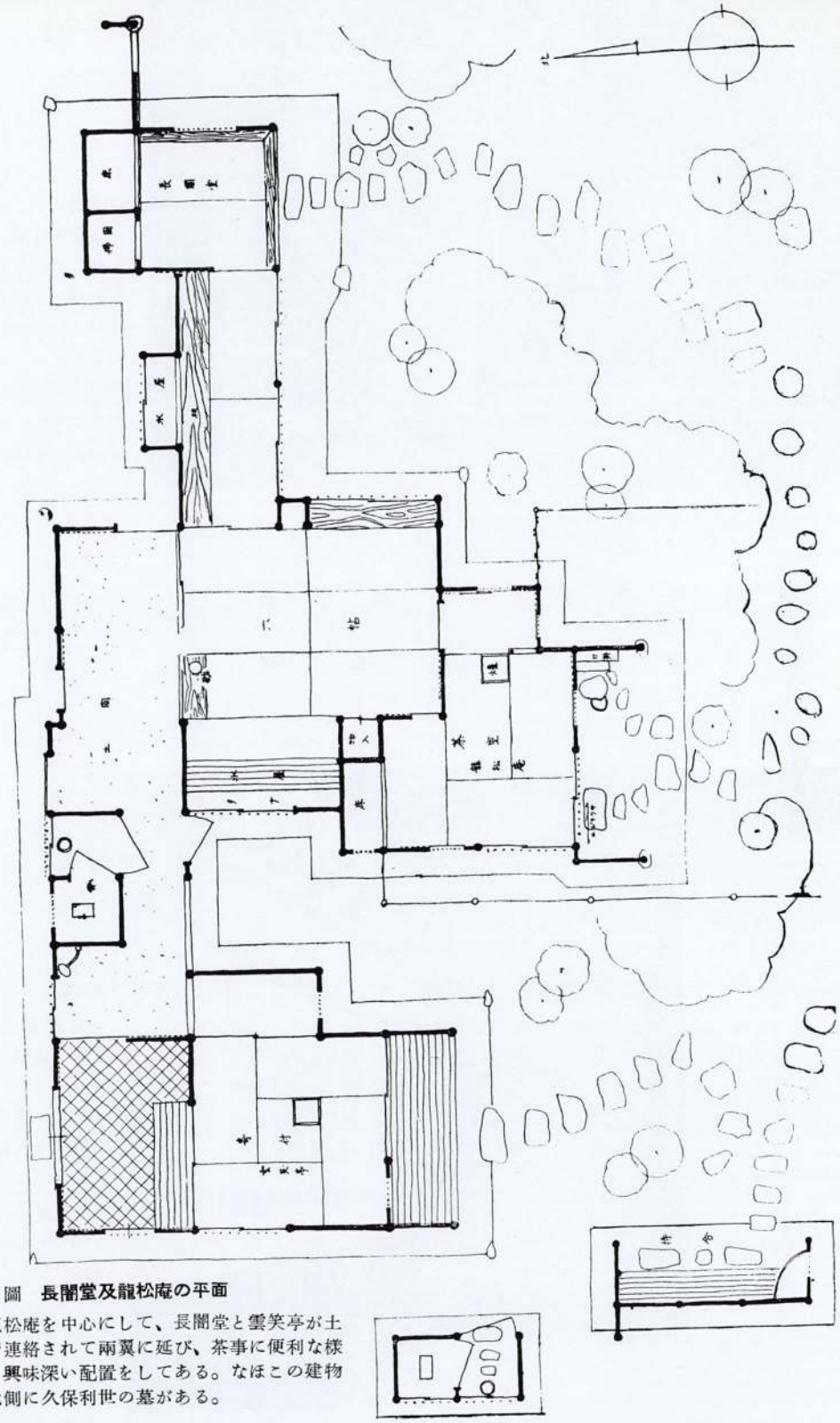
大阪支店　大阪市西區江戸堀南通一丁目
江戸橋ビル
電話土佐堀四六八七番



(見本カタログ進呈)

本　社　東京市麹町區丸ノ内一ノ六東京海上ビル四階
一、四四八、九號　電話(23)(七三二八番・七三九番
丸ノ内(四六三五番
大阪工場　大阪市西成區津守町四四三　電話櫻川二三八九
東京工場　東京市足立區千住町元町六九　電話足立三〇七六
電話淺草五五四〇
滿洲出張所　大連市山縣通一五六　電話大連七〇三四番





第1圖　**長閣堂及龍松庵の平面**

龍松庵を中心にして、長閣堂と雲笑亭が土間で連絡されて兩翼に延び、茶事に便利な様に、興味深い配置をしてある。なほこの建物の北側に久保利世の墓がある。



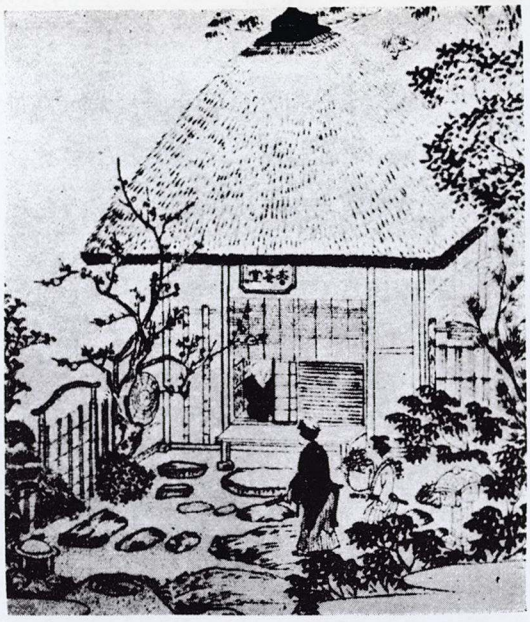
第2圖
長閘堂外部
檜皮葺の寄形屋根で御影堂の遺構であるだけに、いかめしい外觀である柱なども太い。境内には楓樹が多く、若葉に埋もれたところはいかにも靜かな境地である。

大和路の茶室・2・長閘堂と龍松庵

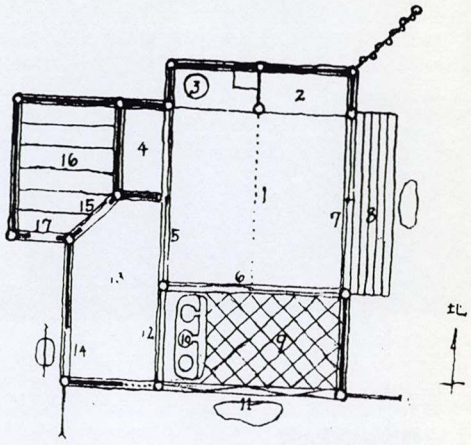
岡田孝男



第3圖
長閘堂内部
床の間の左が持佛堂で、その下に地袋物入がある。爐はその左隅に隅切りとしてある。天井は高く、紙貼天井で、公慶上人の勸進帳が貼つてある。右の窓下には板が入つて疊の足らぬところを補つてゐる。



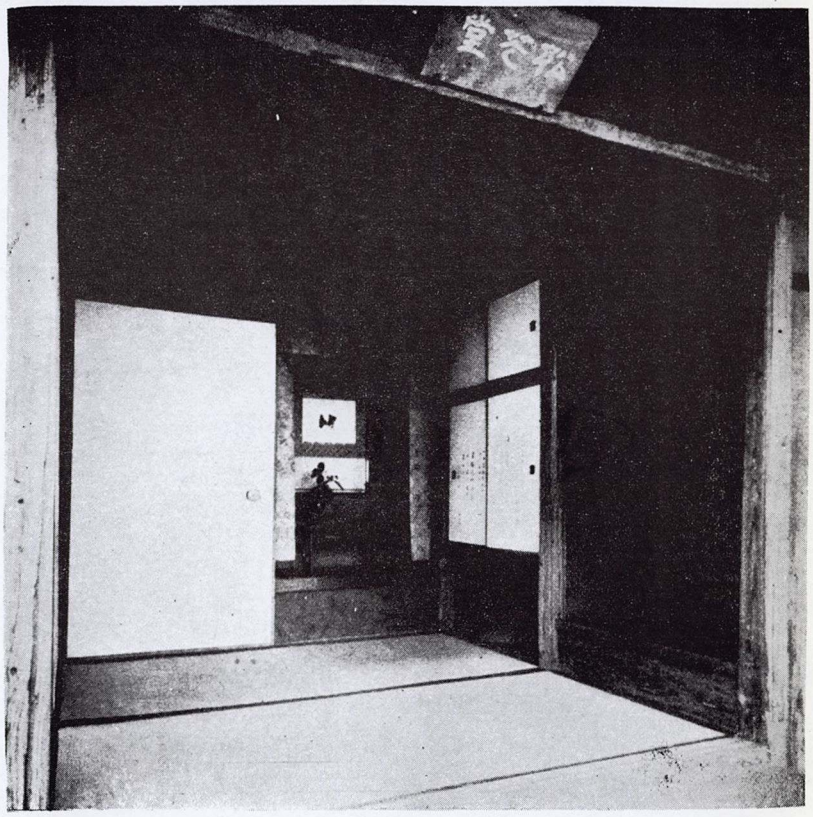
4



6. 松花堂平面圖

1	茶室二帖	7	障子二枚	13	一帖踏込
2	書院床	8	濡椽	14	躙リ口
3	丸爐	9	瓦敷土間	15	華燈口
4	持拂堂	10	竈	16	勝手
5	襖二枚引違	11	二枚折兩開戸	17	猪ノ目形窓
9	戸襖二枚引違	12	地窓		

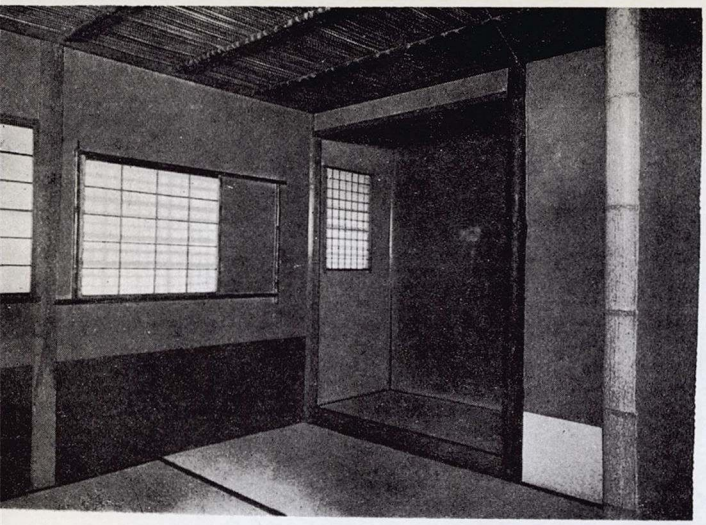
5



第4圖
松花堂外部古圖
都名所林泉圖繪所載の古圖で、今の外觀によく似てゐる、檜皮葺寶形屋根の美しい建物である。

第5圖
松花堂內部
右の書院床は板で貼り巡らしてある。その左が二段の袋戸棚となり、その下部が板敷で丸爐が切つてある。その左か持佛堂で掛物は昭乘筆の自畵像である松花堂の額は寫し。

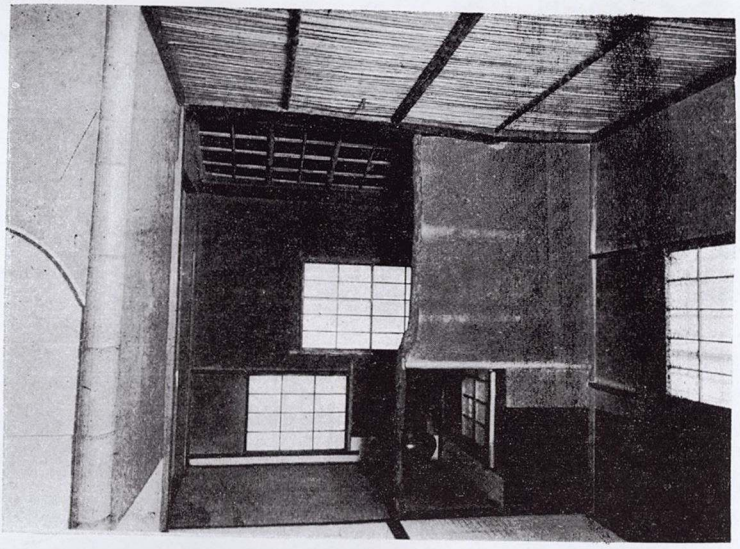
第6圖
松花堂プラン
二帖敷の室に半坪の土間、一帖の踏込、臺目の板の間がつき方丈の建物である。



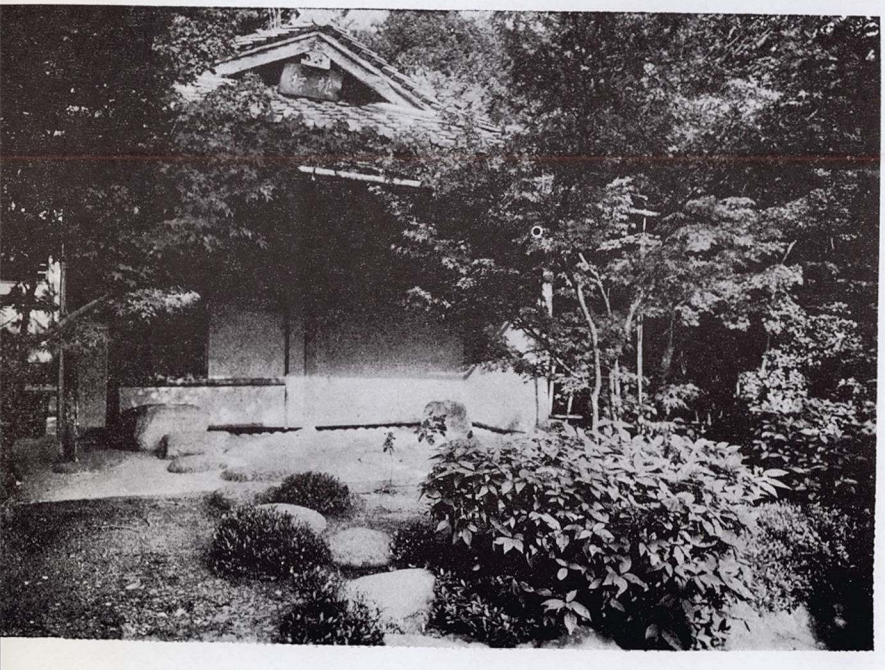
大和路の茶室・2・
長閘堂と龍松庵

岡田孝男

第7圖
龍松庵の床の間
八窓庵は床の左に小壁があつたが、これは床の右に小壁がある。窓の位置もよく似てゐるが全體として切れ込みが足らぬ様である。



第8圖
龍松庵爐邊
天井が、八窓庵と少し違ふが茶道口、給仕口の位置、窓の位置などよく似せてある。



第9圖
龍松庵外觀
瓦葺入母屋の妻入りとなり、檜皮葺の庇がついてゐる。額は公慶上人の筆楓樹との調和がよい。

大和路の茶室 ・2・

長閤堂と龍松庵

岡田孝男*

奈良市の西北郊外の小高い丘の麓にある興福院は、靜かな尼寺である。

近くには、光明皇后が業病の人々の爲に、藥湯をたてゝ、自から世話された浴室と、本尊十一面觀音像の豊麗な姿で有名な法華寺や、五重塔の精巧な模型の殘つてゐる海龍王寺や、又不退寺等があり、少し西寄りには、平城宮跡もあつて、遠く奈良時代の薫り豊かな土地である。京都の靜けさと違つた平明さがあり、先月訪れた奈良市の東郊博物館の邊と又別の境地である。

× × ×

大軌の奈良驛又は省線の奈良驛から、バスが出る。油坂を通つて佐保川を渡り、六七分にして、道は奈良中學に突き當る。こゝでバスを下りて更に北の方へ少し上ると、興福院の門に達する。寺門を入つて石段を登る參道の左に庫裡が見え、右の木立の中に、長閤堂龍松庵等の一連の數寄屋が建つてゐる。平面圖に見らるゝ通り、移轉した龍松庵を中心に再建の長閤堂、新築の雲笑亭が、土間で連絡して兩翼に延び、なほ待合、便所なども具備して、茶事を行ふのに、極めて便利な配置となつてゐる。庭に楓樹が多く。若葉の此頃、又紅葉の晩秋の頃には、一層興趣を添えるのである。

× × ×

先づ長閤堂を訪れやう。長閤堂は、寛永の頃、奈良の佗茶人、久保權太夫利世が、俊乘坊重源の御影堂の古いのを貰ひ受け、庭内に移しつくろつた、方7尺の茶堂で、長閤堂記には

> 堂のうち、わずかに方7尺、其内に爐を入、床有り、押入あり、水屋有て、茶具をとり入、床に花懸物して、押入床を持佛堂にかまへて、阿彌陀の木像を安置し、客に茶の湯を出せども、せまきことなし、鴨の長明は維摩の方丈をまなびて隱居し、人にまじはらざるをたのしみ、ただ一すぢに彌陀をねがへり。我堂は方丈にたらずといへども、あまたの人を入れて茶湯せしなれば、淨名居士の獅子の座にはかなへりとぞおもふ。何ぞ長明を求めんや。

とある通り、7尺四方、2帖敷の建物で、鴨長明の方丈よりも秀れて、多くの人に茶の湯を出しても狹くないと、氣焰をあげてゐるが、八幡の松花堂の2帖敷と共に、持佛堂のある茶堂式建物の双璧とせられるものである。

× × ×

久保權太夫利世は、奈良春日神社の神官の家に生れ（元龜2年）、少年時代より茶にしたしんだが、長じて、豊公の北野の大茶會を見學して感銘し、さゝやかな佗茶室を構えた。

> 我親の裏に、僅か4帖敷の小室ありしを、しつらひ、2帖敷かこひ、1帖の勝手と今1帖を寢所と定め、足さする方には棚をつり、晝は膳をのぼせおきて、今おもえば、はれの客をもよびしなり。こゝろざしだにたるまねば、いさみをあるじとして、人に恥ることなきものなり。今の世に思へば、たれありて、このしかたならんたゞ志つよからぬゆえに、いさみなくして、人をも身をも恥るゆへ、道に至るものなしとみえし。

と長閤堂記に述懐してゐる通り、若い時から佗茶に激し、「佗茶をなすには、卑下すべからず。勇猛心あつて始めて道に到る」と說いてゐるが、まことに經驗から割出した至言である。茶は本來無一物でよく、缺けた茶碗、曲つた柱、道具も室も在り合せのものでよい。ただお茶がうまくたてばそれでよいのだと、人も云ひ、我も說くのであるがいざ茶をやり、客でも招く段になると、相當の道具、相當の設備がないと、恥しくて、出來ないものである。しかし茶會をして、亭主をつとめないと、何時迄たつても本道に入り難い。そこで、物は粗末でも食物はまづくとも、眞心こめて、客を招くことが必要となる。たゞ貧しいことを、人をも身をも恥じて小さくなつてゐたのでは大成しな

* 大阪三越住宅部

い。利世の當時の人も「志つよからぬゆへに、勇みがなく」、恥がつて佗茶を大成しないのだと慨嘆し、佗茶を大成するには、決して卑下してはならぬ。勇猛心をもつて、堂々とやれと說いてゐる。

× × ×

久保利世は、小堀遠州、松花堂昭乘、江月和尙等とも親交があつた。奈良には、松花堂の兄中沼左京がゐて、彼も佗茶人であつたから、自然松花堂昭乘とも交涉があつたものらしい。「八幡の房、これを山莊の樂となれり」と長閤堂記に賞めて、彼を懷ひ、昭乘の方丈である松花堂の2帖敷の茶堂を見て、氣に入つたものらしく、自分も7尺堂（後に遠州が長閤堂と命名）を思ひついたのであらう。

小堀遠州とは「予若かりし時より相伴なふる事年久し」と遠州が書いてゐる通り、長年の交友であつたらしく、遠州が伏見奉行となつてからは、奈良へも近く、より繁く交友する機が多かつたことであらう。長閤堂の名は、遠州が7尺堂を訪れた時、利世が額を乞ふたころ、古の鴨長明に因んで、長閤と書いたことによるもので、長閤堂記には、

額一つ書いて給り候へと申せば、うちゑみ給ひさらばとて、長閤の二字をかき付給へり。いかなる義にて有ぞと問ひ申せば、昔の長明は物しりにして、智あきらかなる故、明の文字かなへり、其方は物しらず智くらうして、しかも方丈をこのめるによりて、長の文字をとりて、閤は其心なりとわらひ給へり。去る程に、7尺堂をさして長閤堂と名付、長閤子をわが表德號となせり。

とあるのを見ても、相當相信じ、相許してゐたことが判る。寬永17年70才で（松花堂より1年遲れて）歿するや、遠州は鄭重なる追悼文を書き、今興福院に保存されてゐる。

大德寺の江月和尙は7尺堂の建築を祝つて

盡大三千七尺堂　堂中同座佛無量
自由一箇自然樂　今作西方古道場

と贈つてゐる。

× × ×

當時の長閤堂の建物は、奈良の岡田寬齋に傳はり、寬齋はこれが、俊乘坊の御影堂であつたことに氣附き、東大寺の公慶上人に贈り、上人は喜こんで、これを假りに勸進所裏の納屋に積んでおいたところ、心なき下男共が、この由緖ある古材であることに氣付かず、薪として焚いてししまつたので、現在の建物は、久保家の緣家なる中垣家に所藏する堂の古圖により復原して興福院內に建てたものである。

檜皮葺寶形根屋の茶室で、高さも高い。床の間と持佛堂が南面し、爐は持佛堂の前の疊の左隅に切つてある。7尺四方の中に疊2枚をしき、殘りは東と南に板が入れてある。天井は高さ7尺5寸の紙貼天井で、上慶上人の勸進帳が貼りつけてある。柱なども、御影堂の古材を模して太いものが使つてある。

長閤堂と共に有名な松花堂は、八幡町、男山の泉坊にあつたものを、明治になつてから、山下の西村氏邸に移したもので、1間半四方の萱葺寶屋根の茶堂である。2帖の茶室は書院床が南面し、その左に二段の袋戶棚があり、その下部に丸爐が切つてある。その左には持佛堂がある。昭乘はこの狹い2帖敷の室を茶席とし、書齋とし、晝寢とし看經の室として、人も招き、自から老後を樂しんだ。長閤堂の2帖敷と共に、持佛堂のある茶堂として興味深い建物である。

× × ×

龍松庵は、元祿年中に、公慶上人が、その居龍松院の境內に建てたもので、織部好の八窓庵（本誌6月號所載）を模したと傳えられる。先年長閤堂の再建を機として、當寺へ移轉された。

床の間と點前疊の關係も、中柱、釣棚のあたりも、又茶道口、給仕口の位置も、八窓庵にそつくりで、違ふのは、天井の一部と躙り口の位置だけである。よく似せてあるが、よく見ると八窓庵に比して、その木割の冴えや、氣品の高さが、遙かに劣つてゐる。寫しをする人の識見にもよるであらうが、本貨と寫しがかくまでに違ふものかと、先月號にも書いておいた通り、比較見學されゝば興味深いことである。

× × ×

水屋の間や、雲笑亭は新に建つたもので、これ等が、土間で有機的に連絡され、興味深い配置になつてゐる。

城郭と國防

古川重春

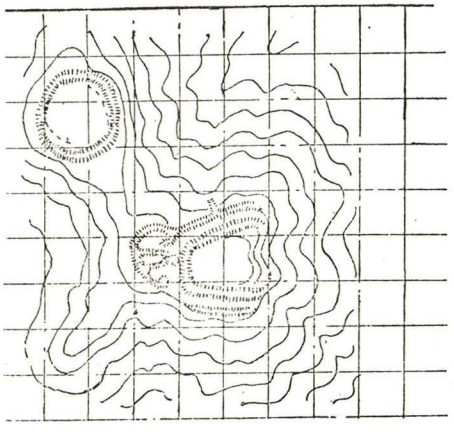
1 城の語源

「シロ」の語源は桓武天皇の平安御遷都の大詔に基因して居ると云ふ學説が眞に近いと私は信ずる。上世我國に漢文字が取入れられて以來、寧樂朝の終りの頃まで土扁に成の旁の城といふ文字は凡て城と音に讀まれてゐる、例へば磯城、高城、茨城岩城、葛城、稻城、水城、奥城などのやうに凡て城と讀まれてゐる。なほ城といふ文字に就いては支那に生れたものであるため本元の解釋に苦しむ譯であるが、何れ土より成つた塘に共意を含めて城といふ文字が生れたものではあるまいか。

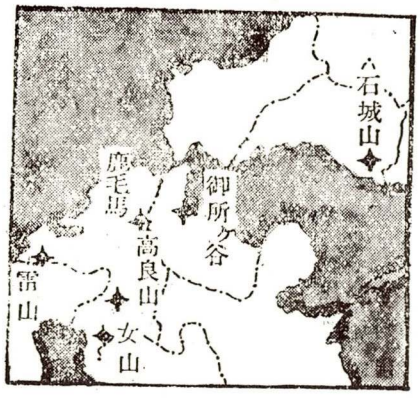
また城の外に柵も「キ」と讀まれ、垣も牧も皆「キ」と讀まれてゐる。周防岩城山の列石址が牧ノ石と通稱されてゐたのは牧に通ずるからであらう。之等の外に上古乃至上世特別な靈域或は墳墓等を護つたものであらうと云はれる、最近我考古學界に論戰の花を咲かせた、筑紫地方に散在する神籠石と冠稱せられたる遺址は、ある地域を限界した垣であり、是が城に通ずるからは防禦施設と見做せば敵が攻めて來るか、さなくは犯者が侵入するかは別として城と見られぬことはない。然しそれは近世武將の築いた城郭に比べると其構想、機能に於いて格段の相違があつて私が本篇に於いて述べんとする城郭としての諸條件を缺いでゐるやうであるから、此處では單に靈域を護つた垣であり築城學の上から單に城堡の一部を構成してゐたものと見て置きたい。

さて桓武天皇の延暦十三年十一月長岡ノ京から平安ノ京に御遷都在らせられし時の大詔に『此國山河襟帶自然の城を作す、斯形勝に因つて新號を制すべし、宜しく山背國を山城國と改むべし』と仰せられまして都の背に在つた山背國を要害に因んで山城と文字も國名も改められ、特に山城（ヤマキ）と呼べと仰せになつたものを、一般庶民はやはり口馴れた通り『ヤマシロ』（山背）と訓み、折角改つた新國名の山城を「ヤマシロ」と訓みならはし、遂に城と云ふ文字に「シロ」と云ふ訓が生れたものであると云ふ學説がある。之れは六國史の日本書記や續日本記にも多賀ノ柵、大野ノ城とあり、又日本後記などには多賀ノ城、雄勝ノ城と明かに區別されてゐる。故に城は大和言葉であつて城と訓じ、漢音では城、吳音では城と讀む。さすれば上世は大野ノ城、山城と「キ」と讀み、中世に降つて城「シロ」と訓み、近世に至つて安土城「ジヤウ」とか清州城の如く「ジヤウ」と讀まれるやうになつたのであらう。然し築城學の熟語としては山城「ヤマジロ」、平山城「ヒラヤマジロ」、平城「ヒラジロ」と訓讀するのが正しい讀方である。

さすれば【武家名目抄】に『按するに城はいにしへ「キ」といひしを中頃音の儘に讀み、其後「シロ」といふことになりたり』とあるは始めの「キ」が中頃に「シロ」と訓まれ其後「ジヤウ」となつたのは私の考證と一致するやうであります。さすれば特に名古屋城、姫路城等の如く固有名詞の如くなつてゐるもの丶外は、寧樂朝以前は柵も城も「キ」と讀み、平安朝に降つて柵「サク」、城「シロ」近世の城を「ジヤウ」と讀めば學文的に明瞭



1 北海道旅來の「チヤシ」
區劃方一口間



2 神籠石分布圖

であらう。

2 上古の築址

我國にあつては古代城堡の遺址ではなかつたかと擬せられる神籠石は筑紫地方に其遺址が殘存してゐる、然し事史前に屬し文獻上の確證を把握する事が出來ない。又先住民族の城寨址と考察される北海道地方の「チヤシ」や前記の神籠石或は臨時築城と見られる稻城など我築城史の上から之れを見れば、古代の城堡なりと斷定するには躊躇せざるを得ない。されば學究的に立脚して築城の起源を上古に索むることもなしがたい。假りにその起原を遠く神代に索め、或は夫れ以前とするも遺址を對照とする單なる類推に過ずして文獻上的確な考證が伴はない限り、史學としての價値に乏しい。殊に神護石や「チヤシ」の殘址を以つて城堡と斷定するのは時機は未だ早いと思はれる。

元來我國の城堡なるものは定義がある譯ではないが通則として壘隍垣塀等を構へ防備を施設し兵馬の屯營に適する造營物を伴ふものを指すのであつて萬里の長城の如き圍郭とは甚だしい相違がある、然し城としての目的は同じ「ライン」であつても城の持つ機能及び構相に於ては異つたものである。

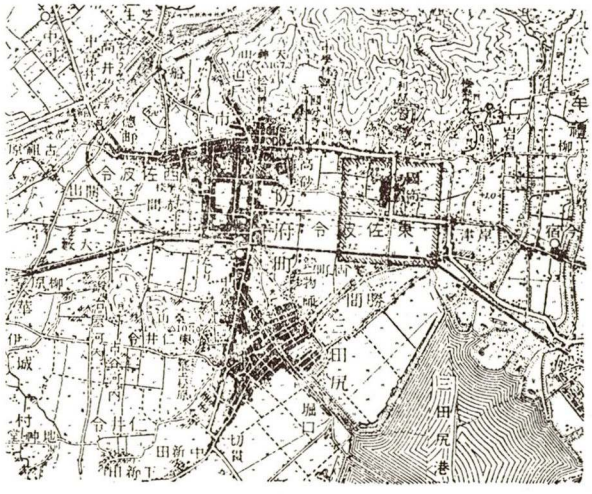
之れを要するに古代の城寨ではなかつたかと言論される神籠石、更に遡上つて先住種族の城堡ではなかつたかと云ふ「チヤシ」尙古く遡上つて原始住民の城址はどうであつたか等、考古學的想像を逞しくするなれば、恐らく人類の生存せる限りその本能性に鑑み、殆んど無限に近い過去を有するものと言へやう

3 我國城柵の起原

爰に孝德天皇は御即位の元年冬十二月難波の長柄ノ豐碕ノ宮に御遷都あらせられ、我國最初の大化と云ふ年號を制定された。その御宮廷は殆んど恒久的の區劃を持つ大規模のものであつたと想像するに難くない、翌大化二年正月制度革新の大詔がこの難波の地から御煥發あらせられた。こは中央集權の實績を擧げるための行政組織の大改革であつて、我國に於いては明治維新と共に劃期的の二大革新であつた。

その行政組織に於ては民族の世襲制度を撤廢し即ち皇族及び臣、連、國造、縣主等の私有する土地人民を收めしめ公地公民となし、また私有の武器を兵庫に藏めて公器となし、或は社會的施設としては班田の制を定め、六歲以上の男女に一定の土地を班ち授けて之れを耕作せしめる等、又租庸、調、の稅法を定めた、租とは田地の收獲の中より幾分上納するもの、庸とは力役の代りに米、布などを納めること、調とは綿布等の織物を納めることである。

行政區劃の根本は畿內と地方を別ち、京師に令坊を置き令一人にて四坊を統ぶ。また地方は國府を置き國衙を設け、國廳の官制を定め、守、權ノ守、介、權ノ介以下の官吏を配屬し、俸給の代りに田面が給與されたものである。國府も山口縣の防府



3 國防の國府

に存在してゐた周防の國府は方八町、條坊區劃は整然としたものであつた。さすれば之と對照して中央京師即ち難波京に條坊區劃の存在せしことは殆んど確定的のものであらう。因に京師に置かれた令は現今の警視廳で職は總監が市長を兼ね、坊は警察署と區役所を兼ねたやうなものであつたと思はれる。

扨て大化改新當時の我國情は全く多事多難で現代語の所謂國家非常時であつた。曩に小野妹子以來正式遣隋使の派遣に次いで唐と交誼が結ばれ、彼れの高き文化は我朝に直流する狀態であつた。從つて文化的刺戟を受くること繁く、殊に佛教文化は國を蔽ひ殆んど「クライマツクス」に達せんとした。一面に於いて國家の體面を整へる上にも恒久的都城の經營が緊迫したのも寧ろ當然である。

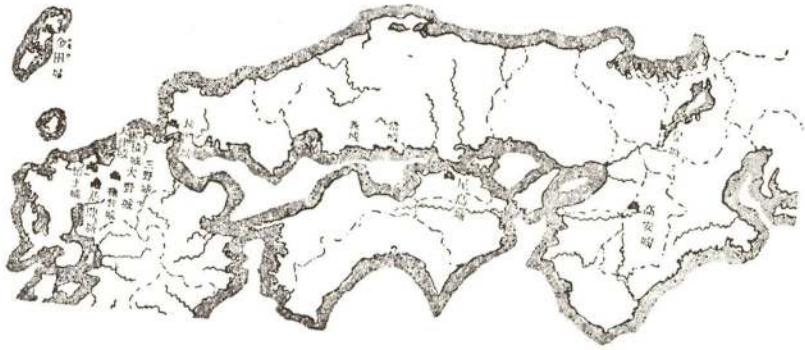
然るに此の文化を介して國家的交誼の半面に於いて唐と三韓を挾んで勢力爭ひが起り任那の日本府は次の齊明天皇の朝之れを撤廢するの餘儀なきに至つた、其間屢々唐軍と彼地に交戰し茲に我國は攻城戰を體驗するに至つたものである。

齊明の朝日本府を撤し郤いて戍る國策が樹立され、次いで天智の朝三韓を蓆捲した唐軍は何時我朝に攻略の鉾先を向けるやも計りがたき狀勢となつた、此時に當つて唐に逐はれた百齊の亡命者は踵を次いで我國に殺到したものである。その時之等の亡命者の技術を利用して、天智天皇の朝に於てい國防國家を建設するため、筑紫地方に大野、基肄、對島、金田、長門、屋島、高安等に朝鮮式築城法に據つたと思はれる石壘を應用した山城が始めて築かれた。之等邊防城塞構築の最中に於いて都は難波の海邊から志賀の奥地に遷されたものである。これ等前後の關係を綜合して考ふれば、當時國防計畫の實行に如何に急迫を來してゐたかゞよく判るであらう。しかし前記の諸城塞は國家の綜合的防備であつて中世乃至近世の武家同士の爭覇の具に供せられた城郭とは其精神に於いて根本的の相違があつた。

又一方對内的に於いては已に大化の改新に伴ひ諸制度改革の律令が發せられ、西南の地方は文化の程度も比較的高く皇澤に浴せる民草は郡縣制の實施を迎合するに吝でなかつたが、之に反して東北地方の廣汎なる地域に蟠居する蝦夷種族は中央の勢力に對して容易に服從しない狀態であつた。彼等蝦夷の種族は現代の「アイヌ」の祖先であり更に彼等よりも古く我國土に住んでゐた「コロボクウンクル」族に次いで居住し此國土は祖先以來我等の國土であると信じ、大和朝廷の威に服しなかつた。また彼等は大化以前には吾妻及越後の地方にまで南下居住し我皇室の恩惠を知らなかつた。嘗ての日本武尊の御東征も蝦夷の征服に御先鞭をつけられたものであらうと見られる。

されば大化の革新に依つて制定された郡縣制を我全版圖に普遍せしむる前提として先づ彼等を懷柔し之れを馴致し皇化に浴せしめなければならぬ此事業が當時の我國策として最も重大なる所謂長期建設に屬する大事業であつて、單なる武力を揮ふ劍戟戰では却つて窮鼠嚙猫の惡結果を招き最終の目的を達しがたい、故にこの蝦夷經略事業は屯田兵制を採り片手に弓矢、片手に鋤鍬を持ち、農耕漁撈を指導し安住樂土たらしむる建設的聖戰であつた。

しかし事業遂行に當つて時と機とに依り相方の先鋭部隊の衝突は免れられぬことでもあつた、光仁天皇の寶龜十一年按察使紀ノ廣純が覺鼈ノ城に入つた時元夷俘であつて當時上治郡の大領伊治ノ呰麻呂が叛して廣純を攻め彼を甫め多くの官人を弑虐し、勢ひに乘つて多賀ノ



4　邊防城塞分布圖

城にまで迫つたことがあつた。

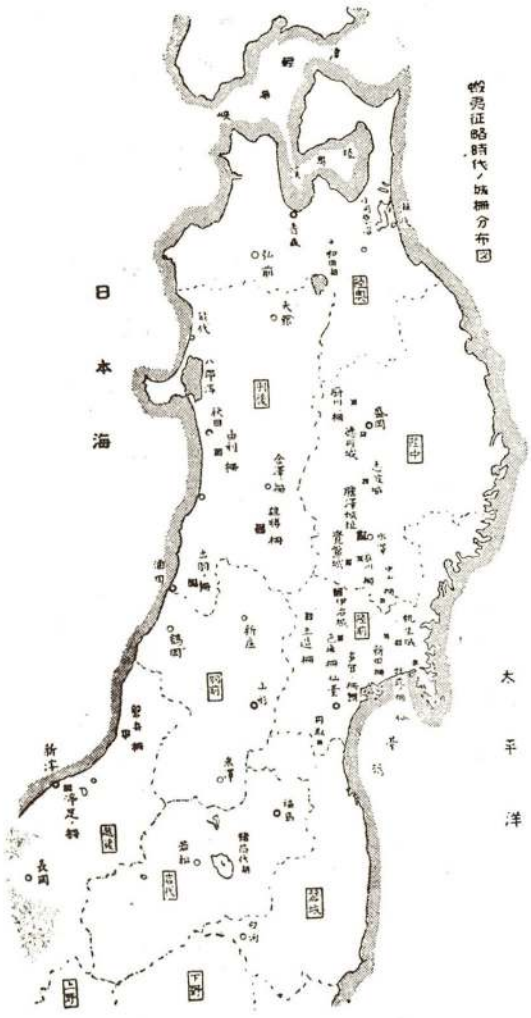
斯やうな事業遂行に伴つて起り勝ちな事變に備へる爲めに築かれた木柵を繞らした城が即ち柵である。柵は孝德天皇の大化三年越ノ國に渟足ノ柵が築かれた、それが蝦夷征略事業の最初のもので且つ我國築城の史實上の起原でもあり、それが又柵戸の濫觴である。

4 東北の柵

柵と云へば直ぐ前九年や後三年ノ役當時の衣川厨川、或は金澤ノ柵などを對照する人々が多いやうであるが、之等の諸柵は時代も降り單に地の要衝を利用した臨時の一種の砦に過ぎないもので寧樂朝時代の蝦夷經略事業に伴ふ柵戸に比べ頗る規模、構相の少なるものである。已に前述の如く大化の律令の定むる所に依つて國策遂行上東北の地方に蟠居する蝦夷族を懷柔し皇化に浴せしめると同時にこの人口稀薄な未開の地を開拓すべく一般住民の移住をも奬勵し、彼等を指導者として土民に進歩せる農耕の術を授け生活資源を豊かに與へ安寧秩序を保ち自づと所期の郡治の實現を企圖したものである。この事業遂行上の前營として築かれた半永久的の築城が即ち柵である。之等の構相は西南地方の邊防城寨たる石壘で築いた城堡に對して東北地方の柵は地場に豊富に惠まれた木材を以つて築いた臨時若しくは半永久的の木柵の邑城である。換言すれば柵とは木材を以つて築いた城郭である。

故に柵は一旦蝦夷の逆襲など事變が勃發した場合、近郊に散在して農耕に從事する住民を一時保護收容する防備を有する避難所でもある。これ等住民中には中央より移住せる良民もあれば、指導の地位と保護の任務を兼ぬる屯田兵もあり、或はまた內附せる歸順の熟蝦夷の正業に就いた者などを總轄するのである。

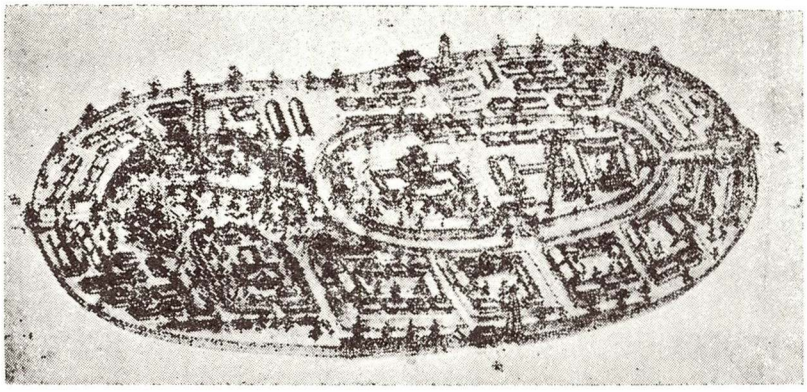
柵の構相は遺址に徴し殆んど外柵と內柵の二郭より成つたもので恰かも後代城郭の總曲輪と本丸又は二ノ丸に等しい。そして內柵は爲政者即ち軍人官吏の住居や高官の館、之に伴ふ官衙公署、兵營、厩舍、倉廩等を包括したる地域を限り、外柵は內柵を圍繞し非常時住民の避難場所にして相當廣濶なる面積を有してゐた、先年發掘された拂田



5 東北地方柵城分布圖

ノ柵の如きは私の推算では八十萬坪に達してゐるから外柵も五十萬坪を下らぬ面積を持つてゐるであらう。勿論柵內には避難中庶民の糧食や蔬菜を作る畑、日需品を供給する商賈もあつた、寺もあり鎭守の社も在つたこと立證してゐる。かくして避難の住民は夷敵が擊退され平穩となれば再び自己の常住に還つて農耕に從事したものであらう。

大化改新當時の蝦夷種族の蟠居してゐた區域は幾分狹められ、太平洋沿岸は阿武隈川沿岸の邊りまで、又日本海方面は越後の北部、只今の信濃川沿岸邊りまで朝廷の勢力に追ひ詰められてゐた。彼等蝦夷種族は現今の「アイヌ」族であり大體三



6 拂田の柵推定復原圖

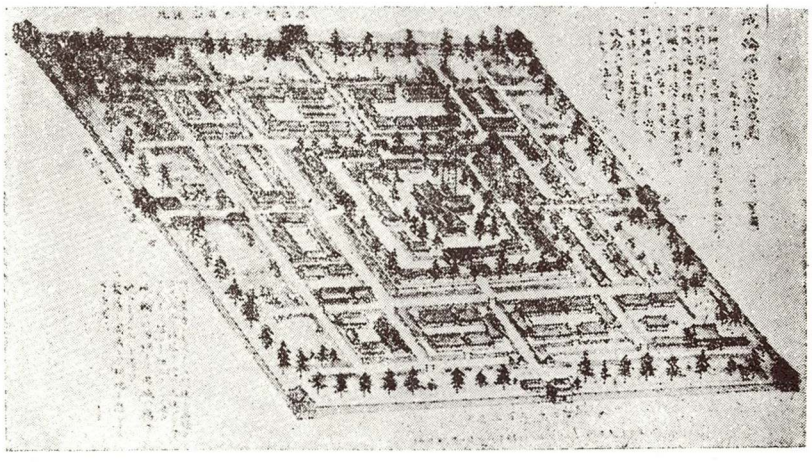
つの族に別れてゐた。(一)、都我留族、(二)、麁蝦夷、(三)熟蝦夷である。その內熟蝦夷のみが日本民族と同化し得る素質と性能を有つてゐた、他の二種族は容易に同化し得ないもの、例へば臺灣の熟蕃は同化の可能性に富んでゐたが生蕃は同化し難かつたのと同様である。結局同化し難き麁蝦夷が海を隔てた北海道に追はれたものであらう。

因に現今北海道に限られた「アイヌ」種族は僅かに二萬五千人で人間としての國寶とも見られ「コロボク」族の如く絶種しないこと私は希望する。

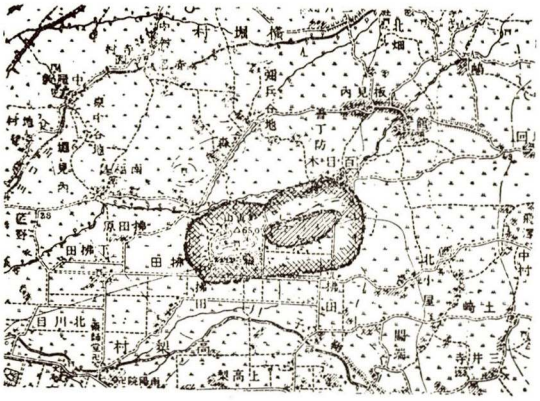
柵の建設は前述の如く我國策であつた、故に其規模の大であつた事は城ノ輪、拂田の兩遺址に依つて考察を下してもよく判る。大化三年越後國に渟足ノ柵が設けられたのを最初とし、其翌年同國に磐舟ノ柵が築かれた、また其北方に都岐沙羅ノ柵が建置されたことは何れも史に瞭かである。この三柵戶を足溜りとして阿倍ノ比羅夫は水軍を動かし出羽ノ國に進出し其處に出羽ノ柵を建置した最近發掘された城ノ輪の柵址はこれであらうと云はれてゐる。更に北進して今の羽後ノ國に由利ノ柵が設けられた。これが最近城ノ輪に次いで發掘された拂田ノ柵址がそれではないかと云はれてゐる。

一方太平洋沿岸事業は少し遲れ、多賀ノ柵は養老年間から神龜元年に建設され、東北地方經略事業遂行の中樞機關となり、次いで膽澤ノ城が設けられそこには最初の鎭守府將軍が駐つた。當時西海の都督府は藤原ノ廣嗣の亂後、天平十五年に廢止され鎭西府「ニシヲシズム」と改まり、同十七年再び復興されて太宰府となり東北の多賀ノ柵と相對して國家施政上地方代表機關の双壁であつた、しかし都督として官に任ぜられたるものを見ない。

日本海沿岸に對し太平洋沿岸に於ける蝦夷經略の「コース」は多賀を根據としその中心勢力は北へ進み新田、色麻、玉造、牡鹿、中山の諸柵が築かれ、更に前進して雄勝ノ柵が建置されこゝに日本海沿岸の諸柵と初めて連絡するに至つた。この兩方面の勢力は嵯峨天皇の弘仁年間に至つて秋田で合流したものである。かくして蝦夷征略の大事業は前後一百八十餘年の永き歲月を閱した。最後に陽成天皇の元慶二年秋田方面に追はれた蝦夷は最後の逆襲を企て秋田ノ城を燒討して兵器糧食を燒盜した、此時朝廷では藤原保則と小野春風等に



7 城の輪の柵推定復原圖



8　秋田縣仙北郡高梨村拂田ノ柵址

命じて之を征討せしめ直ちに鎭定した。之れが史上に於ける蝦夷の最後の叛逆である。

以上の如く大略して孝德天皇の大化三年越後國に渟足（ぬたり）ノ柵（き）が設けられてより元慶二年まで二百三十一ケ年の永い年月を雪深き東北邊陬の地に宜撫拓殖の事業遂行子々孫々相繼ぎ國家の重大任務を果した將兵の功績は實に千古不滅の勳業で全く長期建設の範を垂示されたものである。

斯く國家的に重大なる任務を果たした寧樂（なら）朝時代の諸柵が悉く廢墟となつた理由の主なるものを擧ぐれば、柵の建置場所が經略上、地形上の中心に撰ばれたものであつて、經濟上乃至人文上の中心をはづれてゐた關係であらうと考へられる。之れと比較して近世武家の城郭が經濟上の要衝を中心として經營され、廢藩置縣後に於いても其城下町が廢墟となることなく、地方產業上の中核となつて有數な地方的都市を形成して、現今尙ほ發展の道程を辿りつゝある狀勢とは霄壤の差がある。

（以下次號）



9 秋田縣仙北郡高梨村拂田の柵址（西邊柵列）



10 多賀の柵址

桃山江戸時代に於ける鯱鉾の遺構と特性に就いて

佐藤佐※

現在鯱鉾の代表とすべき多くのものは、天守閣の屋上や寺院等にのつてゐるので、之等を調査するのに困難を生ずる事と、も一つは文献が甚だ少ない事である。

從來鯱鉾に關する研究は、室町頃のものが天沼俊一博士に依つて發表されてゐる事と、古川重春氏の其の著日本城郭考の中に述べられてゐる。

今こゝには寺院に於けるものは省略し、城郭に於ける鯱鉾のみを述べ、特に桃山江戸時代に於ける遺構によつて其の特性を明かにして見たいのであるが、充分ではないのであるから、今後識者によつて一層充實したものを發表されん事を期待して止まぬ次第である。

1、日本建築に於ける鯱鉾の價値

桃山江戸時代にかけて大棟兩端に應用された鯱鉾の形は、他國では見られない日本特有の形態を表示してゐる。姿態は美しく特に力強い線で構成されてゐるので、建造物の一端として看過し得ないものである。

特に天守閣の出現と其の發達につれて、大棟の兩端には鯱鉾以外のものは採用されず、斷然一人舞臺を姿にして、全國の天守閣は勿論寺院等に迄其の姿を現はしたのである。中には黃金の延板を巻き付け、金色燦然たるものさへ生ずるに至つた

鯱鉾の最も發達した所謂黃金時代を形式したのは、桃山より江戸初期にかけてゞある。然るに德川幕府が天守閣建立を禁止してからは、漸次衰微し、時代の推移と相俟つて變化をきたし、遂には退歩の一途を辿る狀態に墜つて了つたのである。

昭和の御代二三の天守閣は復興された。從來建造物として國寶に指定されたものは、社寺建築のみであつたが、最近次ぎ々々と城郭をも指定されるに至つた事は、誠に喜ばしき事である。斯様に日本固有の城郭を保存する氣運に立ち至つてゐる時、其の表徴ともすべき鯱鉾に對して新たな認識を深める事は有意義であると思ふ。依つて其の大要を披瀝して見たいと思ふのである。

2、

鯱鉾は日本で發達した特有のものであるが、決して桃山時代になつて遽然に生じたものではないその元は印度から見直さねばならぬのであるが、日本建築の屋上大棟兩端に上げられたのが、室町末期ではなからうかと思ふのである。

鎌倉以降唐様の發達につれて建物の細部に彫刻が施された。室町になつて堂内の勾欄などに鯱鉾が彫刻された遺構等が見られるのであるが、それが漸次發達するにつれて鯱鉾はそろそろ外へ飛び出すやうになつたのである。

鯱鉾は鎌倉以前になると全く見當らない。飛鳥以降應用された鴟尾や鬼板が附加され、藤原時代には鳳凰等が稀にのせられたのであるが、之より溯ると其の起原は古く印度の建造物に於て鯱鉾と餘程類似したものが見られるのである。印度建築に於ては日本の如く大棟に上げたのではなく單なる裝飾紋様の中に見られる。

先年天沼博士が渡印せられ、印度を調査された時甲谷地博物館で撮影した紋様の中に、鯱鉾と似通つたものを、四天王寺第六卷第五號誌上に發表されてゐる。

此の圖を見ると魚相でもなければ獸でもない。一見鰐の様な形をしてゐるので爬蟲類に屬するものと見ねばならぬ。口を大きく開き頭と足の部に鰭の如きものを附け、胴體より尾が細く延びて鱗の如き線を示し、尾は渦巻いて紋様化してゐるのである。

降つて支那、朝鮮の建造物を見ると黃檗一派のものに之と類似したものが大棟兩端に上げられてゐるが、印度の鰐とは餘程かけ放れたものとなり尾は逆立して嗟吻となり、湯島聖堂には日本の工匠が支那的手法を案出して異様の正吻や虎形の旁吻を造つてゐる。

我が國に於ては初めて弘仁時代に於て佛寺建築

※天王寺師範學校教諭

に應用された蟠の紋様の中に印度様式の鰐に類似したものが見受けられる。高野山金剛峯寺にあるものが其の一例である。

其の後は何に應用されたか判明しないが、室町時代になつて佛寺建築の內部勾欄に應用されたものが、愛知定光寺本堂に其の遺構が見られる。

姿態は他國と異つて魚相であるが、完全な魚でなくして尾鰭はあるが、背、胸、鰓、腹鰭がない然るに大法寺鯱鉾になると、之等細部のものが具備されてゐるので、既に室町末期には確立されたものと見ねばならぬ。

當時天守閣も生じたのであるから鯱鉾を上げた天守閣は室町末期には生じたものであらう。織田信長の清州城三層天守(永祿三年)や松永彈正久の信貴山城三層天守(同四年)は建立されたので恐らく大寺鯱鉾のやうなものが上げられたのであらう

鯱鉾は單に天守閣や寺院のみではない。武士の用ゐた甲冑にも應用され、現在田中光顯子爵の所藏にかゝるものは、鯱形甲である。後には刀の目貫や鐔などにも之が見られる。

3、桃山江戸時代の鯱鉾

桃山時代になると諸大名の勢力發展し其の確立を見るに至つて築城術各所に行はれ天守屋上に上ぐるに鯱鉾を以てせられた。現在に於ても尙其の遺構を見る事が出來るのであるが、名古屋城金の鯱鉾は其の代表的のもので、他の桃山樣式を多分に加味してゐるものでは、木彫に銅張の丸岡城と松江城のもの、外に姫路城、岡山城、高知城の鯱も注意すべきものである。大阪城の土中から塗金瓦の鯱鉾が出土して現在城內に保存されてゐる。

外に大垣城天守と大阪城千貫櫓の鯱鉾は江戸初期のものであるが、前代を踏襲してゐるので稍見るべきものである。

然るに魚相が次第に變じて鬼瓦の形式が加はつて、耳や鼻、太い眉等が生じて、桃山風のものは影をひそめて了つたのである。而して江戸時代は單に城郭のみではない。廣く寺院にも應用されたので各所で之を見る事が出來る。

要するに鯱鉾は城郭建築特有のものであつて、城の威嚴も之に依つて發揮されるのであるが、之を寺院に應用しても何等意味をなさず、鴟尾と比して遙かに見劣りする感がある。

先年奈良喜光寺の鯱鉾も修補の際之を徹去して了つた。野中寺本堂のものも取つて鴟尾に變更すべく考慮されてゐる。

大阪四天王寺元山堂の鯱鉾は江戸初期に屬し稍形も整備されたものであるが、瓦師は古くより之を參考に資してゐるので、此の形式のものが、近畿地方に於て多く見る事が出來る。

4、桃山江戸時代に於ける鯱鉾の特性

茲に鯱鉾に關する形式、並に特性を擧げるとすれば、大成された桃山時代のものである。當時の彫刻界は一流の大建築に對しては隨所に彫刻が施されたので發達し、之に伴ふて瓦師も亦相當の力作を生み出してゐた。特に城堡建築は全國的に勃興した時であるから鯱鉾の製作も亦各所で行はれた樣である。當代中期以降は益々發達し、塗金瓦や金の延べ板を張り付けたものさへ生ずるに至つた。塗金瓦は大阪城や伏見城から出土してゐる所を見ると既に安土城から其の端を發したものであらうと思はれる。金の延べ板は、名古屋城天守閣に應用され、駿府城や江戸城にも使用されたやうである。

名古屋天守閣の鯱鉾は慶長19年に完成されたもので、後に修補されたとしても其の形式は、失はれず純然たる桃山時代の遺風を表示してゐる。

高さは8尺1寸5分で現在之れ以上の大きいものはない。江戸時代になつて新たに再興された江戸城や大阪城の天主閣は共に五層六重で、名古屋城よりも更に大なるものであつたから、鯱鉾も大きかつたと思はれる。但し桃山時代の天守閣は上層が少さく造られたので鯱鉾も大きくはなかつた。その實例は大阪城、高知城、姫路城等を見れば分るのである。

名古屋城の鯱鉾は頭部比較的大きく、胴體太く尾鰭は左右に分れ、力强い線で構成されてゐる。之が江戸時代になると、反對に頭部は少さく、胴體も細められ、尾鰭は力强い所なく、四天王寺元山堂鯱鉾の如く、先端が蕨の如く卷き込んだものさへ生ずるに至り、姿態の弱められたものとなつた

桃山時代の鯱鉾の顏面は魚相である所から、耳の附いてゐるものは勿論なく、背鰭、尾鰭の手法は比較的大きく力强い線で構成されてゐるが、江戸時代のものは退化して了つた。

蛇腹は胴體下半部にのみ附けてあつたのが、江戸時代は尾鰭の付け根迄全部施したので本當の蛇腹になつて了つた。和歌山城の鯱鉾は其の一例である。

胸鰭は餘り延びては居らぬ、蛇腹より外へはみ出したものは無かつたのであるが、後には漸次延びて來て蛇腹の外に突き出る様になり、鯱鉾の外郭線の一部を隠す事となるので、決してよい形でない。

亦腹鰭と尾鰭には付け根を持つてゐたのであるが、江戸時代には失はれて了つたので、誠に不自然な形をなしてゐる。之等の鰭を付ける位置に於ても胴體の正中線上に置かれたのが、後には斯かる事が無頓着になされたので、其の配置に於ても不自然である。

尾鰭は其の正中線より左右に分たれてゐるが、特に力強い線で表示され、各々先端が尖つてゐたのが後には丸味を帯びたり、蕨の如く巻き込んだりして全く力の失せたものが生じた。

此の左右に分れた鰭の數に於ても、左右等しき數か亦は後方が數多く前方が少ないのが定例とせられた。それは胴體が必ず前方に反りかへつてゐるのが定められた姿態であるから、全體の均衡を持たしむる爲には後方の數を多くする様取り扱はれてゐるのである。

それが若し逆に前方の數を多くしたならば前のめりとなりて如何にも倒れそうな不安定の感を懐かしめるのであつて、後には斯様な考慮も無視されて勝手な拙いものが生じた。

斯様に從來の鯱鉾に對し機會ある毎に之を仔細に檢討する時餘り感心する程のものが見當らぬ。日本特有の鯱鉾が漸次退化してゐるのを思ふと、如何しても之に研究を重ねて立派なものを作り出さねばならぬと思ふ。

今後製作に當つては古代作品の優れた點を取り入れて之等を凌駕するやうな優秀作品の出現を期待して止まぬ次第である。

尚天守閣に於ける鯱鉾の内、特に著名のものに就き其の要項を記しておく。

1、丸岡城天守閣鯱鉾
　材料は木彫に青銅張　桃山風
2、松江城　同
　木彫に青銅張　桃山風　呵吽て陰陽を表象してゐる、高さ6尺
3、松本城　同
　耳無し　桃山風　瓦製
4、名古屋城　同
　木彫を鉛で包み、更に銅の打出しで包み、金の延べ板と金鱗を張る。桃山風 高さ8尺1寸5分　但雄鯱は高7尺7寸5分と云ふ
5、大阪城　同
　塗金瓦製破片出土　桃山風
　昭和再建のものは青銅製塗金　高さ7尺3寸
6、大垣城　同
　瓦製　江戸初期の形式を持つ
7、高知城　同
　瓦製　桃山を加味す　高さ7尺3寸
8、和歌山城　同
　江戸風　耳有り、青銅製　胴體太く　鱗各鰭等の形式古し
9、明石城　同（天守閣現在無し）
　瓦製　江戸様式なれど古式をも加味す
10、姫路城　同
　瓦製　桃山風　姿態優秀である。
11、江戸城　同
　金　今無し
12、安土城　同
　金？　今無し
13、伏見城　同
　金城閣と稱し、塗金瓦出土せる所を見ると金鯱鉾を上げたであらう。
14、駿府城　同
　金　今無し
15、上野城　同
　昭和再建　桃山様式ではない。



洋家具の話　（第一）

平尾敏也

（イ）

洋家具のお話を致しませう。

大きい地球は、自然の寢床でもあり椅子でもありテーブルでもあります。然し人類が創生して最初の激しい要求は、雨や風の避難場所であつたと思ひます。

然し原始時代は現代の「美」と云ふ感念から、およそ遠いものであつた事は想像できますが、それでも人類の最初の技巧は岩とか石に「線」を畫く事であつたのです。「線」は二本の線、卽ち平行線に進化し、バランスの取れた曲線になり、曲線から模樣になり、模樣が相互位置の變化したものになり、更に進んで原始人の頭の中に感じた物像を繪にした事でありませう。（第一圖）

それを立體化して食事用の皿とか壺に作り生活の爲の矢となり弓となり、遂にカヌー（舟）まで進化した事でせう。

そして勿論穴居から草木に住み遂に住居を建てる樣になつた事は想像出來ます。

この永い永い人類の進化の歷史から現代まで人類に愛され必要とされたものは「材木」でありました。

（色々の考古學的考證で所謂石器時代でも材木が、原始人に愛用された事は原始人的作品の遺物として或は土中に、或は廢跡の中に見出せます。

然しこの時代には系統的、民族的な特性のものを求められない事は已むを得なかつたので、結局洋家具の歷史は、六千年前のエヂプトの文明からお話を初めなければならない事になります。

（ロ）

悠久六千年、ナイル河沿岸から發生したエヂプト文化は、そのスフインクス、ピラミツドにも示される樣に、洋家具も、上流階級の使用した家具と思はるものは威嚴のある堂々たるものである事は今英國博物館にあるエヂプト女王 "HATSHEPSU" を見ても判る。これは最古の家具として私共の目前に見られるのも、フエラオーの國エヂプトの氣候が干燥してゐたので、女性の「かつら」まで僅な破損程度で殘されてゐる事や靈魂の不滅を信じ、その死骸と共に埋められた爲に地上の風雨にさらされずに殘されて、椅子、スツール、長椅子を當時使用された儘私共に深い感激と驚異を與へて居ります。

豹の皮や、他の獸皮をなめした皮張りの太い糸でぬつた椅子を初め花臺テーブル、キヤビネツト等、或は織物、マツトレス等、現代作品の如く或はそれ以上の「美」を私共に敎へてくれます。

當時すでに彫刻、曲木、塗裝、象嵌、ベニヤ張り等が製作出來て黑檀象牙、ひまらや杉、アカシヤ、大楓樹などを使用して金、銀、貴重な寶石を飾りつけ、華麗、纖細なもので椅子の脚などにライオンの足や牛の蹄等を形取つた彫刻など彫りつけた美事なものであります。

クリート島を中心に殷盛を極めた工藝品も埃及第一王朝時代から第四王朝に至るまでは奴隸の作品らしいのです。

唯、奴隸も近代アメリカのニグロの樣な陰慘なものでないだけに、その生活も思想も比較的建全であつた爲か、作品も建全なものと思はれます。

例へばミイラの棺などは主として肉喰石（サーコーフエア）SARCOPHAGI と云ふ石で作られました。

なぜ肉食石と云ふかと死體をその石の棺に入れて置くと、その石が數週間で、死骸を喰べて了ふと云ふ傳說があるからです。

主にこの肉食石で棺を作りましたが、木製の棺がありました。

石棺は勿論木棺でも內部も外部も模樣や人像や蓮の花、又は象形文字 HIEROGLYPH など書き、赤、黃黑、褐、綠、青など彩色してあります。

赤赭色は色黑い男性を、黃赭色は色美しき異國の女性を表示致したりしてあります。

或は死體の側に小さい彫刻人形で木製の奴隸 USHABITIU が埋葬されてあるのは當時の信仰で、死んだ人の末來の幸福な生活の爲にその奴



A → B → C



隷が助ける爲だそうで、我國にも似た事がありましたので、古代に共通した宗教的感念があつた様です。

又面白いのは……私のお話は木製のものゝ歴史ですから、金屬や石や土だともつと面白いものがあるのですが……彩色された機械的なおもちやで、口の動く鰐や、糸の頭髪をつけた人形などを見る事が出來て、大變嚴格であつた。エヂプト人の家庭にも打くつろいだ時があつた事を察する事が出來ます。（第二圖）

バビロンとアツシリアの木工の歴史は、どうも氣候の關係や信仰の違ひで判然と致しませんが、共通點があつた様です。

紀元前二千五百年、バビロンの王 Gudea の像には王が椅子に坐り、木製の様に思はれるのはバビロンの工人が木製の工藝に秀でてゐた事實と、その椅子の脚の下部の彫刻が、ライオンの足又は牛の蹄或ひは松果の逆倒になつた彫刻のある四角脚等の事實からブロンズ製ではないと思はれます。

後期アツシリア人の工藝は前期の物とくらべて巨大になつた様に感じられます。

發見された岩石の彫刻でアツシリア王及女王の酒宴を表現したものを見ますと、女王は大層高い椅子に腰をかけられてゐるので、足にスツールを使用されてゐます。王は長椅子に横になり、背に手休めがあり、その横にある家具は四角で……松果の逆倒の彫刻のある……或は奴隷やライオンの彫刻等ある高い卓子の上には食物が置かれ、王の側の小さい低い卓子の上には弓、箙筒劍など置かれてあるのを見る事が出來ます。（第三圖）

これ等の家具は當時黑檀もチークも、くるみも輸入され、象牙や金屬の象嵌されたものがありますが、ひまらや杉で出來てゐる様に思はれます。

楔狀文字が土瓦の上に發見されたりして、當時の文化の進行をうかゞふ事が出來ますが、住宅又は宮殿の建築の材料が主として天然に乾した粘土を使用した關係上、書籍、備忘錄手紙等もこの粘土を利用した事は紙も羊皮紙もなかつた當時の文化を現代で考證する事は不可能に近い事だと考へられます。

この様に古代エヂプト、バビロンアツシリアの木工の歴史は永遠の謎を秘そめながらも薄い霧を透しても光を見出し初めた事實を私共に教へて居ります。

神秘な古代木工……殊に家具に關するお話は餘りに幻想的であり、考古學的であるので、さぞお聞きつらかつたと存じますが、家具としての形と特性の發生を說明申上げなければ、順序としてどうしても必要でありました爲に、つまらないとは存じ乍らも「家具史の目覺め」を御話致した次第でございます。

次にローマ、ギリシヤの家具のお話を致しませう。



古代アツシリアの長椅子と椅子

彫　刻　石　板

庭園に於ける王と女王の宴

御　願　ひ

左記會員の現住所御承知の方は乍御手數事務所まで御知らせ願ひます。

會　員	井侯五一君	同	宮内義男君
地　方	江島正則君	同	酒井喜一君
同	杉野　啓君	同	宮林　勝君
普　賛	川床秀吉君	同	長井義雄君
同	吉林善好君		

八幡宮圓福寺松花堂見學隨行記

時　昭和十六年五月十八日午前十時三十分石清水八幡宮集合

1.石清水八幡宮別に男山八幡宮とも稱し清和天皇貞觀二年大安寺の僧行敎武内宿禰の後裔の奏請により宇佐八幡の神を勸請せしに創る、現に官幣大社にして祭神は八幡大神（應仁天皇）大帶姫尊（神宮皇后）比賣神神の三座である。（攝社末社多し）現在の社殿は、寛永二年家光造營、元祿年中綱吉修理、構造は、所謂八幡造内外二宇の神殿に分る。大鏡金の雨樋は有名である。本殿の外舞殿幣殿、樓門、廻廊等、特別建造物である。古來主上の行幸、上皇女院の御幸、參籠將軍社參等しばしば行はれ、平安朝中期後清和源氏の氏神と考へられ、夫より武門の守護神武運長久の神として、信仰篤し、宮寺として神職社僧の奉仕嚴重とあり。

頃は新緑夜來の雨も霽れ渡り而も日曜日絶好の見學日和なりしが、折悪しく當日は淀競馬場開場中にて、乘客混雜し、集合の定刻を遲れる事凡一時間にして漸く顔が揃つた。但し早くから來合せた人々は參加者黒澤研氏の紹介で八幡宮禰宜某に昵近者ありて内陣及新裝成れる上つ方御使用の平素にては容易に入り難き室など案内され、拜觀出來たのはもつけの幸で、何が仕合せとなるやらと一同滿悦の限りであつた。十一時過やつと參加者も揃つた樣で、幹事の案内で八幡宮の裏路を下つて、第二の行程たる圓福寺に向つた。昨日の雨で路も歩き加減で、途中此附近名物の筍畑竹林の道傍や田園の風光眺めつ、又青年團員がやつたのか、新らしく延び々々して居る若竹を、めつた切りにしてある無慙な殘骸を見心なき人々の事共をなぢりつゝ、行程十八丁の道も遠からず、いつしか寺門に着いた。

2.圓福寺

雄德山圓福寺は、禪家の江湖道場として名高き寺なるが、重なる建造物は、天明二年頃より寛政中年頃迄に輪奐の美を極めたと言ふ。山門（十六羅漢と南天棒老師木像安置、本堂釋迦、文殊、普賢、大燈國師等の木像安置）庫裡、禪堂、達磨堂、伏虎窟、高松宮御下賜御殿臥龍庵如神殿陰祭等ありて今尚其の偉風を偲ぶに足る。

先着の幹事連に導かれて、玄關より奥の部屋に向ふべく廊下傳ひに階段を上り、設けの席につき稍疲勞の身體を憩ふ、四方の話に一服する内禪僧の案内にて食堂に入り、用意の食卓に着く、名にし負ふ此處禪僧修養道場の事とて膳部に着くのも物珍らしく、食器及配食並に食事より最後の納め迄、誠に修養なる事多く空腹に純綿の白米食に舌鼓を打ち、豆腐汁、他二菜で馳走はなかつたが、精進料理殊の外珍らしく、賞味滿服したのは嬉しき限りであつた。

但し最後の湯茶ですべてを洗ひ、全部呑み干し、行儀よくすべての食器を返す段は、平素の食物等粗末に取扱つた我々には得難き體驗と時局柄、此宗が昔からなし來つて居る日常を感深くした。小憩後一同寺僧に導かれて、方丈に入り數名の僧の敎へに從ひお經を唱和し、戰歿皇軍將士の英靈に些か施餓鬼を營みしは、日常すさんだ我々には、又少からず精神の燈を得た。夫より高松宮御下賜の御殿、寶物庫、臥龍庵を拜觀し新緑滴る庭園に入り一望さへ切る物だになき松林を透して、遙かに生駒連峯の眺望は庭の樹々と共に佳絶なり。同寺の案内記に附近一帶を錄谷溪と言ひ、攝、河、和、三洲を一望し、絶佳の仙境で月雪華共賞讃多しとあるも蓋しむべなるかなと感歎す。次に國寶達磨大師像安置を拜し禪堂に入る。此處は全寺の僧が所謂すべてを解脫する修養道場にして、一疊の天地に、かしわ蒲團一枚の夜具を以て點灯一個の照明で火氣一つなく、朝夕膳を練りつゝある所なり、然も此處に入山するには庭詰と稱して其頑心と根氣を試むるため、三日間玄關で低身し、更に且過詰と稱して五日間壁面に座したるの後、初めて修養を許される。

吾々俗人は聞いた丈でも大底降參仕る思ひ合して感慨深きものがあつた。其れより玄關にて絵はがき等購ひ、次の行程を急ぐ爲、おしくも他を割愛し二時過寺を辭す。境内を出て、直ぐ右手に歷史に名高き洞ケ峠あり所謂秀吉が天王山に、義戰中筒井順慶が日和見して一世に嘲罵を殘せし所なるが、現今は何等の眺望も又見るべきものも無く、只記念碑あるのみ、一行は匆々にして松花堂に急ぐ。

3.松花堂

學僧にして書畫家として一世に名を殘した松花堂昭乘が、八幡宮下の溪合瀧本紡を弟子乘淳に讓り、附近に草庵を結び、閑居し松花堂と號せし所にて、維新當時現在の地に其の大部分を移行されたが此れなり、松花堂は八幡町と圓福寺の中間に位し諺に知られる女郎花塚等あり、門前の石棺など古墳の地にあり、元瀧本坊にありしが、維新當時、八幡宮の境域が判然となるに及んで、坊の撤去に遭ひしも當時の戸長たりし現住西村氏先代が特に讓り受けて、此地に移せしものなり、即ち現在の玄關入口、門、書院、茶室等尤も其遺構中顯著なるものなり、室内の調度品襖、畫、建築の構造等見るべきもの多く亦苔むす庭内に在る茶室は、特に一風變つた胎乘遺愛の建築にして珍重の飛石庭樹と共に賞すべきもの多く、當時松花堂が彼の丈山、羅山探幽等と交遊せしを偲ぶに充分なり

主人に案内され一巡後白書院にて喫茶の後、幹事側より解散の挨拶あり、一同三々五々歸途につく、時に四時近來稀に見る收穫多き見學なりき。因に本日の參加者を記し筆を擱く。

倶樂部室主催和歌山方面見學記

昭和十六年五月二十四日の土曜日を期し、今春のクラブ室大會として和歌山城紀三井寺方面見學と新和歌浦望海樓で懇親晩餐會が催される、案内を得て自分は近くに居て、未だ訪ねざる處とて早速申込み、當日集合時、午後一時に南海難波驛にかけつけた。

定刻黒潮列車に乗り込んで、幹事諸君は滿員の中に立往生で、氣の毒であつたが、自分は座席を占め晩春の南海沿線窓外の變轉極りなき眺望を欲し快速の裡に終點に着き、一行は直に和歌山城に向つた。

1.和歌山城

今は公園となつて居る此の城は伏虎山竹垣城と稱し、天正十三年秀吉紀泉を平げ秀長に命じて築城す、爾來曲せつあり、秀長の後、桑山重晴を經て淺野幸長此の地に封ぜられ大いに面目を改め、後二十年大納言頼宣目覺しき發展をさせたが元和五年八月德川頼定此地に封ぜられ擴張す明暦元年と文化十年の兩度大奥共、燒失弘化三年落雷殆んど燒失、當時天守の再建許されざるも、特に翌年山中筑後守用係となり、嘉永二年上棟三年六月朔日竣切、即ち現今の天守閣之也（今を去る九十年前城郭は陸軍省の管轄する所なりしが、明治初年毀却、十八年には二の丸御殿大阪に移され、現今の紀州御殿これなり。三十四年和歌山公園とせしが大正二年、市に拂下市立公園として開放）

總地積　六萬二千百六十五坪
内壕面積　一萬一千四百四十五坪
天守閣建延週廻　四百四十六坪

城は市の中央に位し、丘に依つて築かれ、天守閣に登れば、紀ノ川東より北に廻り流れて、南は岡山に連り紀泉の海を隔てゝ遠く阿淡の山々を望み全市亦一望誠に快哉、お城を下り、茶店で一同小憩後、第二コース紀三井寺に乘車した。

紀三井寺　海南郡紀三井寺村
（紀三井山は楊柳、水清、淨水吉祥水、三つの井に依り號す）

名草山中服に位し、海上の眺望、特によし、金剛法院護國院と號し、寶龜元年唐僧爲光の開基と傳へ眞言宗本堂十一面觀世音安置され、國寶だ、本堂の外山門塔あり、繪馬堂より和歌浦雜賀崎友ケ島から淡路島迄遠く見る事が出來、すぐ下の人家、寺院、門前町の通は典型で一入風情を添へてゐる。

尚當寺は西國二番の札所として名高い。即ち

ふる里をはるばる此處に紀三井寺
花の都も近くなるらん。

の御詠歌をくちずさんだ。

門前より再び乘車五分にして後戻りして下車。

今は昔の枯れた玉津島神社に詣ず此の社は古來歌の神としてまた淨瑠璃の文句で名高い處だ。柄にもなく歌にあやかる樣に、なにがしを寄進して拜す。車津島と呼ぶは紀の川の潟中に存在せし孤島が陸に接續した爲であろうか。次にすぐ近くの鹽竈神社に詣でる。路傍にひさぐ海女共の貝類をひやかし購ひ、權現神社に來る迄に蒲鉾其の他大ぶん土産物もつ人も增して來た

權現神社ではさすがに若干の疲勞を覺へた、老人組は社頭茶店に土産物を置き、サイダーやユデ玉子等田舍の店を騒がせた

程なく最後の懇親會場望海樓に五時一同顔を揃へた。

望海樓は、新和歌浦第一の旅館にして、曲折多い海岸の山脚にあり、急に海に迫つて誠に風景佳絶の地を占め、名物の片男波も手にとる如く亦海上點々の島は、呼べば答へん風情あり、景勝を眼一杯慾にした。折柄商工大臣も來宿中だつたが、我々は階下、百五十餘疊敷の大廣間に陣取り、和歌山美妓の斡旋の下に配膳され、三浦幹事長御挨拶の下に、時局柄、自肅の懇親晩餐會が開かれ、いとも和やかなクラブ室の催らしい快い一時を過し、八時靄々裡に本日の見學の幕を閉ぢ解散歸途に就いた。半日の見學としては誠によき收穫であつた事を幹事諸賢に感謝して此の稿を終る。當日の參加者下の如し。

倶樂部室大會出席者氏名

池田　實	市川　正三郎
岡村忠一	河津　喜之助
桑原一雄	七條　記曾一
島岡義太郎	杉山彌一
住野一義	高木太作
中野吉彌	中村國雄
原田千歳	星　廣文
松下譽一	宮後光三
吉川　平	高坂信次郎
佐村木　實	高松平太郎
野中駒市	三浦　茂
藪中一良	大和書記長
戸川書記	以上二十五名



會報

常務會（第10回）

時　5月23日午後6時—8時30分
所　陳列場
出席者　理事　今林副會長
　常務　玉置主記、中西主記藪中主記、松久保主計、大下編輯、小林編輯

議事
1. 建築學會より用材規格建議に關し依頼の件
2. 常務一名辭任申出並補缺に關する件
3. 新京工業大學より建築と社會寄贈方依頼の件
4. 六月例會に關する件
5. 記念事業準備委員會委員人選の件
6. 會員詮衡

報告
1. 朝日ビル倶樂部解消の件
2. 四月分會計報告
3. 出征會員より音信の件
4. 入營、應徵、除隊報告

常務會（第11回）

時　6月2日午後6時－8時
所　陳列場
出席者　理事　今林副會長
　常務　池田主記、玉置主記藪中主記、桐本主計芝田主計、松久保主計、大下編輯、岡田編輯、小林編輯

議事
1. 用材規格問題に關する建築學會宛回答の件
2. 五月例會講師謝禮の件
3. 住宅營團より會誌寄贈方依頼の件
4. 應徵協會員の會費に關する件
5. 囑託辭職願出の件
6. 編輯係雇採用の件
7. 上半期職員昇給並賞與の件
8. 會員詮衡

報告
1. 防空建築講演會終了報告
2. 倶樂部室春季大會終了報告
3. 第三回建築聯合協議委員會經過報告
4. 全日本科學技術團體聯合會より聲明書發表報告
5. 應徵除隊報告

都市武裝促進幹事會（第3回）

時　6月4日午後6時—8時
所　陳列場
出席者　幹事長　池田
　幹事　大野、奥島、吉田的場、谷

1. 主要都市に於ける防空講演會開催の件

陳列場幹事會（第8回）

時　6月10日午後6時30分—8時30分
所　陳列場
出席者　幹事長　池田
　常任幹事　矢田
　幹事　小林、中西、野中、松久保、道田、若山

1. 材料集成原稿整理の件
1. 陳列場次回催物に關する件

材料委員會（第11回）

時　5月22日午後6時40分—9時20分
所　倶樂部室
出席者　委員長　松久保
　幹事　榊
　委員　後川、薗部、前野道田

1. 建築學會案木材寸法規格に關し檢討
2. 農林省桑田私案品等規格に關し檢討

材料委員會（第12回）

時　6月12日午後6時50分—9時30分
所　陳列場
出席者　委員長　松久保
　委員　後川、薗部、前野道田、矢代

1. 木材品等規格中板類に關する檢討の件

五月例會（映畫會）

時　5月16日午後6時—8時30分
所　大林組講堂
出席者　約100名

1. 午後6時日本庭園協會と共同主催の下に歐米に於ける建築、橋梁、庭園等の原色映畫會を下記の通り開催、約100名の出席會員に多大の感銘を與へ、午後8時30分盛會裡に終了解散す

1. 開會の辭
　日本庭園協會會長
　男爵　園　伊能
1. 映畫說明
　撮影並編輯製作者
　下山重丸
1. 閉會の辭
　日本建築協會副會長
　今林彦太郎

防空建築施設に關する講演會

時　5月20.21兩日午後6時－9時
所　大林組講堂
出席者　20日　約550名
　21日　約450名

1. 建築學會と共同主催の下に標記講演會を下記順序により開催、兩會會員並に軍、官、工場關係者等滿員の聽講者に多大の感銘を與へ兩日共最終に映畫を上映盛會裡に有意義なる本講演會を終了閉會す

5月20日

1.開會の辭
日本建築協會副會長
井上新二
1.工場防空要綱
1.工場の建築一般計畫
1.工場の防火防毒消防待避
1.油槽の防護處置
內務省技師
新海悟郎
1.工場內變電設備法、自家用發電所、配電盤の防護法
1.工場の燈火管制一般方針
內務省防空研究所技師
小宮賢一
1.映畫
空襲下の列强
ロンドン爆撃
工場鑛山の防空

5月21日
1.僞裝
東京帝國大學助教授
星野昌一
1.自家用簡易防空壕及待避所の築造要領
1.都市小學校の防空施設と其の利用法
1.既存多層建築物の防護室
東京市防衛局施設課長
阿部知義
1.閉會の辭
日本建築協會副會長
今林彦太郎
1.映畫
防空の歌
防空消防
海軍空襲部隊

見學會（會勢幹事會主催）

日時　5月18日午前10時30分—午後4時
集合所　男山八幡宮
見學　同宮社務所、圓福寺、松花堂等
出席者　岩佐信也氏外19名
1.朝來曇天なりしも次第に快晴に向ひ絶好の見學日和となりたるも、當日淀競馬場の開場日なりしため交通難甚しく集合時間までの參會者少なく、午前11時漸く10餘名となる
1.參加者黑澤氏の斡旋により社務所の新築を見學することになり、八幡宮神官の案內により貴賓室其他の建築物を30分間に亘り見學一同感銘す、午前11時30分頃同所を辭し會するもの18名徒歩にて一路圓福寺に向ふ
1.午後12時30分頃圓福寺着先着の大下幹事大和書記長と落合ひ休憩室にて暫時歡談の後精神料理の中食馳走を受く
1.食後方丈に於て寺僧の唱導により一同御經を唱和し、支那事變英靈に施餓鬼の上必身佛智に恥ること暫時
1.次で高松宮御下賜の御殿、寶物殿庭園、達磨大師木像、修養道場等順次拜觀見學後同寺を辭し門前數丁の處にある有名なる洞ケ峠を遠望して第二の見學先たる松花堂に至る
1.午後3時松花堂主人西村氏の說明案內により茶室、庭園等隈なく見學、一同の稗益頗る多し
1.午後4時本日の行程を無事終了、一同隨意解散す、往復二里に達する徒歩にも不拘何等の不平もなく亦と得難き見學なりしとの賛辭を得たことは欣快である

俱樂部室春季大會

日時　5月24日午後12時30分—7時30分
集合所　南海電車難波驛
出席者　池田實氏外25名
1.午後1時南海難波驛發特急にて一路和歌山に向ひ、午後2時和歌山着、直ちに廻遊電車にて公園前下車、和歌山城に入る
1.和歌山城天主より市街展望眺望絶佳伸び行く和歌山市の姿に一入認識を深めつゝ次で諸陳列品を觀覽の上同城を下り再び電車にて紀三井寺に向ふ
1.午後3時過ぎ紀三井寺に參詣皇軍の武運長久を祈願の上繪の如き和歌浦一帶を眺望して下山
1.再び電車にて和歌浦下車玉津島神社、鹽竈神社、東照宮等を徒歩にて順次參拜祈願の上午後5時晩餐會場新和歌浦望海樓に安着、一同廣間に於て風光絶佳の海岸一帶を眺めつゝ休憩歡談に、圍碁に、將棋に或は入浴等思ひ思ひに半日の疲勞を醫す
1.午後6時一同着席、開宴三浦幹事長より挨拶あり、之に對して參加者を代表して原田千歲氏より謝辭あり、和歌山より出張の美人酒燗を斡旋各自歡を盡して午後7時30分閉會隨意解散す
1.本日は朝來曇天にして一時は降雨を見るかとも思はれ、天候氣遣ひたるも幸にそのことなく無事豫定の行程を終へたるも晩餐會場に於て突發事故發生參加者各位に御迷惑かけたることを陳謝す

會員動靜

入會

會員

坂本　秀雄君　東區大手通1の26(松村組)
江尻　升彥君　神戸市林田區蓮宮通4の17內田裕彥方(兵庫縣警察部建築課)
澤井　孝君　吹田市 1316 (建築設計業)
鈴木　晴弋君　堺市南向陽町1の39(大倉土木株式會社)
千原大五郎君　京都市東山區祇園宮本町537武內幸二方(竹中工務店設計部)
長澤　武君　住吉區田邊東之町8の39(兵庫縣警察部建築課)

地方會員

碓井　憲一君　東京市本所區緣町2

の14（內務省防空研究所）

黑川　京一君　北支派遣甘粕部隊本部氣付近藤部隊

西村　正春君　鞍山市公署工務處都邑計畫科（同科）

特別賛助員

赤松　正彬君　南區日本橋3の26（石炭鑛石採掘販賣）

家生健五郎君　池田市室町10番丁（建築用窓紐ロープ各種）

大江　種男君　兵庫縣武庫郡魚崎町横屋字宮本532の2（朝日ビル內品川白練瓦株式會社）

洲川　愛造君　兵庫縣武庫郡鳴尾村鳴尾字田代16（朝日ビル內品川白練瓦株式會社）

田代　一君　北區堂島中2の39の6（株式會社朝日ビルヂング）

鳥羽　重二君　芦屋市西新田477の4（株式會社朝日ビルヂング）

福永　輝雄君　神戸市外垂水町西垂水高丸（小林謙三建築事務所）

湯淺　慶三君　西區北堀江御池通 2 丁目（日產興業株式會社）

荒木　重義君　泉北郡濱寺町船尾696（專門大店）

山口　陽靑君　布施市北蛇草131（日滿工業新聞社）

普通賛助員

上田　登造君　住吉區住吉町195

植場　久富君　府下三島郡高槻町大字高槻202

武山　行男君　大正區北恩賀島町46

南　楠博君　西宮市千歲町34

山川　忠男君　港區三條通 3 の37

退　會

會　員

肥塚　脫君　谷　幸三郎君　岡崎半兵衛君　高橋　市藏君　中村　重好君

地方會員

久保田秀稔君　仲田　孝雄君

特別賛助員

上林　傳一君　今岡周之助君　平島曠君

普通賛助員

今井　喜一君　井上　政光君

轉居・轉勤

會　員

三好喜三郎君　東京市世田ケ谷區烏山町759

富永　龜雄君　海南市日方町芦原1010保田政吉方

牧野　忠君　豊能郡岡町櫻通 2 番地

高源　定一君　神戸市葺合區琴緒町2の23番屋敷の2

靑山　正義君　東京市澁谷區幡ケ谷本町 3 の 377 高須方（住宅營團東京支所建設部工務第 2 課）

石田　定夫君　南河內郡大伴村大字坂持 467 石田利之方

大內　茂君　神戸市須磨區松風町4の54

京極　行雄君　住吉區萬代西 4 の61

瀨川　久維君　東舞鶴市字餘部下 4 の111木村組出張所

藤本　誠君　奉天市大和區加茂町16號滿州大林組

建部幸一郎君　岡山縣御津郡町石村字宿小字三軒家清水組作業所內

廣瀨　初夫君　吹田市外千里山住宅地下新田 3 番地

瀧口　芳雄君　東京市荒川區三河島町7の708日本建鐵工業株式會社

坂本竹三郎君　名古屋市中區廣小路通 6 丁目大林組名古屋支店氣付

池野　逸郎君　廣島縣佐伯郡大竹町6 區田淵別莊裏

小笠原善清君　住吉區濱口町433の1住吉郭園內

北川　憲君　吳市吳海軍建築部建築設計係內

八壁　健夫君　西淀川區海老江上 3 の 5

富永　龜雄君　海南市名高 390 番地

鈴木文治郎君　岡山縣倉敷市濱茶ノ屋神崎組倉敷出張所

笠野　藤吉君　京都府東舞鶴市舞鶴海軍建築部溝尻東宿舍6の506號

和久　獻二君　佐世保市俵町海軍建築部第一職員宿舍

八尾　良藏君　東京市京橋區京橋 2 丁目2の4須原屋ビル木村組出張所

中井　孝夫君　和歌山縣有田郡八幡村清水

黑明　澄夫君　旭區今福南1の120

平田　正男君　姬路市白國東洋紡增位社宅

政岡　基次君　佐世保市袋町佐世保海軍建築部第一職員宿舍內

松尾　博元君　大阪城內中部軍司令部經理部工務課第三建築班（勤務先）

地方會員

杉本　正一君　天津日本租界花園街 8 株式會社清水組天津出張所內

後藤　勝男君　奈良縣生駒郡南生駒村字乙田

大隅　貞喜君　下關市貴船町 793

吉原愼一郎君　北京市西交民交31華北交通株式會社北京鐵路局工務處建築科

佐々木義夫君　東京府北多摩郡三鷹町下連雀 194

村山　自助君　札幌市外月寒陸軍官舍第 2 區65號

富松　政行君　滿洲國興安北省公署開拓廳建設科建築股

永澤　龍雄君　東京市麹町３番地丸ノ内２の12（日立製作所地所部）
石原　靖介君　東區今橋４番地三菱信託ビル東畑建築事務所内
富岡　　工君　北支第120野戰局氣付土橋部隊經理部除州出張所
四宮安太郎君　北京西安門大街46號
瀨川　廉平君　錦州滿洲第602部隊
加田　安彦君　東區餌差町42番地
南出　信雄君　東京府立川市臺町２ノ35
谷口　正一君　山口縣伊佐町下村國弘方
吉見　英治君　北支派遣土橋部隊本部
伊藤　　朔君　神戸市須磨區若宮町１の89
村上　清一君　尼崎市常光寺竹ノ花106番地

特別賛助員

横田　兵仙君　勤務先大阪日新工業社
大西　幸七君　東區北濱２丁目双葉商會内（共榮商會）
村谷　　定君　大分縣北海部郡川添村大字宮河内4096番地

普通賛助員

鈴木秀次郎君　東京市日本橋區本町３の４　藤江商店方
清家　政晴君　德島市榮町清家伊助方
二宮　　讓君　北區東野田町５の75永山健益方
酒井　　勤君　南河内郡埴生村大字埴生野葛井寺前13の２
西野　春夫君　住吉區山坂町3の129
田中　信夫君　泉北郡大津町下條
井奥　　進君　三重縣四日市市鹽濱横須賀海軍建築部宿舍内
濱田　正範君　北區都島本通７の50都島第五小學校新築工事場淺沼組出張所

防空建築施設に關する講演會概況

主催建築學會・日本建築協會

建築學會と共同主催による本講演會は、四月以來各般の準備を整へ中部軍司令部、大阪府、防空協會大阪支部、後援の下に、去る五月二十日二十一日の二日間に亘り大林組本店講堂に於て豫而案内せる次第によつて開催、兩日共終始盛會裡に終了したり。

本催は各方面より非常な好評を以て迎へられ、忽ち滿員となり多數申込の工場に對し人員制限するの止むなきに至りたる程の盛況であつた。

第一日

定刻中西主記司會の下に開會

宮城遙拜

皇軍將士の武運長久と英靈に對し默禱を捧げたる後井上新二氏紹介登壇、井上副會長は片岡會長急據東上の爲代理として別項の通り開會の辭を述べたり。

次に新海講師は工場防空外數項圖表及パンフレットを參照しつゝ約一時間に亘り詳細講演。

此の間五分間休憩後再開

小宮講師は工場變電所外數項に亘り約一時間半圖表及パンフレット參照詳細講演。

此の間司會者より左記注意をなす

1. 講演内容　質疑應答は書面にてなす事
2. 明二日目も聽講券持參ありたき事
3. 明日は正六時開會の事
4. 明日は多少座席餘裕あるはづにつき工場方面人員を制限したる向一二增員差支へなき事
5. 本夕は次の映畫にて閉會とし解散後は階段より下りられたき事

次に　映畫

空襲下の列强、工場鎭山の防空

解散九時三十分

本夕の入場者　五百餘名

パンフレット賣上　約三百部

第二日

定刻正六時開會（開會前圖表、模型寫眞等會場へ展示）

玉置主記司會の下に前日に引續き左記により進行

イ、星野講師は僞裝問題に就き圖面模型及講演資料を參照しつゝ約一時間に亘り講演さる

ロ、阿部講師は防空施設、學校防空其の他につき此れ又圖表資料參照約一時間半に亘り詳細熱心に講演あり。

開會の辭

片岡會長（代理）

今般建築學會と吾が日本建築協會と共同主催の下に本講演會を開催致しますに就きまして、中部軍司令部大阪府、防空協會大阪支部の御後援を賜りました事を感謝いたします。

尙各方面より多大の御共鳴を得まして、かく多數御來聽を辱ふしました事を厚く御禮申上げますと共に意外の盛況であつた爲に會場狹隘を來たし萬事不都合勝の點御許しを願ひます。

更に工場關係方面よりは、多數の御申込を受けまして、これは私共の最も歡迎する處なるにも不拘、會場の都合で、其の人員を制限せねばな

らぬ結果となりました事を、此の席より御詫び申上げます。何卒御許し下さい。

今夕は學會協會外の方も多數御參集の事でありますので、私共が多年絶叫し來つて居ります都市防空問題と本講演會開催の主旨を簡單に申上げ將來一層の御共鳴と私共の事業に御援助を御願ひしたいと思ひます。

東京に本部を有する建築學會に於きましては、昭和拾壹年より委員會を設け、都市防空上建築に關する諸問題につき調査研究を進めて居りますが、就中防護室、工場防空施設、僞裝、防火、防空對策及宣傳、防空計畫等に力を注ぎ、今日迄成案を得たるものより其の都度諸建議申請、圖書及パンフレツト發行講演會展覽會の開催等アラユル方面より非常な努力を續けて居り、本講演會も其の事業の一端であります。

又日本建築協會に於きましては昭和九年初めて防空演習の事が關西に開始せられました時より都市武裝促進幹事會を設置し、防火建築の促進普及避難設備の完備、防火地區の擴大、環狀道路と公園廣場の設置、航空港建設、防空に關する宣傳等に關し遂年之が調査研究と其の實現に邁進し、今日迄に第一回防空演習開始以來每回參加し、論文並にポスターの募集記錄其他圖書發刊トーキー映畫の作成發表、僞裝遮蔽工場燈火管制、展覽會、講演會、座談會の開催其の他重要建議申請等は片岡會長直接關係大臣に手交具申するなど之等の目的貫徹に努力し來り、建築學會と殆ど同一目的の下に東西相呼應して防空事業に不斷の努力を爲しつゝあるものであります。兩會が今日迄なし來つたこの調査研究運動の結果は、既に新聞其の他にて御承知の通り法令に、或は建設に防火改修に都市計畫に相當實現されつゝありますのは洵に私共の欣快とする所であります。

今回の講演會も此の兩會の平素の趣旨に基き開催しましたもので、更に各方面一層の御協力を希ひ聊かなりとも緊迫せる現下の時局に卽應される資料の一端ともならば、私共の光榮とし亦本講演會の意義の存する所かと存じます。

時局は目下一應緩和されたかの感がありますが、國際情勢は刻々に惡化の一途を辿つてゐます。此の際防空施設の完備は焦眉の急を要するものでありまして、殊に工場の防空施設は其の性質の重要性に鑑み、緊急なる問題であります。其の意味で御靜聽を煩し度いと思ひます。倘御多忙中ながら何卒明二日目も是非御繰合せ御來會下されんことを御願ひしまして、御挨拶に代へる次第で御座ゐます。

閉會の辭

今林　副會長

片岡會長が十九日夜より急に上京され、昨夜閉會の辭を申述べる事が出來ませず、井上副會長が代理いたしましたので、私が閉會の御挨拶と御禮を申上げ度いと存じます。

此度建築學會と日本建築協會が共同主催で此の講演會を開催いたしました處、御後援者始皆樣方より多大の御賛同を頂きまして多數の御來場を辱ふし、非常な盛會裡に玆に此の會を閉ぢる事になりました。

當初本講演會は稍專門的に近い話なので、學會協會員並に工場關係の方々を目標として大阪、神戸、京都で講習會にしてはとその意見もありましたが、東京より態々西下して頂く講師の關係上、大阪一個所で講演會を開く事となりました樣な次第で、講師の方も少い時間で其の調査研究の一端を御話しになるのに御骨が折れた事と思ひますが、皆樣に於かれましても興味的には薄い堅いお話を二日間に亘り熱心に御聽講下さいました事を厚く御禮申上げます。

逼迫せる現下の非常時に皆樣が防空問題に關し不斷の御研究をなされつゝあることは申す迄もありませんが、此の講演會が其の資料の一端ともなり聊かなりとも御參考になりますならば私共の欣快とし、又本催しが、意義ある事であつたかと存じます。

終りに臨みまして井上氏が述べました通り意外の盛況を見ました爲、會場狹隘を來たし御申込を御斷りした向きもあり、或は資料印刷物の不足など大變不行届と御不便を與へました事を深く御詫び申上げます。

防空施設が急務である事も今更申す迄もありませんが、其實施に當つては皆樣の御盡力なくしては實現し得ないのであります。どうか邦家の爲其の事業の速かに遂行されます樣に御努力をお願ひ致す次第であります。

玆に後援者及講師並に皆樣に對し深甚の感謝を表しまして御挨拶の言葉と致します。



建築材料陳列場出品者

棚番號	材料種別	出品者	棚番號	材料種別	出品者
1	プリズム、鏡遣、彫刻各種硝子	岩城硝子株式會社	34	コンクリート型枠離脫劑	內外建材合資會社
2～3	ギルソイドルーフキング	大阪田島應用化工株式會社	35	ドアーハンガー	平松鈎戸車製造所
4	エターナイト	木下謹三商店	36	OSC建築金物	大信洋行大阪支店
5	鋼製建具建築材料	三機工業株式會社	37	大理石及人造石	矢橋大理石商店
6	建築用衞生陶器、磁器タイル	陶華商會	38		
7～8	六甲スレート日本石綿盤六甲タイル	野澤幸三郎商店	39	建築用陶器及工藝品	泰山製陶所
9 (1) (2)	防空塗料ペトナー 八光クリート板、ピカベライト、ピカベ配電盤	清光社防空部 八光建材工業所	40	米原式武者窓、換氣天窓、防空換氣屋根	米原商店
10	ロールブラツグ、ストツプリーク	ユニオントレーヂングコンパニー	41～42	ラス類一式	奥村重兵衞商店
11	チツソライト板	日本窒素肥料株式會社	43	耐火塗料	東洋理化學工業所
12～13	色彩、彫刻硝子	大阪精工社	44～45	建築用金屬材料ホワイトブロンズ水道鋼管	住友金屬工業株式會社
14	フアイバーコンヂット及フアイバーダクト他附屬品	株式會社影久商店	46	板硝子	日本板硝子株式會社
15	衞生器具	大阪城口研究所	47	ケンテキス	淺野物產株式會社建材部
16	電燈照明器具	林電器製作所	48	特許送風式井筒基礎工	株式會社公成社
17	衞生器具	西原衞生工業所	49		
18	耐火木材、耐火塗料	愛國化學工業株式會社	50～51	日昭ライト板、日昭化粧板	日昭ライト工業株式會社
19～20	衞生陶器及附屬品	東洋陶器株式會社大阪出張所	52	キング合成砥石、モザイツク	東寶產業株式會社
21	セメント混和材コーアイラト、セメント石灰着色劑セイコーシキソ	清光社	53	石綿スレート	淺野スレート株式會社
22	內裝用藥掛タイル	淡陶株式會社大阪支店			
23	モザイツク・タイル	草葉陶磁器研究所	54～55	オリエンタルメタル瓦板	オリエンタルメタル製造所
24	ブーバー竹筋	堀富商工株式會社	56	ベニヤ板見本ドアーセクション	內外木材工藝株式會社
25	日興スレートテツクス	ミヤマ商會	57	專賣特許特殊ゴム敷物	ライトラバー工業合資會社
26～27	テラカツター衞生陶器	大阪陶業株式會社	58	富士テツクス、ライトテツクス、スレート、コーナービード	福島合名會社
28	タイル、テラカツター、煉瓦、合成砥石各種	大阪窯業株式會社	59	防火塗料プロテツクスペルコ	大日本塗料株式會社
29			60	屋根瓦各種	高松菊治郎商店
30	テラカツタータイル	伊奈製陶株式會社	61	耐酸防水材料	田中昌司商店
31			62～63	塗料及顏料	日本ペイント株式會社
32	硝子製品、旭ラツカー	旭硝子株式會社			
33	ドアーチエツク、フロアーヒンヂ、スプリングヒンヂ	日本ドアーチエツク製作所	64	纖維製絕緣板、エムテツクス	日東物產株式會社

棚番號	材料種別	出品者	棚番號	材料種別	出品者
65	パールワックス リノリユームワックス	金田化學研究所	92～93		
66	塗料及防腐劑	神東塗料株式會社	94～95		
67	防水劑ロータス	關城化學工業株式會社大阪營業所	96		
68	硝子製品	株式會社島田硝子製造所	97		
69			98	瀨戸燒瓦一式	瀨戸燒瓦關西出張所
70			99	日之出印アスファルト加工品	日本建築紙工大阪支店
71	朝日鐵スレート、波形スレート	朝日スレート株式會社	100	洋室家具裝飾	中原家具裝飾店
72	防空用旭暗幕	旭レール株式會社	101		
73			102		
74	エダニウトパイプ	野田合名會社	103		
75	陶製階段用欄間、同床下換氣窓	鍋裏枝町工場	104		
76	左官壁材料一式	南育宏本店	105	波型石綿スレート、石綿スレート、光り波型ガラス	日本スレート株式會社
77	田中式防空暗幕、特許モリノイト不燃板	有限會社田中商會	106	強性ライト	日本特殊鑛土株式會社
78	放熱器、放熱管、冷暖房換氣設備用品	理化學興業株式會社	107	洋瓦各種	日本洋瓦株式會社
79			108	建築參考塗料見本	關西ペイント株式會社
80			A	リノリユーム、リノタイル、リノウオール	東洋リノリユーム株式會社
81			B_1	防火浸塗劑セロン	伊藤元商店
82			B_2	美　粟	美粟工業所
83			B_3	電線管及附屬品	合資會社福島商店
84～85	ルーフイング スーパライト	佐久間工業株式會社	B_4	リーダ液アートガン	リーダ建材工業株式會社
86～87	ニツチクラス及硬化竹筋	日本竹筋工業所	C_1	造園設計圖	須藤造園研究所
88～89	町野式水道消防器具 福山式自働洗滌裝置	日本機械工業株式會社大阪支店	C_2～C_3	ラスモザイク	日本陶纖社
90	厚型スレート	厚型スレート株式會社	C_4		
91			D_1	やよひスレート	松井商店
			D_2	コンヂウトチユーヴ	昭和コンヂウト株式會社
			D_3	寄木床張	二葉屋
			南窓下		

編輯後記

編輯常務

大下順三郎　岡田孝男

小林清　増井敏克

綠濃き七月號は「城郭」號として、茲に御目通りする。先、城郭研究の第一人者である文部省考證官鳥羽正雄氏より「日本城郭の種類及び構造」名古屋高工教授城戸久氏よりは「近世日本城郭における防備的施設」それに先程まで文部省國寶建造物調査室にあつて、鋭意國寶指定の調査に專念してをられた澤島英太郎氏より、先年國寶建造物に指定京都市に下賜された「二條城二の丸」についての寄稿を得たことは、會員諸君と共に喜びたい處である。

加ふるに、藤島亥治郎博士よりは、博士曾遊の地たる「倫敦塔」についての秀編を頂き、これを讀むに、今や時代は移り變りドイツ空軍爆撃下にさらされつゝあるを見て、感慨深きものがある。尙、其他御多用中の處まげて御寄稿賜つた古川・佐藤氏に對し厚く御禮申し上げる。

街には獨ソ開戰の號外が飛び、歐洲の空には暗雲益々たゞよふ。こゝしばらくは梅雨空の如くうつとうしさが續くであらう。その折も折、その昔、一國を守る備へとして造られた「城郭」についての智識を新たにするも、又興深きことゝ信ずる。

會告の示す通り、新たに編輯常務として増井敏克氏を迎へ、更に、編輯係として山形憲一君を得て、編輯陣を强化する事を得た。今後の活躍を刮目して待たれよ。

建築と社會

第24輯　第7號

毎月1回1日發行　定價(送) 1册 50錢(郵稅2錢) 12册 6圓(〃 24錢)

昭和16年6月25日印刷　昭和16年7月1日發行

發行・編輯兼印刷人　戸川弘
大阪市北區朝日ビル日本建築協會內

印刷所　ブラトン印刷社
大阪市西區江戸堀南通2丁目13番地

發行所　社團法人 日本建築協會
大阪市北區中之島3ノ3 朝日ビル
電話曇北濱(23)4501番(9)
振替口座大阪39975番

特約販賣店　柳々堂書店
大阪市西區京町堀羽子板橋西
電話土佐堀2440番
振替口座大阪2084番

禁轉載

本號に掲載せるものは、一切これを無斷にて轉載し又は單行本に上梓その他の複製行爲をなすことを禁ず。

廣告掲載料金

グラビヤ(第1頁)	1頁	1回	55.00
グラビヤ(第2頁)	1頁	1回	45.00
後附	1頁	1回	25.00
後附	½頁	1回	15.00
記事中	¼頁	1回	20.00
アート(中挿)	½頁	1回	25.00
表紙2	¼頁	1回	25.00
表紙3	¼頁	1回	20.00
表紙4	¼頁	1回	30.00

廣告掲載御申込は本會へ直接願ひます。
本誌購讀御注文はすべて前金で本會直接又は特約店へ、振替貯金又は爲替で御拂込を願ひます。郵券代用は一割增、代金引換はお斷り致します。

●第二四集　第七号　掲載広告一覧（掲載順）

村田商会
大野製作所
松下電気工業
協和製作所
南満鉱業建材
三菱商事
南満建材工業所
柳々堂書店
平松釣戸車製造所
萩工業貿易
浅野スレート